

岩手県文化財調査報告書第157集
平泉遺跡群発掘調査報告書

高 館 跡

— 第7～10次内容確認調査 総括編1 —

2020年3月

岩手県教育委員会





岩手県文化財調査報告書第157集
平泉遺跡群発掘調査報告書

高 館 跡

— 第7～10次内容確認調査 総括編1 —

2020年3月

岩手県教育委員会

序

高館跡は、源頼朝に追討された源義経の終焉の地とされる古くから広く知られた旧跡で、平泉を代表する文化遺産の一つです。近世以降には、松尾芭蕉の足跡とともに広く知られ、平成28年には「おくのほそ道の風景地」として国の名勝に指定されています。

この地は古くから義経堂とともに保護され、歴史的な風土を持つ景勝地としても知られています。また、過去には、昭和39年に岩手大学が主体となって高館跡の第1次調査が行われ、その後、岩手大学及び平泉町教育委員会によって複数回の調査が行われてきました。過去の調査の結果、堀跡・溝跡・掘立柱建物跡等の遺構が確認され、かわらけや国産陶器・中国産の輸入磁器なども出土しています。

今回の岩手県教育委員会による第7次～第10次の4か年にわたる発掘調査では、12世紀の堀跡及び整地層が確認され、平泉文化遺産の調査研究をより一層深めるために貴重な資料を得ることができました。

また、柳之御所遺跡について、これまで主に堀内部地区の調査と整備を進めてきましたが、堀外部地区やその周辺については不明な部分があります。今回の調査成果により、柳之御所遺跡と高館跡の比較・検討が可能となり、今後の調査と研究の進展により、史跡整備の充実や世界遺産拡張登録を目指した調査研究にとって、重要な成果になることが期待されます。

最後に、発掘調査の実施と報告書作成に当たり、御指導・御協力を賜りました平泉遺跡群調査整備指導委員会の委員、文化庁、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会をはじめ関係各位に深く感謝を申し上げますとともに、本書が平泉文化研究発展の一助になれば幸いです。

岩手県教育委員会

教育長 佐藤 博

例 言

1. 本報告書は平泉町平泉字柳御所に所在する高館跡（遺跡番号 NE76-0055）の第7～10次発掘調査の成果を収録したものである。
2. 本書は第7次～第9次調査まで概報として報告した内容を正式にまとめたもので、遺構・遺物をまとめた総括編1と内容の総括を行う総括編2として構成され、本書はそのうち遺構遺物の事実関係を報告した総括編1である。
3. 岩手県教育委員会では柳之御所遺跡の調査を継続的に進めており、堀内部地区の調査及び整備、堀外部地区の調査を行ってきているところである。今回の高館跡の調査は、近年の関連遺跡の調査成果や社会状況などの周辺動向を鑑み、高館跡の内容解明が柳之御所遺跡の調査にも重要な意義をもつと考えられたため、実施したものである。なお、調査目的及びトレンチ設定の目的については本文中にて触れる。
4. 野外調査・室内整理の担当は本文に記載した。うち主たる担当は以下の通りである。
平成26年度 野外調査・室内整理：櫻井友梓・伊藤みどり
平成27年度 野外調査・室内整理：櫻井友梓・村上拓
平成28年度 野外調査・室内整理：櫻井友梓・村上拓
平成29年度 野外調査・室内整理：櫻井友梓・村上拓
平成31年・令和元年度 室内整理：菊池貴広
5. 調査期間は以下の通りである。野外調査はいずれの調査も柳之御所遺跡の調査と同期間に並行して実施した。
平成26年度 5月11日から11月30日
平成27年度 5月15日から11月30日
平成28年度 5月15日から11月30日
平成29年度 4月17日から9月30日
6. 本報告書は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課柳之御所担当で協議の上、I・II章を菊池貴広、III章を櫻井友梓・村上拓が執筆した。文末に執筆者の名を記している。IV章は自然科学分析の委託業務に伴う成果の報告である。
7. 地形測量は、株式会社一測設計及び第一航業株式会社に委託した。
8. 各試料分析・鑑定は次の機関に委託した。
放射性炭素14年代測定／パリノサーヴェイ（株）（平成26年度）
放射性炭素年代（AMS測定）／（株）加速器分析研究所（平成28年度）
9. 本報告書作成に係るデータや図版等は岩手県教育委員会が保管している。

目 次

第 I 章 緒言	1
第 1 節 高館跡の概要	1
第 2 節 調査の目的と経過	5
第 3 節 野外調査と室内整理方法	8
第 4 節 指導委員会	9
第 II 章 高館跡の調査と研究	10
第 1 節 「吾妻鏡」にみえる源義経	10
第 2 節 近世文献における高館跡	11
第 3 節 近年の研究での高館跡	12
第 4 節 高館跡の過去の調査履歴	14
第 5 節 高館跡の調査研究の課題	21
第 III 章 発掘調査の内容	22
第 1 節 調査の概要	22
第 2 節 第 7 次調査の遺構と遺物	25
第 3 節 第 8 次調査の遺構と遺物	40
第 4 節 第 9 次調査の遺構と遺物	47
第 5 節 第 10 次調査の遺構と遺物	64
第 IV 章 自然科学分析	78
第 1 節 岩手県平泉町高館跡第 7 次の自然科学分析調査	78
第 2 節 高館跡第 9 次調査における放射性炭素年代 (AMS 測定)	81

写真図版目次

図版 1 高館跡遠景写真	95	図版 10 第 9 次調査遺構写真 (3)	104
図版 2 第 7 次調査遺構写真 (1)	96	図版 11 第 9 次調査遺構写真 (4)	105
図版 3 第 7 次調査遺構写真 (2)	97	図版 12 第 9 次調査遺構写真 (5)	106
図版 4 第 7 次調査遺構写真 (3)	98	図版 13 第 9 次調査遺構写真 (6)	107
図版 5 第 8 次調査遺構写真 (1)	99	図版 14 第 9 次調査遺構写真 (7)	108
図版 6 第 8 次調査遺構写真 (2)	100	図版 15 第 9 次調査遺構写真 (8)	109
図版 7 第 8 次調査遺構写真 (3)	101	図版 16 第 9 次調査遺構写真 (9)	110
図版 8 第 9 次調査遺構写真 (1)	102	図版 17 第 10 次調査遺構写真 (1)	111
図版 9 第 9 次調査遺構写真 (2)	103	図版 18 第 10 次調査遺構写真 (2)	112

図版19	第10次調査遺構写真(3)	113
図版20	第10次調査遺構写真(4)	114
図版21	第10次調査遺構写真(5)	115
図版22	第10次調査遺構写真(6)	116
図版23	第10次調査遺構写真(7)	117
図版24	第7次調査出土遺物(1)	118
図版25	第7次調査出土遺物(2)	119

図版26	第7次調査出土遺物(3)	120
図版27	第7次調査出土遺物(4) 第8次調査 出土遺物	121
図版28	第9次調査出土遺物(1)	122
図版29	第10次調査出土遺物(1)	123
図版30	第10次調査出土遺物(2)	124
図版31	第10次調査出土遺物(3)	125

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	12世紀代の平泉の遺跡	4
第3図	接待館遺跡遺構配置図	13
第4図	高館跡第3次調査遺構配置図	15
第5図	高館跡第5次調査遺構配置図	16
第6図	高館跡第1・6次調査遺構配置図	17
第7図	高館跡第1・6次調査遺構配置図	18
第8図	柳之御所遺跡第20次調査位置図	19
第9図	柳之御所遺跡第20次調査遺構配置図	20
第10図	調査区配置図	23
第11図	調査区位置図区割り図	24
第12図	調査区位置図(1)	25
第13図	第7次調査1トレンチ～5トレンチ平 面図	26
第14図	第7次調査2トレンチ 7SD1平面図	28
第15図	第7次調査2トレンチ 7SD1断面(1)	29
第16図	第7次調査2トレンチ 7SD1断面(2)	30
第17図	第7次調査3トレンチ 平・断面図	33
第18図	第7次調査4・5トレンチ 平面図	34
第19図	第7次調査出土土器類実測図(1)	36
第20図	第7次調査出土土器類実測図(2)	37
第21図	第7次調査出土土器類実測図(3)	38
第22図	第7次調査出土土器類実測図(4)	39
第23図	調査区位置図(2)	40
第24図	第8次調査1トレンチ平面図	42

第25図	第8次調査2トレンチ平面図	43
第26図	第8次調査2トレンチ断面図	45
第27図	第8次調査出土土器類実測図(1)	47
第28図	第9次調査1トレンチ平面図	49
第29図	第9次調査1トレンチ断面図	50
第30図	第9次調査2・3トレンチ平面図	52
第31図	第9次調査2・3トレンチ断面図	53
第32図	第9次調査4・5トレンチ平面図	57
第33図	第9次調査4・5トレンチ断面図(1)	58
第34図	第9次調査4・5トレンチ断面図(2)	59
第35図	第9次調査4・5トレンチ断面図(3)	60
第36図	第9次調査出土土器類実測図(1)	62
第37図	調査区位置図(3)	63
第38図	第10次調査1トレンチ平面図	66
第39図	第10次調査1トレンチ断面図(1)	67
第40図	第10次調査1トレンチ断面図(2)	68
第41図	調査区位置図(4)	69
第42図	第10次調査2トレンチ平面図	70
第43図	第10次調査3トレンチ平面図	72
第44図	第10次調査3トレンチ断面図	73
第45図	第10次調査出土土器類実測図(1)	75
第46図	第10次調査出土土器類実測図(2)	76
第47図	第10次調査出土土器類実測図(3)	77
第48図	高館跡の暦年較正結果	80
第49図	高館跡の暦年較正結果	84

挿表目次

表 1	高館跡の調査計画	6	表 7	第 9 次調査出土遺物	61
表 2	高館跡の調査	7	表 8	第 10 次調査出土遺物	74
表 3	指導委員会名簿	9	表 9	高館跡の放射性炭素年代測定結果	80
表 4	第 7 次調査出土遺物	35	表 10	放射性炭素年代測定結果	83
表 5	第 8 次調査出土遺物	46	表 11	放射性炭素年代測定結果	83
表 6	TD9-T4・T5 区土層対応表	56	表 12	遺物観察表	86

I 章 緒 言

第1節 高館跡の概要

(1) 地理的環境

高館跡は岩手県西磐井郡平泉町平泉字柳御所に所在する。緯度・経度は東経141度6分53秒、北緯38度59分47秒に位置し、遺跡内の標高は39～60m程で、柳之御所遺跡西側の丘陵に隣接する。中尊寺が所在する関山丘陵から東側にのびる丘陵の縁にあたる。

遺跡が所在する平泉町については岩手県南部に位置し、面積6,339k m²、人口約7,400人の町である（令和元年度現在）。岩手県南部から中央部に形成される北上盆地は、海拔1,500～2,000mの奥羽山脈が西に連なり古生代を主とする北上山地が東に、南端は西から張り出す磐井丘陵に接する。平泉町が立地する北上盆地南部は奥羽山脈から発達した大小の扇状地が南北に並び、平泉町の北には胆沢扇状地が広がる。なお、北上川には平泉町の北側で衣川、南側で太田川が合流する。この2つの河川に囲まれた範囲は、北上川を挟んで東側に標高596mの東稲山を主峰とする東稲山地、西側に標高200mほどの衣川丘陵が広がり、この河川と丘陵に囲まれた平坦な地形面が概ね、12世紀当時に奥州藤原氏が拠点を築いた「平泉」の中心的な範囲にあたる。

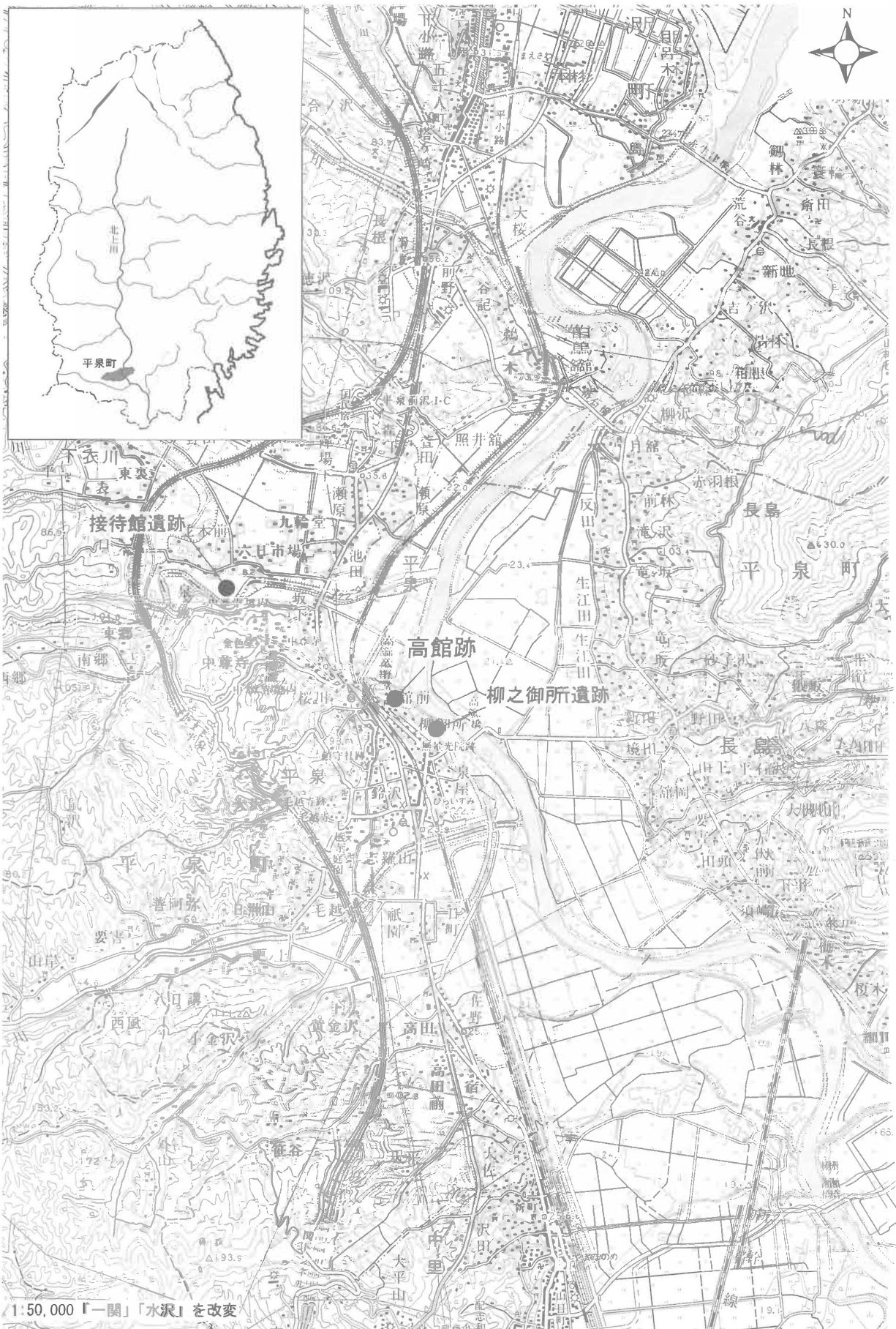
(2) 周辺の遺跡

高館跡が所在する地形は後期旧石器時代には安定した地形面であったと考えられているものの、平泉町域では旧石器時代に遡る遺物は確認されていない。北側の胆沢扇状地では後期を中心に旧石器時代の遺跡が複数確認されているほか、南側の一関市花泉町域には動物遺存体などの出土で著名な花泉遺跡が知られる。

平泉町では縄文時代以降には、現在の地形面が形成されたと考えられている。調査件数は多くないが、発掘調査事例でもこの時期から遺構・遺物が確認されている。北上川西岸では泉屋遺跡で縄文時代後期から晩期の集落跡が確認されている。また、柳之御所遺跡でも縄文時代後期から晩期の土器が出土しているほか、堀外部では剥片が集中した土坑も確認されている。北上川東岸の長島地区では縄文時代後期の新山権現社遺跡や、縄文時代晩期の中村遺跡が調査されている。また、長島地区のうち標高の低い現在の北上川沿いの沖積地においても、本町Ⅱ遺跡などで縄文時代の遺跡が確認されている。

北側の胆沢扇状地では弥生時代の遺跡も多く確認されているものの、平泉町域では弥生時代の遺構・遺物の調査事例は少ない。北上川西岸では当該時期の遺物が散見されるが、まとまった遺構は確認されていない。北上川東岸の里遺跡では、弥生時代中期の遺物が確認されている。

古墳時代の中期後半に、胆沢扇状地には角塚古墳が造営される。前期からも集落が確認されているほか、中半入遺跡のような豪族居館とも目される遺跡も確認されている。また、古代においても集落が多数形成されるほか、9世紀初頭には胆沢城に鎮守府が置かれる。平泉町域はおおむね現在の一関市域と合わせ、古代には陸奥国の範囲になり、磐井郡域にあたる。なお、磐井郡の成立時期や位置づけには未詳の部分が多い。発掘調査による考古学的情報も隣接諸地域と比して少なく課題も残る。平泉町域では古墳時代から8世紀代にかけての遺構・遺物は確認されていない。その後、9世紀か



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

ら10世紀代以降にかけて遺構・遺物が確認されるようになる。泉屋遺跡では竪穴住居跡が確認され、墨書土器の出土も注目できる。後掲するが、柳之御所遺跡でもこの時期の遺構・遺物が確認されている。北上川東岸の竜ヶ坂遺跡では灰白色火山灰(To-a)に覆われた水田跡が調査されている。水田からはヒトや動物の足跡が確認され、貴重な事例である。

東北地方北部では11世紀以降、安倍氏や清原氏などの地方豪族が勢力を伸ばす。衣川流域は安倍氏の拠点の一つとみられ、長者ヶ原廃寺跡は安倍氏に関連する寺院と考えられている。平泉町域ではこの段階の様相は明確ではないが、中尊寺でも12世紀を遡るとみられる大溝が確認されている。

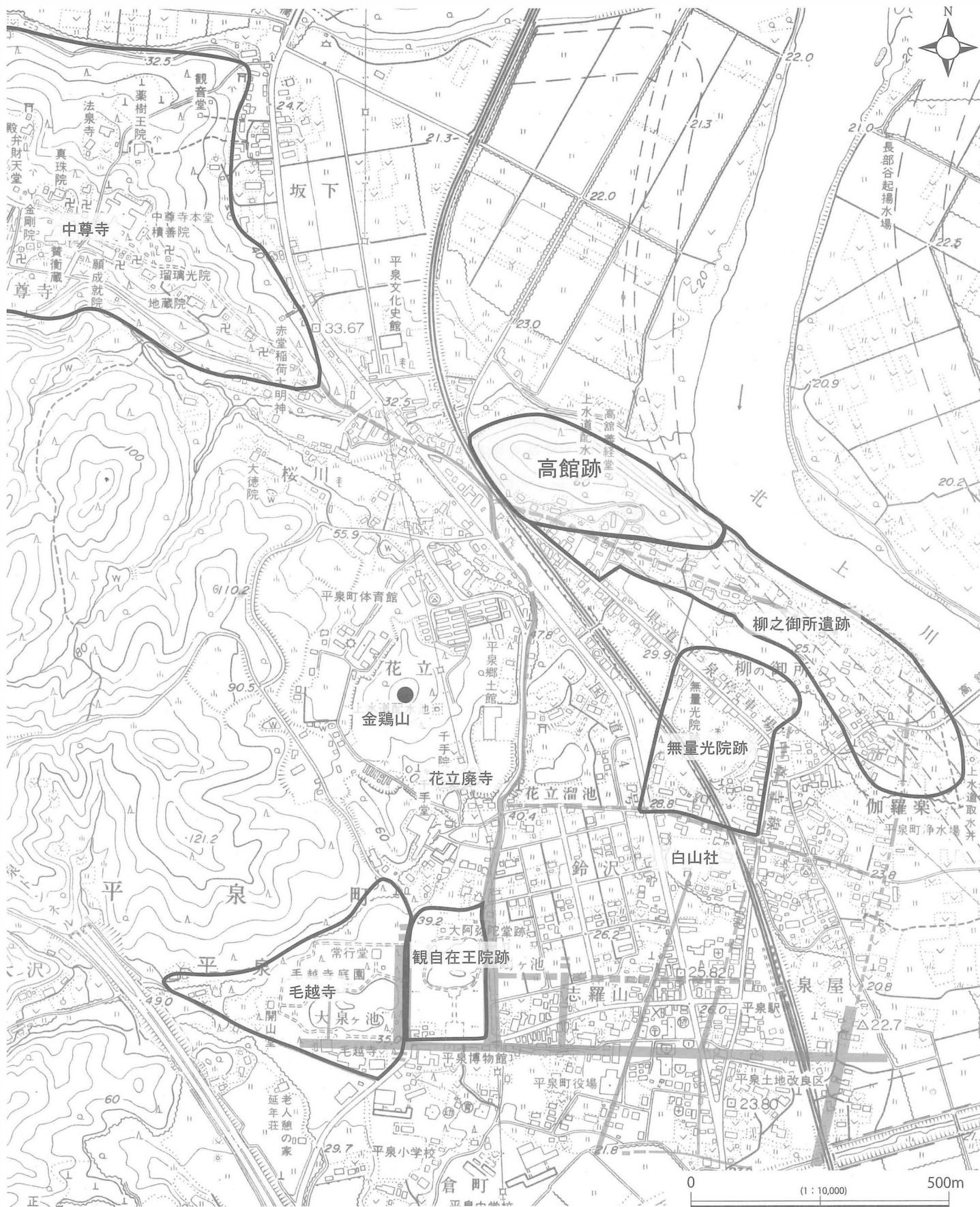
奥州藤原氏が平泉に拠点を置く12世紀代には、北上川西岸の現在の平泉町中心部を分布の中心として多くの遺跡が分布するようになる。高館跡の周辺では、遺跡の東に柳之御所遺跡、猫間が淵跡、無量光院跡が隣接して位置し、南には伽羅之御所跡が接している。無量光院跡は三代秀衡が建立した寺院跡である。これまでの発掘調査で宇治平等院と類似しつつも、細部に異なる特徴をもつ伽藍や遺構の内容が確認されている。上層の遺構が良好なため部分的な確認にとどまるが、下層にも遺構が存在することが遺跡内で確認されており注目される。伽羅之御所跡は地名から『吾妻鏡』に記載される伽羅御所に比定する見解もある。これまで複数の地点で調査が行われ、貴重な遺物も出土しているが、小規模の発掘調査にとどまり遺跡の様相や性格を明確に示すものは確認されていない。近年の調査により周辺部で溝跡等が確認されており、無量光院跡を含めた周辺での区画の様相も検討されつつある。また、現在義経堂が所在する高館跡は、源義経の伝承とともに知られ、過去の調査で12世紀代の堀が確認されている。

平泉町の現在の中心部ではこの他に志羅山遺跡や泉屋遺跡、倉町遺跡といった当時の平泉の街並みに関連する遺跡が調査されている。志羅山遺跡や泉屋遺跡では東西大路やそのほかの道路跡、それらに接する区画で建物跡などが検出されている。また、倉町遺跡では東西大路沿いに倉庫の跡が確認されている。これらの成果から、平泉の拠点的な範囲に、奥州藤原氏三代によって道路跡や街並みが形成され、中尊寺や毛越寺などの寺院が建立され繁栄した様子が理解できる。現在、白山神社がある白山社遺跡なども、都市域の四方を捉える上で重要な要素でもある。四方鎮守の存在も文献史料から指摘されるところだが、確定には至っていない。さらに、北上川を挟んだ東岸域でも遺物や遺構の量は少なくなるものの、調査が実施されている。本町Ⅱ遺跡では墓域が確認され、里遺跡や月館大師堂など複数の遺跡や地点で12世紀代の遺構・遺物が確認されている。

近年では、奥州市接待館遺跡が確認されたほか、かわらけ生産窯が確認された奥州市白鳥館遺跡などの調査も行われており、当時の平泉の範囲が衣川を挟んで北側に広がることが明らかになっている。しかし、これらの平泉の繁栄の多くは政権都市としての性格もあいまって、一部の寺院を除き、奥州藤原氏の滅亡とともに失われていく。

奥州藤原氏が滅亡して以降、平泉保が置かれ、葛西氏が拠点を置いたことが知られる。考古資料の面からは、志羅山遺跡の一部で遺構・遺物が確認されるなどしているものの、前代の12世紀代の様相と大きく異なり、分布は限定的である。中世後期段階には城館跡が北上川東岸を中心に確認されているほか、本遺跡でも該期の遺構が確認されている。

近世には岩手県南部は仙台藩領となる。現在の平泉町内を走る奥州道中が整備され、一里塚などが築かれた。また、北上川舟運が活発に利用され、柳之御所遺跡の遺跡範囲には御蔵場が置かれ舟運の拠点となった。このほか、太田川と北上川に面した泉屋遺跡でも近世段階の屋敷地が確認されている。なお、無量光院跡の整備が行われるなど、伊達氏によって平泉の文化財が顕彰されたことも、現在にこれらの資産が伝わる要因となった。



第2図 12世紀代の平泉の遺跡

第2節 調査の目的と経過

(1) 調査の目的

岩手県教育委員会では柳之御所遺跡の調査整備をこれまで継続して行ってきた。柳之御所遺跡は大規模な堀によって区画され、堀内部地区とその堀外部地区に分かれる。これまでの継続的な内容確認調査により、特に堀内部地区については多くの範囲が調査され、その内容が示されつつある（岩手県教育委員会 2018・2019）。また、高館跡と接する堀外部地区については平泉町教育委員会によって調査が行われているほか、岩手県教育委員会でも平成30年度より内容確認調査を実施している。

柳之御所遺跡堀内部地区の様相が明らかになるのに合わせて、平泉町内の各遺跡でも多くの調査が行われていることは周知の通りである。各遺跡はそれぞれに機能を持つが、当然ながら同時代においてそれぞれの遺跡が相互に関連を持って機能しており、それらの関係などをふまえた平泉中心域の様相の解明が課題として考えられている。

そのような中で、平泉遺跡群調査整備指導委員会及び世界遺産の拡張に係る各種の委員会において、「都市平泉」として、柳之御所遺跡の顕著な普遍的価値を証明するために柳之御所遺跡が高館跡と一体の居館であることを明らかにする必要があること、また、「柳之御所遺跡と一体の範囲について、史跡への追加指定などの保護措置などを行い、追加登録資産対象とする必要性があることについて指摘を受けた。これを受け、柳之御所遺跡を世界遺産「仏国土（浄土）として検討を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の拡張として、追加登録をするために必要な考古学的調査を実施することとした。

また、実施するにあたって、11世紀代に出羽国に拠点を築いた清原氏の居館である秋田県横手市の大鳥井山遺跡の調査成果とその検討において、柳之御所遺跡との地形的な類似が指摘されていることから、高館跡の調査によって、清原氏の系譜を引く遺跡であることが解明されることも期待された。

そこで周辺調査の状況なども鑑み、岩手県教育委員会では、調査計画を策定した上で計画的な内容確認調査を実施することとし、大きく下記の2つの課題を想定し調査を実施した。

○高館跡における12世紀代の遺構の分布とその範囲の検討

柳之御所遺跡に近接する高館跡について、柳之御所遺跡と同時期に機能した遺構の内容やその分布範囲を検討することを目的とした。これまで部分的な確認により12世紀代の高館跡が機能したことが指摘されてきたが、その範囲や内容を明らかにすることにより、柳之御所遺跡の堀内部地区及び堀外部地区と近接する範囲の様相を明らかにし、当時の政治行政の拠点がどのような形態をとっていたのか把握することを目的とした。拠点域形成の背景や内容を歴史的な流れの中に位置づけることを目的とし、柳之御所遺跡の検討や平泉遺跡群の拠点地区の内容のより一層の明確化が可能になることを意図した。

○高館跡の機能と柳之御所遺跡との関係の検討

高館跡の12世紀代における機能を明確にすることを目的とした。柳之御所遺跡に近接する位置の遺構内容やその機能を検討することで、政治行政の拠点として機能した柳之御所遺跡との関連について把握検討することを目的としている。これにより奥州藤原氏の拠点の様相を明らかにし、当時の平泉の様相や奥州藤原氏の政治行政の在り方や背景などをより具体的に検討することを意図している。

なお、各トレンチの設定意図等については、第三章において記載する。

(2) 調査経過

調査に際しては、当初下記のとおり計画した(表1)。その後、調査の進展や成果に伴い、遺構の延長を精査する必要が生じたため、若干の変更が生じている。計画変更を行い、実際の調査は表2のとおりである。

表1 高館跡の調査計画

年度	調査内容	調査目的
H25	地形測量	調査地域の地形の把握
H26	発掘調査(面積330㎡) 室内整理(図面作成、調査の整理)	南側斜面の調査
H27	発掘調査(面積650㎡) 室内整理(図面作成、調査の整理)	南側斜面の調査 丘陵頂上部の平坦面の調査
H28	発掘調査(面積500㎡) 室内整理(図面作成、調査の整理)	丘陵頂上部の平坦面の調査
H29	発掘調査報告書の刊行	調査成果の公開

調査成果や進捗によって、調査計画より発掘調査を1年延長して実施しており、実際の調査経過は下記のとおりである。

平成25年度

【調査内容】 地形測量

【調査目的】 高館跡の調査を行うにあたり、周辺地形の確認を行い、遺構範囲の想定や調査計画の策定に有意な情報を得ることを目的とした。周辺の踏査を合わせて実施し、調査計画の策定を行った。

【担当職員】 岩渕 計、佐藤郁哉、櫻井友梓、伊藤みどり

平成26年度(第7次調査)

【調査内容】 発掘調査(191㎡)、室内整理(図面作成、調査の整理)

【調査目的】 平泉町教育委員会の調査で確認されている堀跡の位置を確認し、合わせてその連続する場所で、時期等の決定に有意な情報を得ることを目的とした。

また、丘陵頂部における遺構の分布状況を確認することを目的に、平坦面に調査区を設定することとした。

【調査日程】 平成26年5月11日～平成26年11月30日

【担当職員】 岩渕 計、大沢 勝、櫻井友梓、伊藤みどり

平成27年度(第8次調査)

【調査内容】 発掘調査(123.1㎡)、室内整理(図面作成、調査の整理)

【調査目的】 第7次調査で確認された堀跡について、周辺部へどのように延びるか確認し、高館跡の堀跡全体概要を把握することを目的とした。

また、丘陵頂部における遺構の分布状況を確認することを目的に、第7次調査の調

査区を一部拡張した。

【調査日程】 平成27年5月15日～平成27年11月30日

【担当職員】 岩淵 計、 淵上恭子、 櫻井友梓、 村上 拓

平成28年度（第9次調査）

【調査内容】 発掘調査（164.1 m²）、室内整理（図面作成、調査の整理）

【調査目的】 第7・第8次調査で確認された堀跡について、周辺部へどのように延びるか確認し、高館跡の堀跡全体概要を把握することを目的とした。

【調査日程】 平成28年5月15日～平成28年11月30日

【担当職員】 千葉正彦、 淵上恭子、 櫻井友梓、 村上 拓

平成29年度（第10次調査）

【調査内容】 発掘調査（133.5 m²）、室内整理（図面作成、調査の整理）

【調査目的】 第7～第9次調査の成果から周辺状況の確認の必要が生じたため、調査計画を変更して、新たに計画したものである。これまでの調査で確認された堀跡について、周辺部へどのように延びるのか、高館跡の堀跡の全体概要を把握することを目的とした。

特に、第7～第9次調査で対象とした範囲から外れる位置についても周囲の地形観察から遺構の分布が想定できる位置について、内容を確認することを目的に調査区を設定した。

【調査日程】 平成29年4月17日～平成29年9月30日

【担当職員】 千葉正彦、 淵上恭子、 櫻井友梓、 村上 拓

表2 高館跡の調査

年度	調査内容	調査目的
H25	地形測量	調査地域の地形の把握
H26	発掘調査（精査面積191 m ² ） 室内整理（図面作成、調査の整理）	第7次調査 堀跡の位置の確認、遺構分布調査
H27	発掘調査（精査面積123.1 m ² ） 室内整理（図面作成、調査の整理）	第8次調査 堀跡の追跡調査、遺構分布調査
H28	発掘調査（精査面積164.1 m ² ） 室内整理（図面作成、調査の整理）	第9次調査 堀跡の追跡調査、遺構分布調査
H29	発掘調査（精査面積133.5 m ² ） 室内整理（図面作成、調査の整理）	第10次調査 堀跡の追跡調査、遺構分布調査
H30	室内整理（図面作成、調査の整理）	
R1	室内整理（編集作業）	

第3節 野外調査と室内整理方法

(1) 野外調査

① 調査区の位置の把握

柳之御所遺跡の調査においては、遺構の測量や遺物の取り上げなどの作業に際し基準となるグリッドを（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）が、1988年から開始された緊急発掘調査に際して平泉町教育委員会と協議のうえ、旧日本測地系をもとに5×5mグリッドで設定している。

今回の高館跡の調査でも、隣接する柳之御所遺跡の調査成果やその基準グリッドとの整合性に留意する必要がある。一方で、グリッド標記をそのまま用いた場合、旧来の柳之御所遺跡のグリッド上から外れる部分が生じ、局地的なグリッド設定としては極めて広い範囲になってしまうことから、位置関係の把握に必ずしも有用ではないことが想定された。

このことから、高館跡の調査においては、世界測地系（現、日本測地系）の座標に基づいて位置関係の把握を行うこととし、本報告書の表記においても同様の表記を行なっている。また、柳之御所遺跡および周辺遺跡の位置関係の把握については、調査時に旧日本測地系の座標を把握していることから対照可能である。なお、遺構図版にそれぞれX・Y座標（日本測地系）を表記している。

② 粗掘りと遺構検出面

各位置で調査区を設定し、遺構検出面確認後、人力による表土除去を行った。一部は重機による掘削も行っている。その後、遺構検出を人力で行った。

③ 遺構名称

高館跡で使用した遺構の呼称は、柳之御所遺跡で用いている遺構名の呼称方法に準拠し、下記の略称を使用することとした。

SD：溝・堀 SK：土坑・柱穴の一部 SX：その他 P：柱穴

④ 遺構の精査と実測

遺構プランを確認後、一部の遺構について、埋土を掘り下げ精査を行った。平面図・断面図共に基準杭をもとに人手で作図したほか、委託した業者による地形測量を行った。

⑤ 遺物の取り上げ

遺構内出土遺物は、出土層位によって、底面・埋土下位・埋土中位・埋土上位などとして取り上げ、遺構外出土遺物はグリッド名と層位を記して取り上げた。

(2) 室内整理

① 遺構の整理

野外調査で作成した実測図は、遺構ごとに分類、点検、修正後にPCソフトによって、データトレース後、図版作成を行った。遺構図版の縮尺は図版の中にそれぞれスケールを付している。

② 遺物の整理

遺物は、洗浄・注記から開始し、仕分け・登録、接合、復元、実測、国産陶器等の拓影を行った後、PCソフトによるトレース、写真撮影、遺物図版・写真図版作成の順に整理作業を行った。

掲載図における遺物の縮尺は、かわらけ1/3、国産陶器・輸入磁器1/3で、図版の中にそれぞれスケールを付している。なお、遺構の埋土観察、遺物の色調観察に際しては『新版標準土色帖』を参考にした。

第4節 指導委員会

岩手県教育委員会では、柳之御所遺跡の調査・整備にあたって、平泉遺跡群調査整備指導委員会の指導・助言を得ながら事業を推進している。本指導委員会は、平成10年度に岩手県教育委員会が柳之御所遺跡の調査を計画的に進めるに際して、専門的な見地から指導助言を受けるために立ち上げたものである。平成10年に「柳之御所遺跡調査研究指導委員会」として設置した。

その後、平成13年度から整備事業等を推進していく必要性から、史跡整備や建築史学からの検討を行うため、「柳之御所遺跡調査整備指導委員会」と名称を改めた。

また、平成15年度からは周辺に分布する関連遺跡もあわせて検討を行う必要性から、「平泉遺跡群調査整備指導委員会」と名称を改めて柳之御所遺跡のみでなく関連する周辺の遺跡の指導助言を得るとともに、各分野で個別に検討を行うため「遺構検討部会」、「整備検討部会」、「保存管理計画検討部会」、「ガイダンス検討部会」の4つの専門部会を設置している。高館跡の調査を実施した平成25年度以降の「平泉遺跡群調査整備指導委員会」の構成委員は表3の通りである。それ以前の構成委員等については既刊の発掘調査報告書を参照されたい。

表3 指導委員会名簿（平成28年4月現在、役職は当時）

氏名	役職	部会
人間田宣夫	東北大学名誉教授	整備
遠藤セツ子	平泉メビウスの会事務局	整備
○ 岡田 茂弘	国立歴史民俗博物館名誉教授	保存・整備
小野 正敏	国立歴史民俗博物館名誉教授	遺構
坂井 秀弥	奈良大学教授	遺構
斉藤 利男	弘前大学名誉教授	遺構
佐藤 信	東京大学大学院教授	保存・整備
清水 擴	東京工芸大学名誉教授	遺構
清水 真一	徳島文理大学教授	遺構
関宮 治良	前平泉町商工会議所事務局長	整備
田中 哲雄	元東北芸術工科大学教授	保存・整備
◎ 田辺 征夫	奈良県立大学特任教授	遺構
玉井 哲雄	国立歴史民俗博物館名誉教授	遺構
西村 幸夫	東京大学大学院教授	保存

※ ◎委員長 ○副委員長 遺構：検討部会、保存：保存管理計画検討部会、整備：整備検討部会
(菊池)

第Ⅱ章 高館跡の調査と研究

第1節 『吾妻鏡』にみえる源義経

高館跡は江戸時代以降、源義経終焉の伝説とともに広く知られてきた。そこでここでは、『吾妻鏡』の記載から、平泉と源義経に関連する内容を確認する。

源頼朝による追討から逃れるため、源義経が奥州に身を隠すことになる経緯と義経終焉の様相（衣河館における記述）は『吾妻鏡』に記されている。そこで、『吾妻鏡』に記載される源義経に関する記述から、衣河館で自決するまでの経緯を確認することとする。なお、以下の書き下し文及び現代語訳等に際しては、永原慶二・貴志正造 1976『全譯 吾妻鏡』及び五味文彦・本郷和人 2008『現代語訳 吾妻鏡』に依拠している。

文治元年十一月十一日条

「義経等叛逆の事、申し請くるに任せて宣下せられをはんぬ。ただし追つて關東を誘へられるべきの由叡慮にあるところ、二品（源頼朝）の鬱憤興盛の間、日來沙汰の趣すでに相違しをはんぬ。ここに義経・行家叛逆を巧み西海に赴くの間、大物の濱において漂没するの由風聞ありといへども、亡命の條疑ふところなきにあらず。早く有勢の輩に仰せて、山林を尋ね搜し、その身を召し進ずべきの由、院宣を畿内近國の國司等に下さると云々。」

文治三年二月十日条

「前伊豫守義顯（源義経）、日來所々に隠れ住み、度々追捕使の害を遁れをはんぬ。つひに伊勢・美濃等の國を経て、奥州に赴く。これ陸奥守秀衡入道が權勢を恃むによつてなり。妻室男女を相具して、皆姿を山臥ならびに兒童等にかかる云々。」

文治三年九月四日条

「秀衡入道（藤原秀衡）、前伊豫守を扶持し、叛逆を發の由、二品（源頼朝）訴へ申さしめたまふの間、去ぬる比、廳の御下文を陸奥國に下されをはんぬ。その時、關東より同じく雑色を遣はさるるのところ、今日帰参す。秀衡においては異心なきの由を謝し申す。しかるに雑色申すごとくば、すでに用意の事あるかと云々。よつてかの雑色、重ねて京都に差し進ぜらる。奥州の形勢を言上せしめんがためなり。」

文治四年十二月十一日条

「豫州（義経）追討の事、宣旨を下さるるの上、……。院の庁下す、陸奥・出羽も兩國司等、早く兩度の宣旨の狀に任せて、前民部少輔藤原基成ならびに秀衡法師が子息泰衡等をして、不日に源義経を召し進ぜしむべき事。」

文治五年二月二十二日条

「一奥州の住人藤原泰衡、義顯を容隠せしむるの上、叛逆に與同すること、疑ふところなきか。御

免を蒙り誅罰を加へんと欲する事」

文治五年閏四月大 四月二十一日条

「泰衡、義顯を容隠する事、公家いかでか宥めの御沙汰あるべきや。先々申請の旨に任せて、早く追討の宣旨を下さるてへれば、塔供養の後、宿意を遂げしむべきの由、重ねて御書を帥中納言に遣はさると云々。」

文治五年閏四月大 四月三十日条

「今日陸奥國において、泰衡、源豫州を襲ふ。これかつは勅定に任せ、かつは二品の仰せによってなり。與州、民部少輔基成朝臣の衣河の館にあり。泰衡兵数百騎を従へ、その所に馳せ至りて合戦す。與州の家人等相防ぐといへども、ことごとくもつて敗績す。豫州持仏堂に入り、まづ妻廿二歳。子女子四歳。を害し、次に自殺すと云々。」

以上を簡略にまとめる。文治元年十一月十一日の条で、義経反逆の事に頼朝の憤りが激しく、畿内近国に身柄を捕らえる院宣が下され、文治三年二月十日の条で、義経が藤原秀衡の権勢を頼って、奥州に向かう様子が記載されている。文治三年九月四日の条で、藤原秀衡が義経を扶助し、反逆をしていることを頼朝が院庁に訴えた。秀衡は反逆の意思がないことを弁明している。文治四年十二月十一日の条で、義経追討を院庁を通じて陸奥・出羽両国司、藤原泰衡に命じた。文治五年二月二十二日の条で、頼朝が義経をかくまった藤原泰衡を朝廷の許可を得て誅罰したい旨を朝廷に伝える。文治五年閏四月二十一日の条で、頼朝は再度義経をかくまった泰衡を朝廷に追討の宣旨をくださうように訴えている。文治五年閏四月三十日条で、泰衡が義経を襲撃し、義経は衣河館で妻子とともに自害する。

源義経は藤原秀衡を頼って平泉に身を寄せたことや、藤原秀衡の死後に藤原泰衡によって藤原基成の「衣河館」で討たれたことが記される。「衣河館」の所在は確定できていないほか、源義経がどこに根拠を置いたかなどの詳細は記されていない。また、この時期の文献には「高館」についての記述はみられない。

第2節 近世文献における高館跡

源義経終焉の地について、『吾妻鏡』では「衣河館」と記している。これに基づき義経の居館を近世以前は「衣河館」と理解されてきた。

しかし、その後場所の比定についてはいくつかの説が流布するようになる。大略をまとめると、近世以降は「高館跡」、幕末は「判官館」と呼ばれたとされる(板橋 源・佐々木博康1966)。そこで、近世の文献に「高館跡」について、『平泉町史』総説・論説編1988及び『平泉町史』史料編二 1993に依拠して、近世の文献のいくつかに触れる。

『奥州観蹟聞老志』

平泉村 山 一 高館城 東西百四間
南北二十一間

此城藤原秀衡居住、後義經（義経）居住トモ云、缺入今ハ川ト成、葛西一家

『平泉舊蹟志』

衣河館、又高館とも云ふ。……秀衡の時、民部少輔基成朝臣を居住せしむ。又義經（義経）の頼朝卿の勘氣を蒙り下向せし時、秀衡此城の別館に居らしむ。是を柳御所と云けると云ひ傳へり。其址と云ふは東方にあり。義經は其館に於て自殺せりと云ふ。

『南部根元記』

高館は古へ民部少輔基成の居城なりしを判官殿（義経）御下向の後此所へ移し申せしなり

『平泉雜記』

此館ヲ世俗に高館トモ云ヒ、判官トモ云

明治十八年三月の奥書のある『岩手縣管轄地誌』第七号

判官館、或ハ衣河館ト云、高館トモ云フ、本村ノ東北字柳ノ御所ニアリ、

『平泉志』 明治二十一年刊

高館（又衣河館と号す）、里俗之を判官とも云り、

『平泉實記』 寛延四年 相原友直

「按スルニ、義経平泉高館に於テ自害ノコト、東鑑ノ説ニシテ盛衰記・義経記モ亦コレニ同ジ、…」

『おくのほそ道』 松尾芭蕉

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡ハ一里こなたに有、秀衡が跡ハ田野に成て、金鷄山のミ形を殘す、先高館にのほれハ、北上川南部より流るる大河也、衣川ハ和泉か城をめくりて、高館の下にて大河に落入、康衡等か舊跡ハ、衣か關を隔て南部口をさし堅め、夷をふせくとみえたり、偕も義臣すくつて此城にこもり、功名一時の叢となる国破れて山河あり、城春にして草青みたりと笠打敷て時のうつるまで涙を落し侍りぬ、

夏草や兵ともか夢の跡

以上の文献では高館跡について、源義経終焉の地である「衣河館」にあてはめる見解が採られるようになる。その経緯については判然としないが、中世城館としても機能した高館跡が、その急峻な地形や周囲との位置関係から、源義経の伝説と結びつきやすい場所であったことが推察できよう。

第3節 近年の研究での高館跡

（1）近年研究での高館跡

次に高館跡について記した近年の文献を概観する。

板橋 源・佐々木博康 1966「奥州平泉高館」

寺崎清賢の論説を引用し、「衣河館というのは、このように（衣河館＝柳の御所）極めて廣汎なる語にして」、このうちの一部が高館で義経自決の場所である。」

入間田宣夫 2003 『都市平泉の遺産』山川出版社

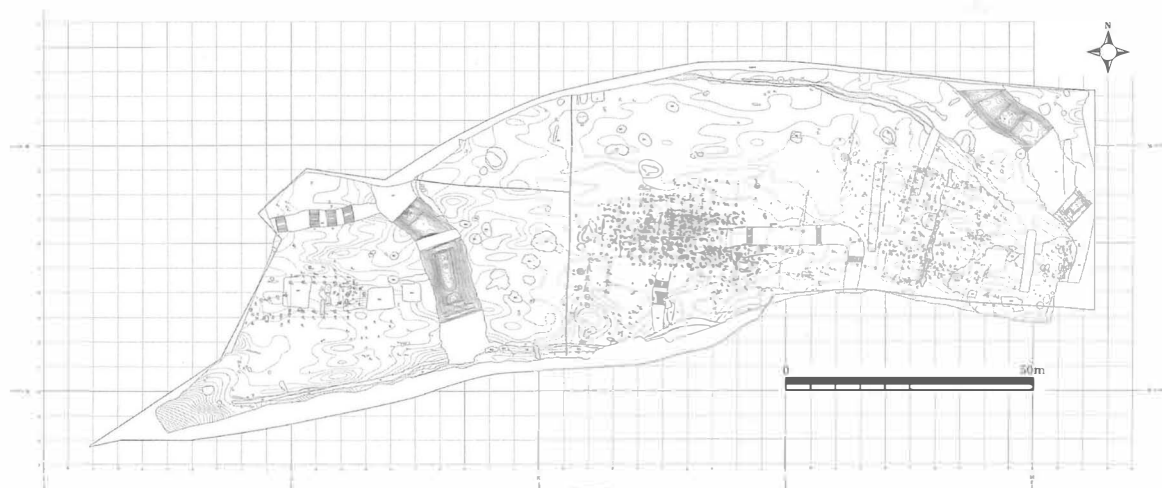
「源義経は、秀衡の遺言によって、奥州の大將軍として、鎌倉殿頼朝に対抗すべく、平泉政権の首班に祭り上げられて、基成の「衣河館」に傅き養われることになった。『吾妻鏡』に記されているとおりである。（…略…）義経が高館に住まいし、高館で殺害されたという伝承が生まれたのは、なぜなのか不思議でならない。いずれにしても、これほど重要な「衣河館」のありかがわからないというのは、もったいない。もしかすると、接待館の辺りが、それにあたるのかもしれない。（…略…）今後における発掘・調査の進展を待つしかない。」

五味文彦 2005 『義経記』山川出版社

「（…略…）その高館の地として考えられたのが、柳之御所の北側にある小山中、北上川を眼下に望む景勝の地である。山上には仙台の伊達綱村が天和三年（一六八三）に建てた義経堂があり、義経像がまつられている。（…略…）義経の居所については、『義経記』では秀衡が義経を自分の館にはいれずに「月見殿」に迎えたとしており、さらに衣河に御所を造営したともある。こうしたところから見ても、義経は平泉館（柳之御所）とは離れた地、すなわち『吾妻鏡』に記され、また『義経記』にもみえる「前民部少輔基成朝臣の衣河館」にいたのだろう。」

入間田宣夫 2007『平泉・衣川と京都・福原』高志書院

「接待館遺跡（第3図）が気にかかる。秀衡の平泉館（柳之御所遺跡）に同じく、二条の堀や一括して廃棄された大量の京都風手づくねかわらけが検出されている特異な遺跡のことである。基成の衣河館の可能性ありとすることにならざるをえない。四面庇の建物が検出されていない。十二世紀後半に内堀の一部の埋没が進んでいたらしいなどの問題点が指摘されているが、この遺跡が十二世紀後半に廃棄されたとする明証は見だされていない。逆にいえば、この遺跡が文治五年奥州合戦まで存続する衣河館の本体（ないし関連施設）に相当する可能性は失われていない。（…略…）そのほかには、(5)衣の関道遺跡における池状の遺構が気にかかる。もしかしたら、立派な園池を具えた堂々たる居館だったかもしれない。基成や義経のような賓客が住まいしていた可能性もあるかもしれない。」



第3図 接待館遺跡遺構配置図

前川佳代 2015 『源義経と壇ノ浦』 吉川弘文館

「(…略…) 泰衡は秀衡の跡をついで伽羅御所に住んで平泉館で政務を行い、国衡は別に西木戸に邸宅を構え、彼らの主君という位置づけになる義経も当然、平泉に居を構えただろう。私は、秀衡死後しばらくは平泉館の軍事的要塞である高館に住んだと考えている。高館は北上川傍の要害で平泉南北の出入り口を確認できる要所である。平成二十六年には大規模な堀跡が見つかった(岩手教育委員会 2016 柳之御所遺跡第76次発掘調査概報)。「大將軍」義経にふさわしい場所と思う。(…略…)」

義経終焉の地を『吾妻鏡』等の文献資料からは、「衣河館」であることがわかる。しかし、「衣河館」については、衣川地区を想定する見解が多いものの、具体的な遺跡との比定には課題が多い。また、「衣川館」とは異なるが、発掘調査の成果から、高館跡で大規模な堀跡が検出されたことから高館跡に源義経が所在した可能性を想定している文献もみられる(前川)。

近年の発掘調査の成果から、接待館遺跡の二条の堀や一括して廃棄された大量の京都風手づくねかわらけが出土したこと。衣の関道遺跡で、立派な園池を具えた堂々たる居館が存在することを指摘し、接待館を衣河館と想定し、基成や義経のような賓客が住んでいたことを示唆している文献(入間田)がある。

義経の居館や自害した場所については、「衣河館」であることが記され、その地として「高館跡」や「接待館遺跡」などが挙げられているが、現在のところ確定的な見解はみられない。義経の居館の解明に発掘調査の進展をに期待する記述も見られる。

(2) 大鳥井山遺跡

秋田県横手市に所在する大鳥井山遺跡は、後三年合戦(1083～87)に関連する遺跡とされ、昭和52年の第1次調査から平成21年の第11次調査までの成果により、後三年合戦時代の堀と土塁によって囲まれた曲輪をもつ構造が古代末期以降の城館に大きな影響を与えた可能性が指摘されている。

特に近年の調査成果もふまえ、多くの事実が明らかになっており、急峻な地形をもつ高館跡と平坦部の柳之御所遺跡の関係が、大鳥井山と小吉山との関係に相応すると考え、柳之御所遺跡が清原氏関連城館の系譜をもつ居館であることを指摘する見解もある。

第4節 高館跡の過去の調査履歴

高館跡では過去に6回の発掘調査が実施されており、以下ではその概略をまとめる。また、柳之御所遺跡と遺跡範囲が接しており、関連が想定できる調査成果についても触れることとする。このほか、柳之御所遺跡堀外部地区の調査などとの関連も想起されるが、それについては適宜、本文中で触れる。

第1次調査(昭和39年)

【調査目的】 貯水池建設に伴う調査

【調査主体】 岩手大学

【調査概要】 掘立柱建物跡4棟(桁行3間、梁行2間の2棟、桁行2間、梁行1間の2棟)が検出されている。

小規模で瓦類が出土しなかったことなどから、板葺の板囲程度の、「見張り」「番所」の可能性を示唆している。

第2次調査（昭和44年）

【調査目的】 義経堂移転に伴う調査

【調査主体】 岩手大学

【調査概要】 義経堂修理に伴う調査で、礎石・平瓦・丸瓦等が確認され、近世（文化五年）に再建されたことが明らかにされている。

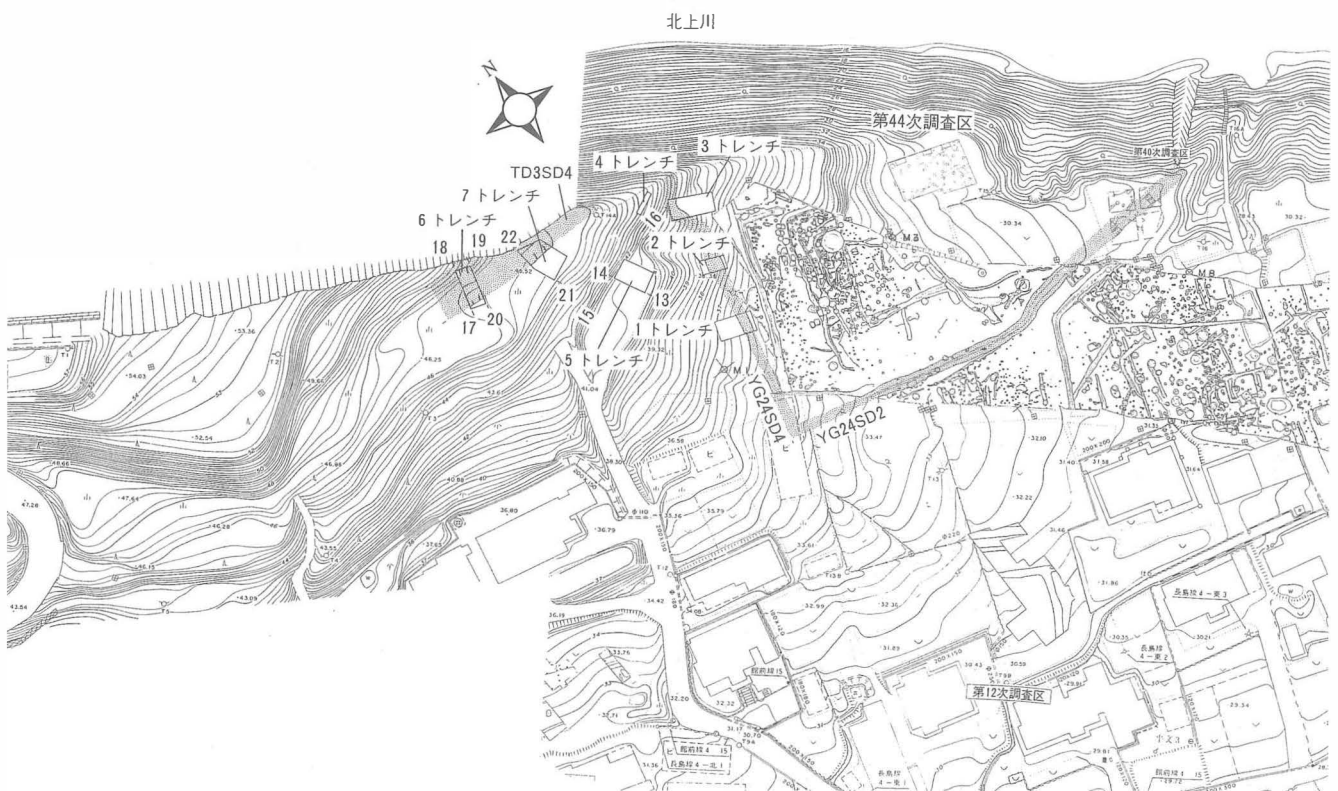
第3次調査（平成6年）

【調査目的】 内容確認調査

【調査主体】 平泉町教育委員会

【調査概要】 柳之御所遺跡第24次調査で検出した堀跡（YG24SD4）の追跡調査と併せて、6・7トレンチで堀跡（TD3SD4）を確認している（第4図）。規模は、幅7m以上、深さは1.7m～3.0m以上で、埋土は大きく3層に大別され、埋土上部は人為堆積層もしくは壁面崩落土層ともとれる地山ブロックを含む層で構成され、下層は拳大から頭大の河原石が投げ込まれている。出土遺物は、埋土上位～中位で刀子・鉄鏃・常滑甕・渥美甕・須恵器壺・釘、下層からかわらけ（ロクロ・手づくね成形のもの）常滑・渥美甕・刀子など、12世紀代の遺物が多数出土している。

戦国期の城館跡と考えられた面が留保されたが、埋土・出土遺物・堀跡の形態及び位置から12世紀代の堀跡と推定している。



縮尺不定

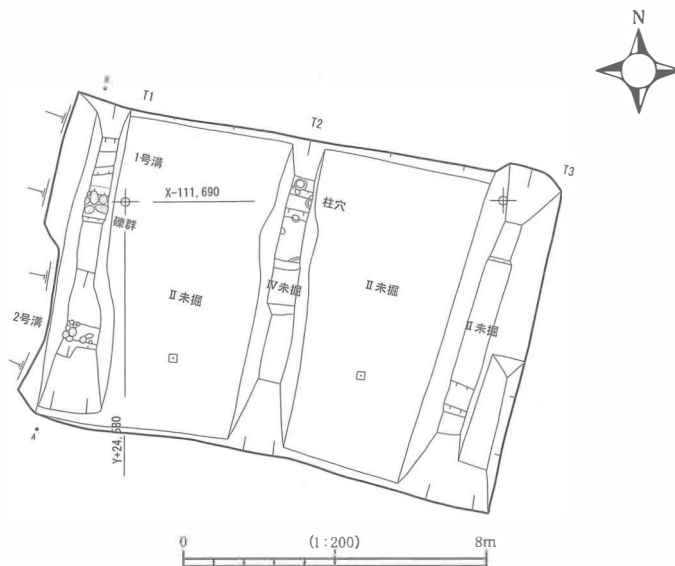
第4図 高館跡第3次調査遺構配置図

第4次調査（平成6年）

- 【調査目的】 内容確認調査
- 【調査主体】 平泉町教育委員会
- 【調査概要】 現代の切土造成地

第5次調査（平成14年）

- 【調査目的】 内容確認調査区
- 【調査主体】 平泉町教育委員会
- 【調査概要】 東西方向に3本のトレンチ（T1～T3）を設定し、うち二つのトレンチ（T1・T2）で2条の溝跡を確認している。T1・T2北側の1号溝跡は、近世以降の境内地区画に伴う遺構と報告されている。T1・T2南側の2号溝跡の規模は幅2.4m、深さ1.2m、埋土から完形のかわらけ、青白磁蓋片が出土し、等高線に沿って検出されていることから、高館跡南側の周囲を巡る12世紀の溝跡の可能性を示唆している（第5図）。



第5図 高館跡第5次調査遺構配置図

第6次調査（平成17年）

- 【調査目的】 義経堂西側平坦面における配水池建設に伴う試掘調査
- 【調査主体】 平泉町教育委員会
- 【調査概要】 昭和39年の第1次調査と同様に第6次調査においても、柱穴約50個及び溝跡2条を検出している。柱穴は表土から30～60cm掘り下げた面で検出された。検出面は第1次調査と同じレベルである。

表土から検出面まで掘り下げていく段階で、白磁6点（15～16世紀）、古瀬戸7点同一個体（14～15世紀）、青磁1点（15世紀）、染付2点（15～16世紀）、かわらけ数点（12世紀）、その他近世陶磁器片、古銭などが出土している。また、柱穴上部をわ

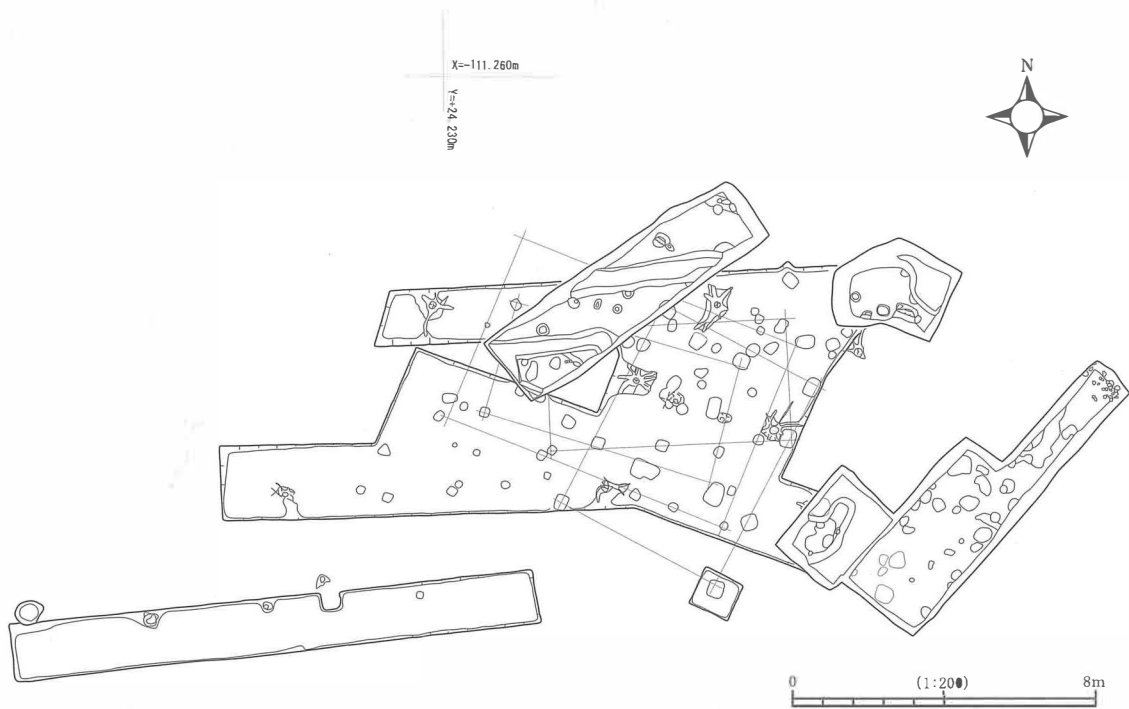
ずかに掘り下げたところ、柱痕跡位置から15～16世紀の陶磁器が出土していることから、遺構の年代も同時期のものと推測している。

12世紀のかわらけが数点出土していることから、調査区近辺に12世紀代の遺構が存在することが考えられている。

なお、調査区北側には、土塁の高まりが確認される。



第6図 高館跡第1・6次調査遺構配置図



第7図 高館跡第1・6次調査遺構配置図

柳之御所遺跡第20次調査（平成元年）

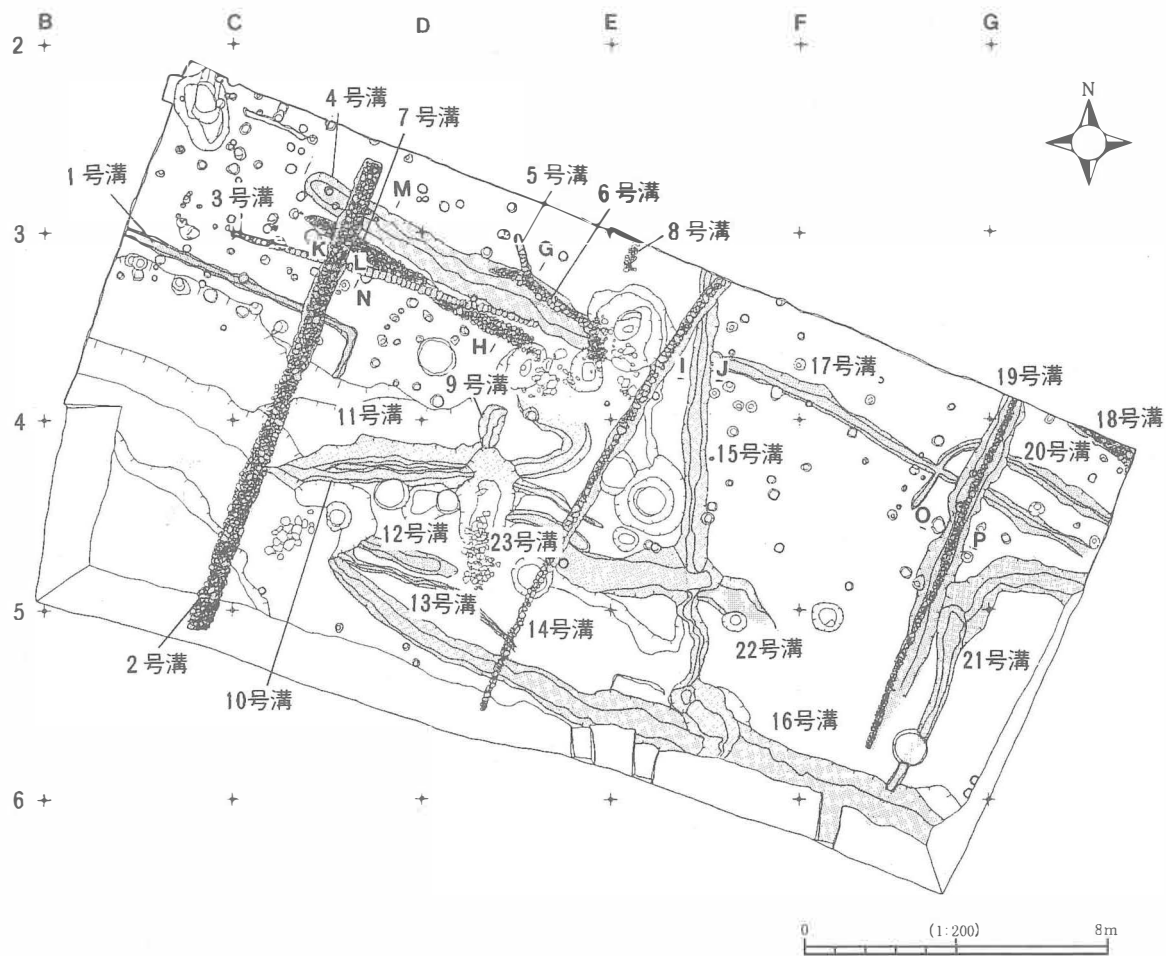
【調査目的】 内容確認調査

【調査主体】 平泉町教育委員会

【調査概要】 高館跡第5次調査区の東側に隣接する。合計23条の溝跡が検出された。23条のうち、集石を伴わない溝跡が12世紀の遺構と考えられている。



第8図 柳之御所遺跡第20次調査位置図



第9図 柳之御所遺跡第20次調査遺構配置図

高館跡第1次～第6次調査と柳之御所遺跡第20次調査を概観すると、12世紀代の遺構と推定出来るものは、第3次調査のTD3SD4堀跡、第5次調査の2号溝跡、柳之御所遺跡第20次調査の溝跡群と言える。第1次・第6次調査は、出土遺物から中世城館として機能していた時代の遺構が主体と考えられる。

第5節 高館跡の調査研究の課題

(1) 既往の研究にみられる課題

文献にみられる高館跡については、12世紀当時の文献において、高館跡にあたとみられる直接的な記載は確認できず、当該時期における名称や機能については確認できない。その後、近世段階において高館跡が、源義経終焉の地として地誌等に記載されるようになり、広く知られるようになる。

奥州藤原氏及び当時の平泉周辺の様相が記される数少ない史料である『吾妻鏡』では、義経が自害した最後の地が「衣河館」と記される。しかし、この「衣河館」が具体的にどこを指すかを示す記載は確認できない。現在のところ、地名や調査成果から、現在の衣川地区に想定する見解が多いものの具体的な位置については確定できていない。

(2) 高館跡発掘調査の課題

柳之御所遺跡に隣接し奥州藤原氏の政治行政の拠点である「平泉館」に近い場所にある地点であるため、柳之御所遺跡と関連して政治・行政上の拠点として12世紀にも機能していた可能性が指摘されてきた。一方で発掘調査等が不足しており、実態がつかめていないことが課題とされていた。

これまでの発掘調査では、12世紀代とみられる遺構や遺物が散見されるものの、まとまった分布は確認できていないほか、分布傾向についても不明な点が多く残されている。

このことから、高館跡の発掘調査では、(1) 堀の位置と規模の確定と時期の検討、(2) 12世紀代の遺構の分布の確認、(3) 高館跡の具体的な機能の検討、(4) 中世後期の城館としての高館跡の範囲や様相の把握、などが課題として想定される。

(菊池)

Ⅲ章 発掘調査の内容

第1節 調査の概要

(1) 調査の概要

高館跡は、現在義経堂が位置することで知られる高館の丘陵部全体を遺跡範囲としている。遺跡範囲内の多くの位置が斜面地であることや、地形の改変もあり表土の発達が薄く、今回の各次の調査位置の多くでも表土を除去した後、直下に地山層とみられる黄褐色粘土層を確認しており、各調査位置での遺構検出面となっている。ただし、遺構検出面となる地山層も位置によって削平や斜面地における崩落による地形の変化のため、全てが一連の地山層ではなく土質や成因には差異が想定される。

また、旧表土等は確認されていない位置が多いが、丘陵頂部では後述するように厚い表土層が形成されるなど位置によって異なる状況がある。以下の記載ではこれらの地形的特徴や、調査位置が広い範囲にわたることから、調査区の土層については各調査区での様相をそれぞれ記載する。また、基本となる土層についても全体の傾向をまとめて記載するのではなく、それぞれの調査位置での記載に譲ることとする。

今回の内容調査では高館跡の既往の調査研究上の課題から、柳之御所遺跡に隣接する本遺跡の性格解明及び柳之御所遺跡の検討にとって、特に重要と考えられた以下の2つを大きな目的とした。

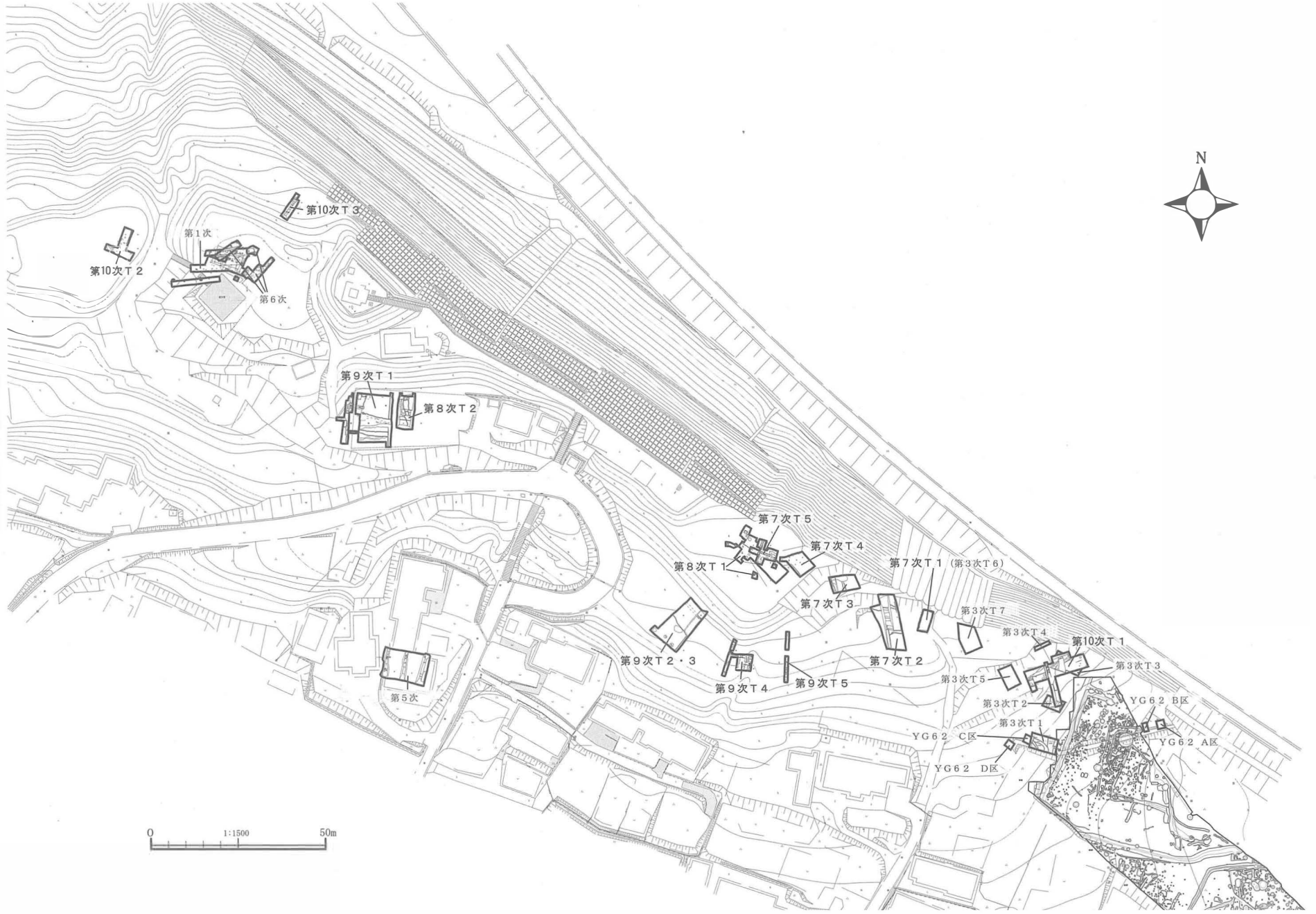
- ① 柳之御所遺跡と同時期に機能したと想定される堀跡の位置と規模、時期の検討
- ② 当該時期に関連する遺構の検出やその他の時期の様相など、遺跡の性格解明に益するような考古学的情報の把握

これらの調査目的に従って各次の調査位置を設定した(第10図)。各調査区個々の調査位置の設定理由については各節で記す。

なお、詳細は後述するが第7～第10次調査全体の概略を記すと、今回の調査では遺跡の位置する丘陵部の中腹を廻る堀跡が検出でき、遺跡の規模や時期に関する情報を得ることができた。また、重複して、これより後続する時期の遺構も検出されている。詳細は本章及び総括編2で記載するが、今回の高館跡の調査では奥州藤原氏が繁栄した時期にあたる12世紀代に関わる遺構と、中世後期とみられる遺構の大きく2時期にわたる遺構を主に確認できたこととなる。

(2) 本章での記述方法

今回の一連の調査では、東西600m、南北300mほどに広がる高館の丘陵部のうち、西端部を除いた250m四方ほどの広域にまたがって、各次の調査でそれぞれの目的に応じて異なる位置に調査区を設定した。検出遺構や出土遺物についても、回数ごとに把握、整理してきた。一方で、同一遺構の追跡や周辺状況の把握を目的として連続する位置に設定した調査区などもあり、これらは通観して把握する必要がある。調査方法や遺物の取り上げ、整理についてはおおむね同一の方法を取り得ているものと考えているが、混乱を避けるため、以下では回数ごとに節を分け、それぞれの内容を記述する。



第10図 調査区配置図



第11図 調査区位置図区割り図

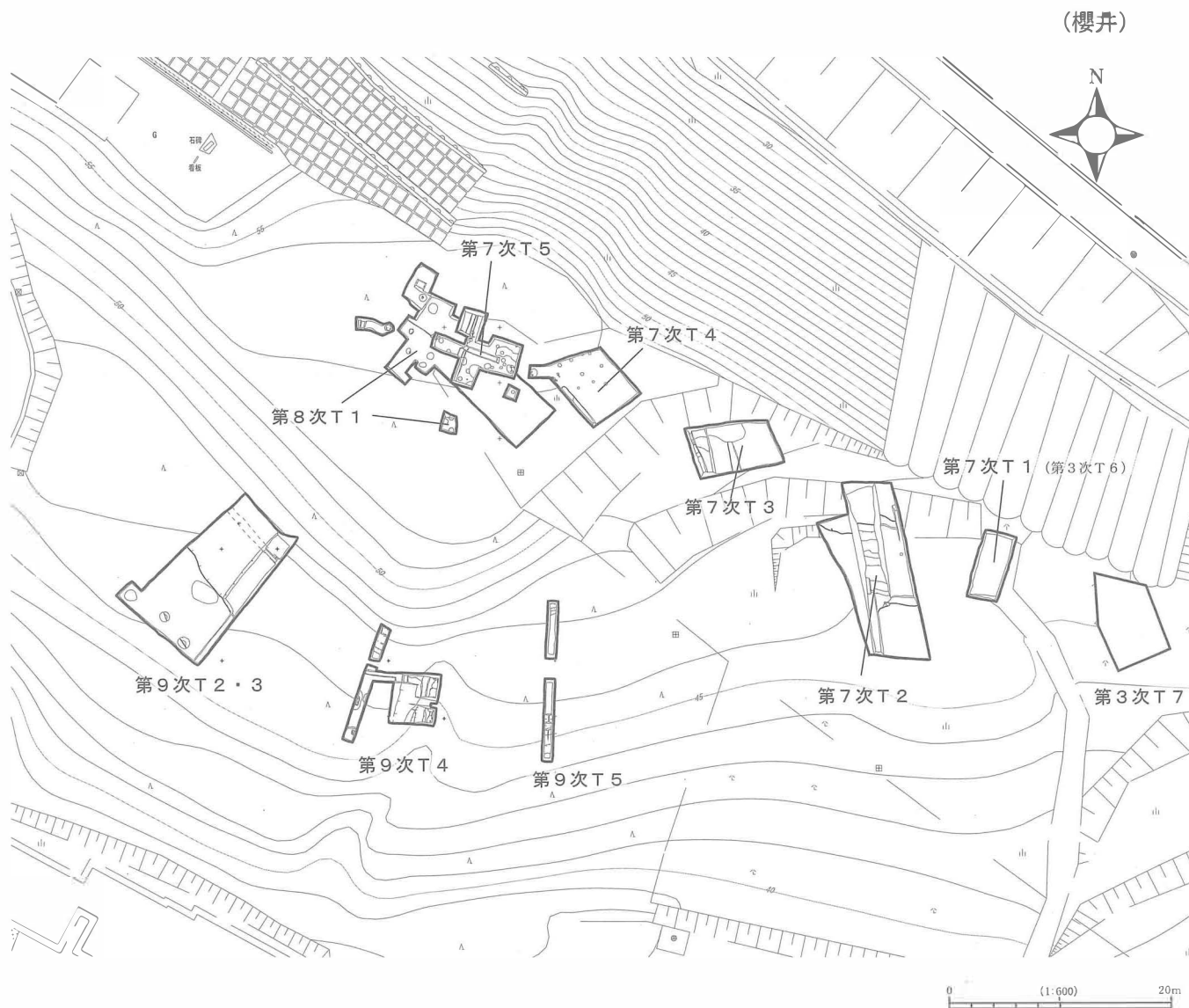
また、遺構番号についても次数ごとに付している。以下の記載では既述のとおり、岩手県教育委員会で実施してきた柳之御所遺跡の調査で用いてきた遺構番号と同様の方法で遺構名称を付すこととする（岩手県教育委員会 2019）。各遺構の種別にそれぞれの数字を振り、種別の前に次数番号を付記して記載する。例えば、第7次調査の1号堀跡であれば「7SD1」となる。隣接する調査区などにあたり、一連の遺構であることが明確なものは同一の遺構名を継続して用いる。

検出した遺構のうち、調査位置などが離れているため異なる遺構名を付した遺構においても、位置や遺構の様相から一連の遺構として判断できる遺構も存在する。これらは全体を通した遺構名を付記した場合における今後の未調査位置での新知見ともなう理解への障壁や錯誤の原因となることを避けるため、それぞれの別の遺構番号を継続して用いる。現状の調査成果から想定される対応関係については、各次調査の内容を記述した上で、その対応や内容を総括編2で示すこととする。

なお、今回の調査では堀跡や溝跡などの遺構が確認されているが、斜面に対して横方向に頂部平坦面及び等高線に平行して走る堀・溝については、「横堀」もしくは「横方向の堀」などと記述する場合がある。また、斜面方向に対して同方向に頂部平坦面及び等高線に直交して造られた堀・溝については、「縦堀」もしくは「縦方向の堀」等と記述する場合がある。

遺物は調査次ごとに整理分類しており、以下では各調査次ごとに節で分けて掲載する。なお、近接する調査位置などでは次数をまたいだ接合作業等も実施したが、接合個体などは得られていない。遺物については既往の調査報告と同様の名称を踏襲した。土師質の土器類については既往の平泉周辺で

の名称から「かわらけ」の呼称を用い、それぞれ成形方法から「ロクロ」「手づくね」と分類し、口径などの器形の大きさからそれぞれ「大皿」「小皿」として記載する。国産陶器類については常滑や渥美などの産地と器種の名称を用いる。輸入陶磁器については、白磁・青磁などの種別や産地、器種を記す。



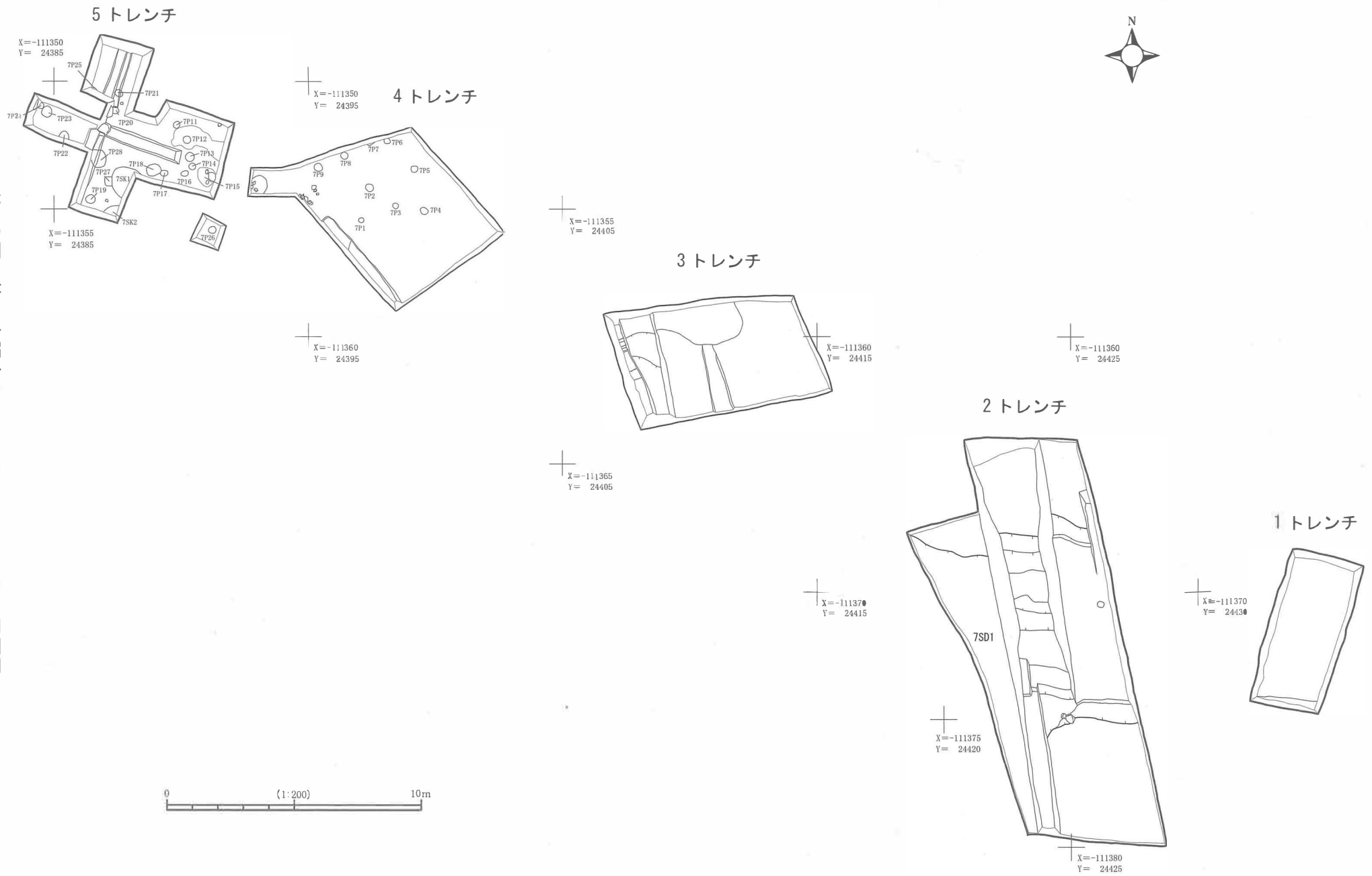
第12図 調査区位置図(1)

第2節 第7次調査の遺構と遺物

(1) 各トレンチの調査成果

○1トレンチ (TD7-T1) (第13図)

〔調査地点〕 X=-111, 370・Y=24, 430 付近に位置する(第12・13図)。既述のとおり、高館跡の調査では、平泉町教育委員会が実施した高館跡第3次調査で堀跡が確認されていた(平泉町教育委員会 1994)。この調査区は、その詳細な位置の把握や今後の調査位置を定めるため、平泉町教育委員会による旧調



査区（TD3-6 トレンチ）の平面的な位置を掘り下げて改めて確認したものである。

〔基本土層〕 黄褐色粘土のいわゆる地山層で遺構が検出される。表土の除去後に検出面となる地山層が確認される。

〔調査方法〕 旧調査区の埋め戻し土を除去し、遺構を検出した。遺構精査は以前の調査で行われており、今回の調査では遺構の位置を把握するため検出にとどめた。

〔検出遺構〕 検出遺構は、堀跡1条である。

〈7SD1 堀跡〉 7SD1 堀跡は等高線に沿って走る横方向の堀跡で、幅7m程で検出した。斜面上方側の肩は本来の地形である傾斜地を利用して構築されており、地形から法肩を想定した場合、上端での想定される堀の幅はより大きい規模であると推察される。

今回の調査では位置の把握のため検出にとどめ、精査を行っていないが、平泉町教育委員会の調査では検出面となる平坦部からは深さ1.7m程を確認している。当時の調査所見では、土層の多くは自然堆積土層とみられ、下層は水成堆積の土層を一部に想定している。また、下層と中層の層界部分の一部のほか、上位からの崩落土層などを中心に河原石などの円礫が多く含まれている。礫を多く含む土層は、下層や上層などの特定の部分に限定されるものではなく、崩落とみられるいくつかの土層で、それぞれの層序では集中して確認される。

遺物は下層までを含め、12世紀代とみられるかわらけや国産陶器類、鉄製品の出土が報告されている他時期の遺物として積極的に言及、報告されている遺物は認められない。

なお、北側への平面的な延長は、調査区内では直線的に延びており、屈曲する様相は確認できない。これらから、現在確認できる高館丘陵の端部までそのまま延びることが分かる。高館丘陵の旧地形の形状は判然としないが、平泉町教育委員会による一連の旧調査区の様相からは現況と合わせても堀が弧を描くような状況は取捨できない。そのため、現在の北上川によって削平されている高館丘陵の本来の丘陵地形の形状やそれに伴う堀の走行方向を推察するような材料は得られていない。

（櫻井）

○2 トレンチ（TD7-T2）（第14～16図）

〔調査地点〕 $X=-111, 375 \cdot Y=24, 430$ 付近に位置する。TD7-T1で確認した7SD1堀跡の走行方向と内容を確認するため、TD7-T1から西に8m程の位置に設定した。調査区を設定した場所は、高館の丘陵の中腹に帯状に観察できる平坦面にあたり、TD7-T1と同一の地形面が連続して観察できる位置に設定した。

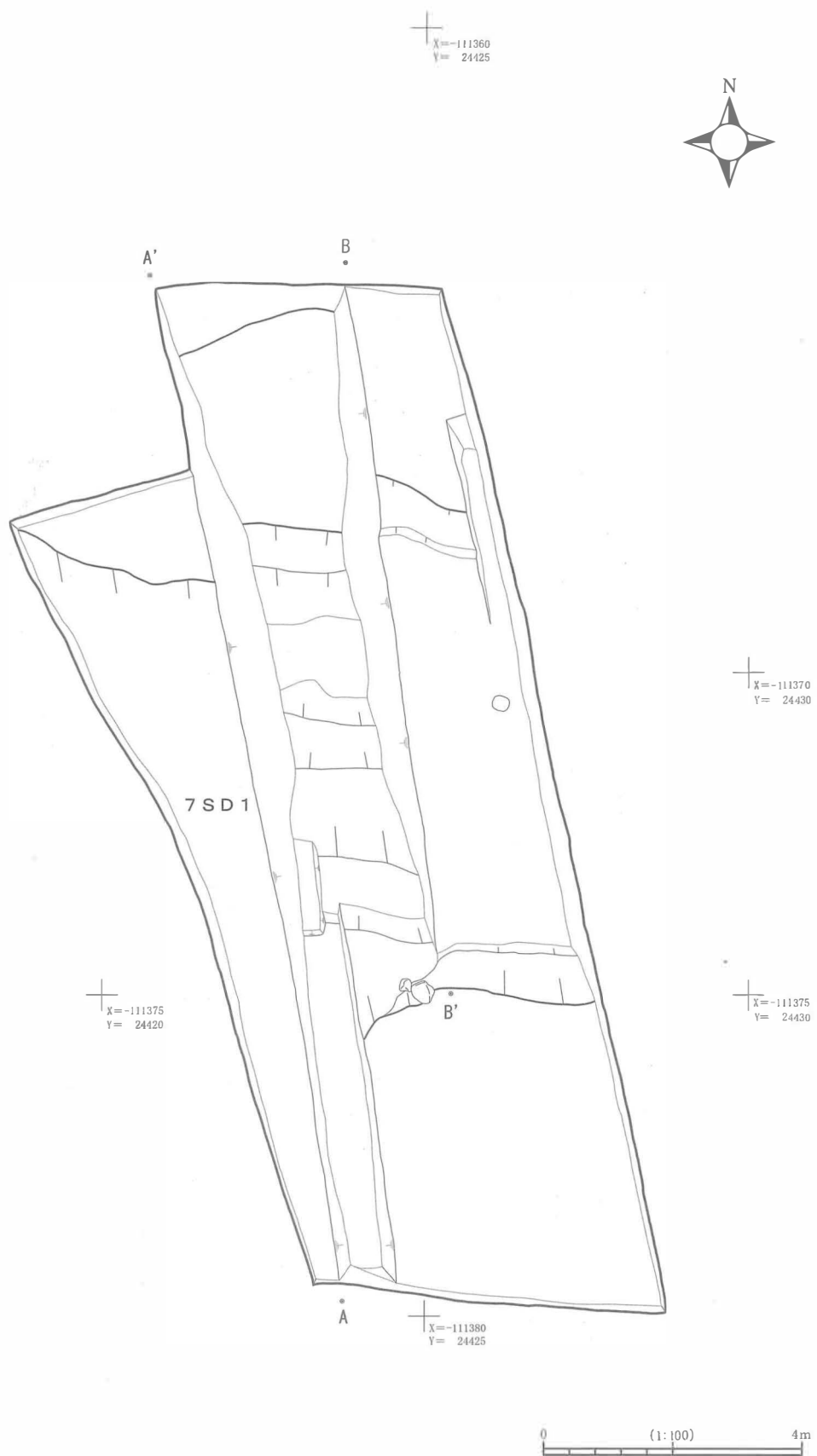
〔基本土層〕 表土除去後、いわゆる地山層にあたる黄褐色粘土層で検出を行った。なお、精査した堀跡の断面観察から、黄褐色粘土層の地山層の下層には砂質土を含む黄褐色土層が確認され、より下層は黄褐色の基盤土層となる。

また、後述するように、斜面下方にあたる位置では、地山層の上部に旧表土層にあたる黒色土層を確認している。

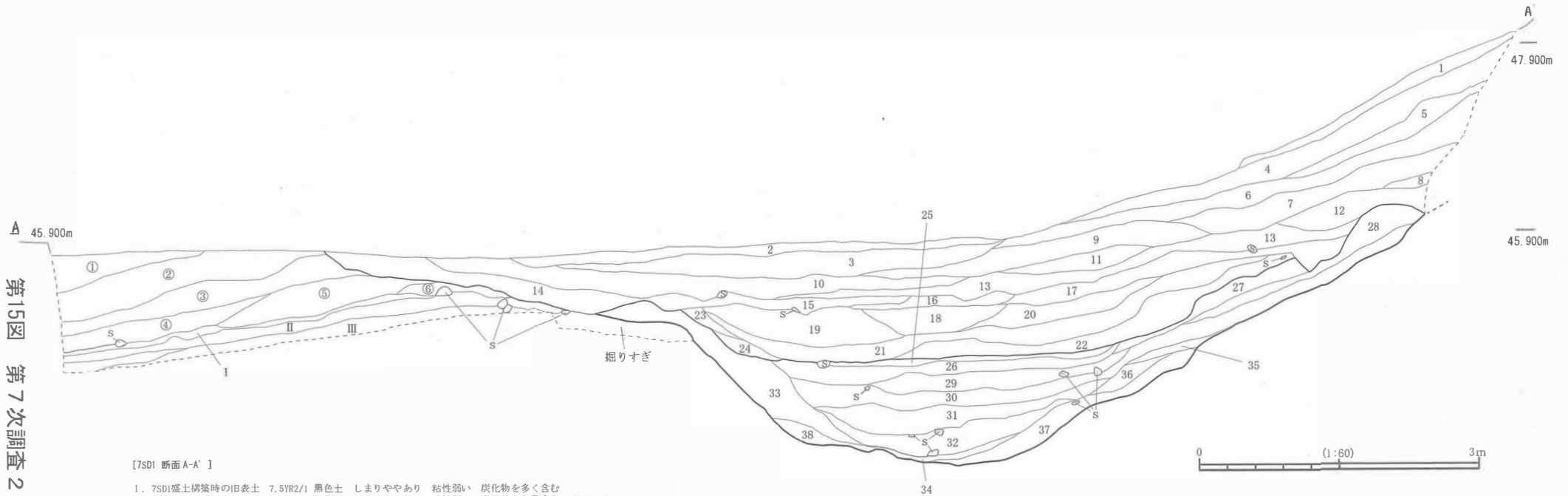
〔調査方法〕 7SD1堀跡の延長位置を想定して、丘陵の等高線に沿って帯状に伸びる平坦面に、斜面方向に直交して幅6m×長さ15m程の調査区を設定した。堀跡を検出した後、断面等の土層堆積状況を把握するため、一部を掘り下げ精査を実施した。堀跡の底面まで精査したのは幅2m程である。

〔検出遺構〕 検出遺構は、横方向の堀跡を1条確認している。また、斜面下方にあたる部分は整地地業が行われている。

〈7SD1 堀跡〉 7SD1 堀跡は等高線に沿って走る横方向の堀跡で、調査区内では幅10～12mで確認し



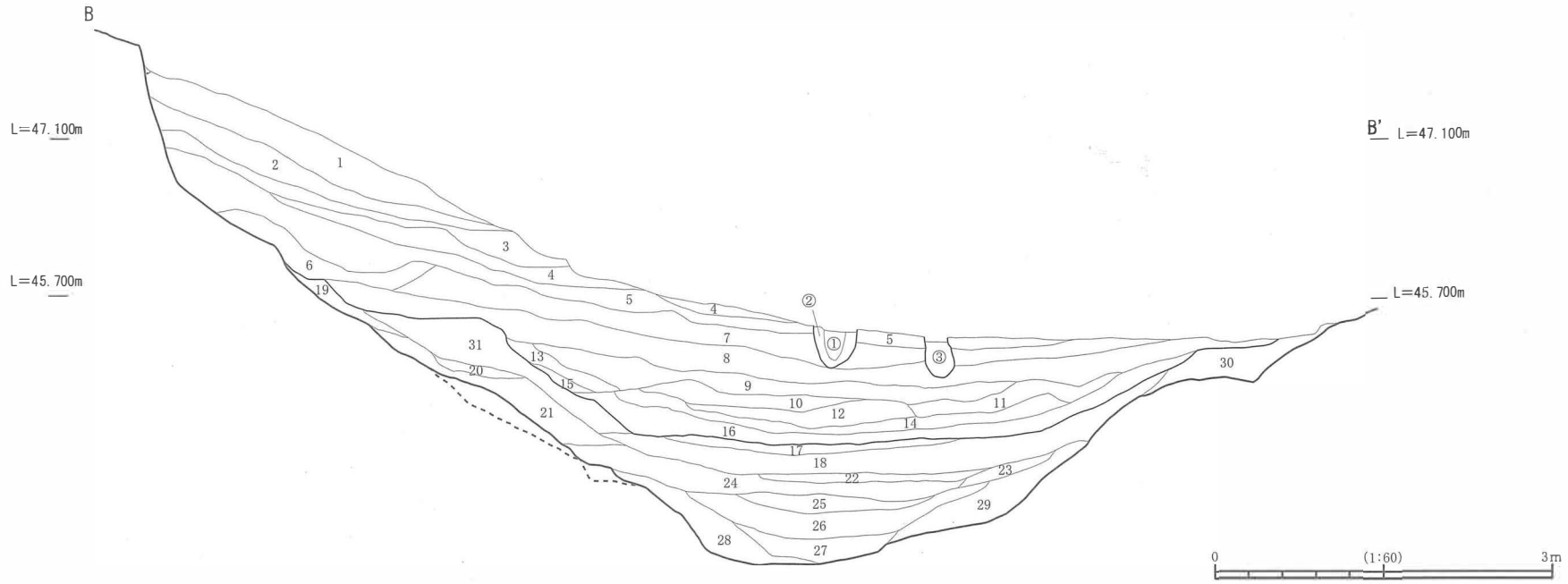
第14図 第7次調査2トレンチ 7SD1平面図



[7SD1 断面 A-A']

- | | | |
|------------------|---|--|
| Ⅰ. 7SD1盛土構築時の旧表土 | 7.5YR2/1 黒色土 しまりややあり 粘性弱い 炭化物を多く含む | 21. 7SD1埋土 7.5YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性なし かわらけ、炭化物を多く含む |
| Ⅱ. | 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性弱い 炭化物を少量含む 礫が入る | 22. 7SD1埋土 10YR6/4 にぶい黄褐色土 かわらけ少量含む |
| Ⅲ. | 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりややあり 粘性弱い 円礫が入る 縄文土器を少量含む | 23. 7SD1埋土 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性弱い 石粒を多く含む |
| ① 盛土範囲土塁状の整地 | 5YR5/6 明黄褐色土 しまり弱い 粘性弱い 旧表土か 斜面側に分布ししまりもない | 24. 7SD1埋土 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性弱い 石粒を多く含む |
| ② 盛土範囲土塁状の整地 | 2.5Y7/6 明黄褐色土 しまりあり 粘性弱い 5~10cmの黄色土地山ブロックと暗褐色土が入る | 25. 7SD1埋土 7.5YR6/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化物が層状に入る (山側でより厚く、そちらからの混入とみられる) |
| ③ 盛土範囲土塁状の整地 | 2.5Y8/6 黄色土 しまりあり 粘性弱い 黄色土地山ブロックと淡黄のブロック、暗褐色土が入る | 26. 7SD1埋土 10YR7/1 灰白色土 しまりあり 粘性ややあり 上下が酸化によりさび 炭化物、焼土を少量含む |
| ④ 盛土範囲土塁状の整地 | 2.5Y8/6 黄色土 しまりあり 粘性弱い 円礫が含まれる | 27. 7SD1埋土 10YR8/9 浅黄褐色土 しまりあり 2~5cmの石粒を多く含む |
| ⑤ 盛土範囲土塁状の整地 | 2.5Y8/6 黄色土 しまりあり 粘性弱い 円礫が含まれる 地山ブロックが多い | 28. 7SD1埋土 7.5YR5/3 にぶい褐色土 石粒、炭化物を多く含む |
| ⑥ 盛土範囲土塁状の整地 | 2.5Y8/9 黄色土 しまりあり 粘性弱い 暗褐色土が多く、④、⑤よりしまりが弱い | 29. 7SD1埋土 10YR8/2 灰白色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化物を少量含む |
| 表土 | 10YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性弱い | 30. 7SD1埋土 7.5YR7/2 明褐灰色土 しまりあり 粘性強い 31.29との層界がそれぞれさびで酸化しており、それぞれ表土になった時期がある |
| 1. 7SD1埋土 | 10YR3/2 黒褐色土 しまり強い 粘性弱い | 31. 7SD1埋土 10YR5/1 褐灰色土 しまりあり 粘性強い 礫を含む グライ化した層 |
| 2. 7SD1埋土 | 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり弱い 粘性弱い かわらけ片、石粒を多く含む土、1~2mmの石粒も多い | 32. 7SD1埋土 10YR7/1 灰白色土 しまりあり 粘性強い 下部はさびが強く、水分を含んだ時期が想定される |
| 3. 7SD1埋土 | 10YR7/6 明黄褐色土 しまりあり 粘性なし 円礫を含む、遺物を含まない | 33. 7SD1埋土 10YR7/4 にぶい黄褐色砂質土 しまり強い 粘性弱い 2~5cm石を含む砂で形成され各側からの崩落土 |
| 4. 7SD1埋土 | 7.5YR7/6 褐色土 しまりあり 粘性なし 円礫を含む、遺物を含まない | 34. 7SD1埋土 10YR7/3 にぶい黄褐色砂質土 33と同様の土質だがより粒が細かい |
| 5. 7SD1埋土 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性なし かわらけ、円礫を含む 炭化物を少量含む | 35. 7SD1埋土 10YR7/6 明黄褐色砂質土 しまり強い 粘性なし 砂質土を多く含む |
| 6. 7SD1埋土 | 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性なし かわらけ、炭化物を含む 10~15cmの礫を多く含む | 36. 7SD1埋土 10YR7/2 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性弱い 炭化物粒を少量含む |
| 7. 7SD1埋土 | 7.5YR6/4 にぶい褐色土 しまりややあり 粘性なし かわらけ、炭化物を含む 10~15cmの礫を多く含む | 37. 7SD1埋土 10YR7/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性弱い 地山砂質土の崩落 |
| 8. 7SD1埋土 | 10YR7/6 明黄褐色土 しまりややあり 粘性弱い 小さいかわらけ片、炭化物を含む 5~10cmの礫を含む | 38. 7SD1埋土 2.5Y8/2 灰白色土 しまり強い 粘性あり 石粒を多く含む |
| 9. 7SD1埋土 | 7.5YR7/4 にぶい褐色土 しまりややあり 粘性弱い かわらけ片、炭化物を含む | |
| 10. 7SD1埋土 | 7.5YR7/4 にぶい褐色土 しまりややあり 粘性弱い かわらけ片、炭化物を含む | |
| 11. 7SD1埋土 | 10YR8/6 黄褐色土 しまりあり 粘性弱い かわらけ片を少量含む 炭化物、焼土が混じるが少量 | |
| 12. 7SD1埋土 | 7.5YR4/2 灰褐色土 しまりややあり 粘性弱い かわらけ、炭化物、礫を多く含む | |
| 13. 7SD1埋土 | 10YR6/4 にぶい黄褐色土 2.5mmの石粒を多く含む しまり強い 粘性強い | |
| 14. 7SD1埋土 | 10YR7/4 にぶい黄褐色土 しまり強い 粘性弱い | |
| 15. 7SD1埋土 | 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性弱い 炭化物、かわらけを多く含む | |
| 16. 7SD1埋土 | 7.5YR4/2 灰褐色土 しまりややあり 粘性強い かわらけ片、炭化物片を多く含む | |
| 17. 7SD1埋土 | 7.5YR7/4 にぶい褐色土 しまりあり 粘性弱い かわらけ片を多く含む | |
| 18. 7SD1埋土 | 10YR7/6 明黄褐色土 しまりあり 粘性弱い かわらけ片を含む 地山ブロックを多く含む | |
| 19. 7SD1埋土 | 10YR8/4 浅黄褐色土 しまりややあり 粘性弱い 5~6mmの礫を多く含む かわらけ片、炭化物片も含むが少ない | |
| 20. 7SD1埋土 | | |

第16図 第7次調査2トレンチ 7SD1断面図(2)



[7SD1 断面 B-B']

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| <p>① 10YR3/3 暗褐色土 砂少量 炭微量
 ② 10YR3/3 暗褐色土 砂少量 炭微量
 ③ 10YR3/3 暗褐色土 砂少量 炭微量</p> | <p>1. 7SD1(A-A')の1と同じ 表土
 2. 7SD1(A-A')の4と同じ 埋埋土
 3. 7SD1(A-A')の6と同じ 埋埋土
 4. 7SD1(A-A')の9と同じ 埋埋土
 5. 7SD1(A-A')の10と同じ 埋埋土
 6. 7SD1(A-A')の12と同じ 埋埋土
 7. 7SD1(A-A')の13と同じ 埋埋土
 8. 7SD1(A-A')の21と同じ 埋埋土
 9. 7SD1(A-A')の15と同じ 埋埋土
 10. 7SD1(A-A')の16と同じ 埋埋土
 11. 7SD1(A-A')の19と同じ 埋埋土
 12. 7SD1(A-A')の18と同じ 埋埋土
 13. 7SD1(A-A')の17と同じ 埋埋土
 14. 7SD1(A-A')の21と同じ 埋埋土
 15. 7SD1(A-A')の17と同じ 埋埋土
 16. 7SD1(A-A')の22と同じ 埋埋土
 17. 7SD1(A-A')の25と同じ 埋埋土
 18. 7SD1(A-A')の26と同じ 埋埋土</p> | <p>10YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性弱い
 10YR7/6 明黄褐色土 しまりあり 粘性なし 円礫を含む、遺物を含まない
 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性なし かわらけ、円礫を含む 炭化物を少量含む
 10YR7/6 明黄褐色土 しまりややあり 粘性弱い 小さいかわらけ片、炭化物を含む 5~10cmの礫を含む
 7.5YR7/5 にぶい橙褐色土 しまりややあり 粘性弱い かわらけ片、炭化物を含む
 10YR8/6 黄褐色土 しまりあり 粘性強い かわらけ片を少量含む 炭化物、焼土が混じるが少量
 7.5YR4/2 灰褐色土 しまりややあり 粘性弱い かわらけ、炭化物、礫を多く含む
 7.5YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性なし かわらけ、炭化物を多く含む
 10YR7/4 にぶい黄褐色土 しまり強い 粘性弱い
 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性弱い 炭化物、かわらけを多く含む
 10YR7/6 明黄褐色土 しまりあり 粘性弱い かわらけ片を含む 地山ブロックを多く含む
 7.5YR7/4 にぶい橙褐色土 しまりあり 粘性強い かわらけ片を多く含む
 7.5YR4/2 灰褐色土 しまりややあり 粘性強い かわらけ片、炭化物片を多く含む
 7.5YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性なし かわらけ、炭化物を多く含む
 7.5YR4/2 灰褐色土 しまりややあり 粘性弱い かわらけ片、炭化物片を多く含む
 10YR6/4 にぶい黄褐色土 かわらけ少量含む
 7.5YR6/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化物が層状に入る(山側より厚く、そちらからの流入とみられる)
 10YR7/1 灰白色土 しまりあり 粘性ややあり 上下が酸化によりさび 炭化物、焼土を少量含む</p> | <p>19. 7SD1(A-A')の30と同じ 埋埋土
 20. 7SD1(A-A')の30と同じ 埋埋土
 21. 7SD1(A-A')の30と同じ 埋埋土
 22. 7SD1(A-A')の26と同じ 埋埋土
 23. 7SD1(A-A')の29と同じ 埋埋土
 24. 7SD1(A-A')の30と同じ 埋埋土
 25. 7SD1(A-A')の31と同じ 埋埋土
 26. 7SD1(A-A')の32と同じ 埋埋土
 27. 7SD1(A-A')の34と同じ 埋埋土
 28. 7SD1(A-A')の37と同じ 埋埋土
 29. 7SD1(A-A')の33と同じ 埋埋土
 30. 7SD1(A-A')の14と同じ 埋埋土
 31. 7SD1(A-A')の28と同じ 埋埋土</p> | <p>7.5YR7/2 明褐色土 しまりあり 粘性強い 31、29との層界がそれぞれさびで酸化しており、それぞれ表土になった時期がある
 明褐色土 しまりあり 粘性強い 31、29との層界がそれぞれさびで酸化しており、それぞれ表土になった時期がある
 明褐色土 しまりあり 粘性強い 31、29との層界がそれぞれさびで酸化しており、それぞれ表土になった時期がある
 10YR7/1 灰白色土 しまりあり 粘性ややあり 上下が酸化によりさび 炭化物、焼土を少量含む
 10YR8/2 灰白色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化物を少量含む
 7.5YR7/2 明褐色土 しまりあり 粘性強い 31、29との層界がそれぞれさびで酸化しており、それぞれ表土になった時期がある
 10YR5/1 褐灰色土 しまりあり 粘性強い 礫を含む グライ化した層
 10YR7/1 灰白色土 しまりあり 粘性強い 下部はさびが強く、水分を含んだ時期が想定される
 10YR7/3 にぶい黄褐色砂質土 33と同様の土質だがより粒が細かい
 10YR7/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性弱い 地山砂質土の崩落
 10YR7/4 にぶい黄褐色砂質土 しまり強い 粘性弱い 2~5cm石を含む砂で形成され斜面からの崩落土
 10YR6/4 にぶい黄褐色土 2.5mmの石粒を多く含む しまり強い 粘性強い
 7.5YR5/3 にぶい褐色土 石粒、炭化物を多く含む</p> |
|---|---|---|---|---|

た。検出面からの深さは2.5 mである。ただし、斜面上方の法肩は本来の傾斜を切岸状に成形しており、斜面上方にあたる部分での堀の法肩からの幅や深さはより規模が大きくなる。堀の底面は幅2 m程の平坦面があるものの、平坦部は狭く、V字に近い逆台形の形状である。底面からの立ち上がりはいずれの斜面も30°ほどの急な傾斜である。法面には斜面の中途に段等の顕著な造成はみられない。

堆積土層はいずれも自然堆積である。以下の層名の記載はB-B'断面の層序名による。上層は、遺物が少なく時期の特定は難しいが、しまりが弱い土質で、新しい時期の後世の堆積を含むとみられる。いずれの土層でもかわらけ片や炭化物片を含むほか、7層では円礫を多く含む。この様相は隣接するTD7-T1の上層部分の所見と同様のものと捉えている。なお、遺構検出面とした表土直下の5層上面で径20cmほどの小規模な柱穴を13個検出したが、いずれの柱穴も規模が小さく、埋土の状況から近現代の柱穴と推察される。

中層と捉えた13～18層には焼土や炭化物を含む様相が確認できる。特に17層は焼土や炭化物が層状を呈する。これらの土層にはかわらけも比較的多く含む。焼土や炭化物は斜面上方からの崩落等に伴う土層に伴っており、現地性のものではないと判断できる。かわらけなどの遺物についても同様に多くは、より斜面上方からの流入と判断できる。18層は鉄分等の錆が確認でき、この段階で表土となるなどの堆積の時間幅を長く想定できる。

これより下層の23、24層でも鉄分による錆が層を成す位置が確認でき、表土化した段階を想定できる。また、いずれの土層も斜面上方からの流入による自然堆積によるものが多いが、25層以下の底面付近は斜面の両方向からの崩落による堆積が観察できる。特に25層以下の土層はしまりが極めて強く、遺構の構築時や機能時に近い時期の堆積と推察できる。これらの所見から、堆積にはいくつかの時間的な段階を想定することが可能であろう。25層以下の極めて締まりが強い土層、18層以下の土層、それより上位の炭化物を含む土層、最上位の自然堆積層を想定している。これより下層は堀の掘削や実際の機能時に時間的に比較的近い段階での堆積土層と想定できる。また25層以下は層相からその中でも特に構築・機能時に近い堆積と想定している。

遺物は上層の自然堆積土層には多く含まれるものの、中層以下はきわめて少ない。種別ではかわらけが多く、国産陶器も少量だが含まれる。下層付近からの出土遺物も12世紀代のかかわりと国産陶器である。他時期の資料は確認できていない。

TD7-T1及びTD7-T2で確認された堀跡の位置と走行方向から、7SD1堀跡の走行方向はこの位置より北東側においては斜面の平坦面に位置し、傾斜面の横方向に走る堀跡と推察できる。また逆の方向のこれより西側の範囲における位置と走行は、今次の調査区の成果では部分的な確認のためこれ以降の調査成果も勘案して検討する必要がある。

〈7 整地層〉 7SD1堀跡から斜面下方にあたる南側にかけては、旧表土とみられる黒色土層の上面に人為堆積の黄褐色土層が厚く堆積している(第15図:①～⑥)。整地層の厚さは1.5 m程である。土質は地山ブロックを多く含み、しまりが強い土層である。なお、この整地土層は遺物を含んでおらず、堆積の状況からも7SD1堀跡の掘削時の排土を掻き上げ、そのまま斜面下方に盛り上げたと推察している。一部の土層には円礫を多く含む。旧表土等とみられる土層にも円礫を少量含むものの、これらは土層の掻き上げに際して整地土に含んだものと想定できる。一方で整地層中に含まれる円礫は量がやや多いため整地に伴う地業の可能性も残る。整地層より下層では黒色土などの旧表土が確認でき、一部に縄文土器の細片なども含む。

なお、この整地層により、本来は斜面になっていた7SD1堀跡の外側に、幅2～3 m程の平坦面が造成されたことになる。ただし、この整地層上面では柱穴等の遺構は確認されなかった。また、現在

確認できる平坦面より上部に盛り上がるなどの土塁状に構築されたかは判別できない。これより下方は急な斜面が伸びており、平坦面造成に際しても大規模な整地で、多くの土量が必要とされたとみられる。堀の掘削土の土量を想定した場合にも、掘削による土の掻き揚げによる土量のみであれば、上部へは若干の盛り上がりが見られる程度と推察される。

(櫻井)

○3 トレンチ (TD7-T3) (第 17 図)

〔調査地点〕 $X=-111,360 \cdot Y=24,405$ 付近に位置する。TD7-T3 は、後述する 4・5 トレンチ (TD7-T4・T5) を設定した丘陵頂部から少し下がった位置で、頂部より下方の斜面中腹の平坦面に設定した。また、上述の TD7-T1・T2 を設定した斜面下位の平坦面より上方に位置する。丘陵頂部に近く、部分的に平坦面が観察された位置に設定した。

〔基本土層〕 しまりが弱い表土の除去後、直下の黄褐色など締まりが強い土層で検出を行った。その後、土層の確認のため西端部にトレンチを設定した。

〔調査方法〕 1・2 トレンチを設定した斜面下方の平坦面と丘陵頂部の平坦面の中間の位置に、現況地形で若干の平坦面が観察されたことから、関連遺構の把握を目的として平坦面に 5×8 m 程の一定程度の広さで調査区を設定した。

〔検出遺構〕 盛土等の造成が確認されるのみで、顕著な遺構は確認されていない。断面の観察から、7SD1 堀跡の上部とみられる堆積土層を確認したのみである。表土を掘り下げた後、遺構検出を行ったが、遺構は検出されなかった。

堆積の様相と土層を確認するため調査区西端の一部を掘り下げた。断面の観察からは土層は下方に向かって斜行し、7SD1 堀跡を確認した TD7-T1 及び TD7-T2 が位置する、より下位の平坦面方向へ下ることが観察できる。斜面に直交する方向で確認した土層の堆積からは、本来の地形は大きく南方に向かって傾斜することが理解できる。一部の土層は、炭化物やかかわらけを含むなど、TD7-T2 で確認した 7SD1 堀跡の土層と共通する様相が捉えられる。斜行する状況や土層の類似から、これらが 7SD1 堀跡の堆積土へと傾斜し連続して堆積するとみられる。

さらに下層では、一部で地山とみられる明黄褐色土を確認している。また、旧表土の可能性のある土層なども傾斜している。これらから、本来の地形は急斜面となっており、7SD1 堀跡は切岸状に整形され、土層はそのまま傾斜して下がるとみられる。また、現況で確認された平坦面は 7SD1 堀跡の堆積土を覆い、より上層に造成されている。遺物は表土では近現代のものを含み、土層の様相を勘案すると平坦面の造成はこの段階の造作である可能性が高いとみられる。

(櫻井)

○4 トレンチ・5 トレンチ (TD7-T4・T5) (第 18 図)

〔調査地点〕 $X=-111,360 \cdot Y=24,385$ 付近に位置する。高館の丘陵の中で現在の義経堂が位置し、整備されている範囲から、東に一段下った部分に広がる平坦面を対象に調査区を設定した。TD7-T4 が丘陵の端部、TD7-T5 が丘陵平坦部の中央にやや近い範囲である。

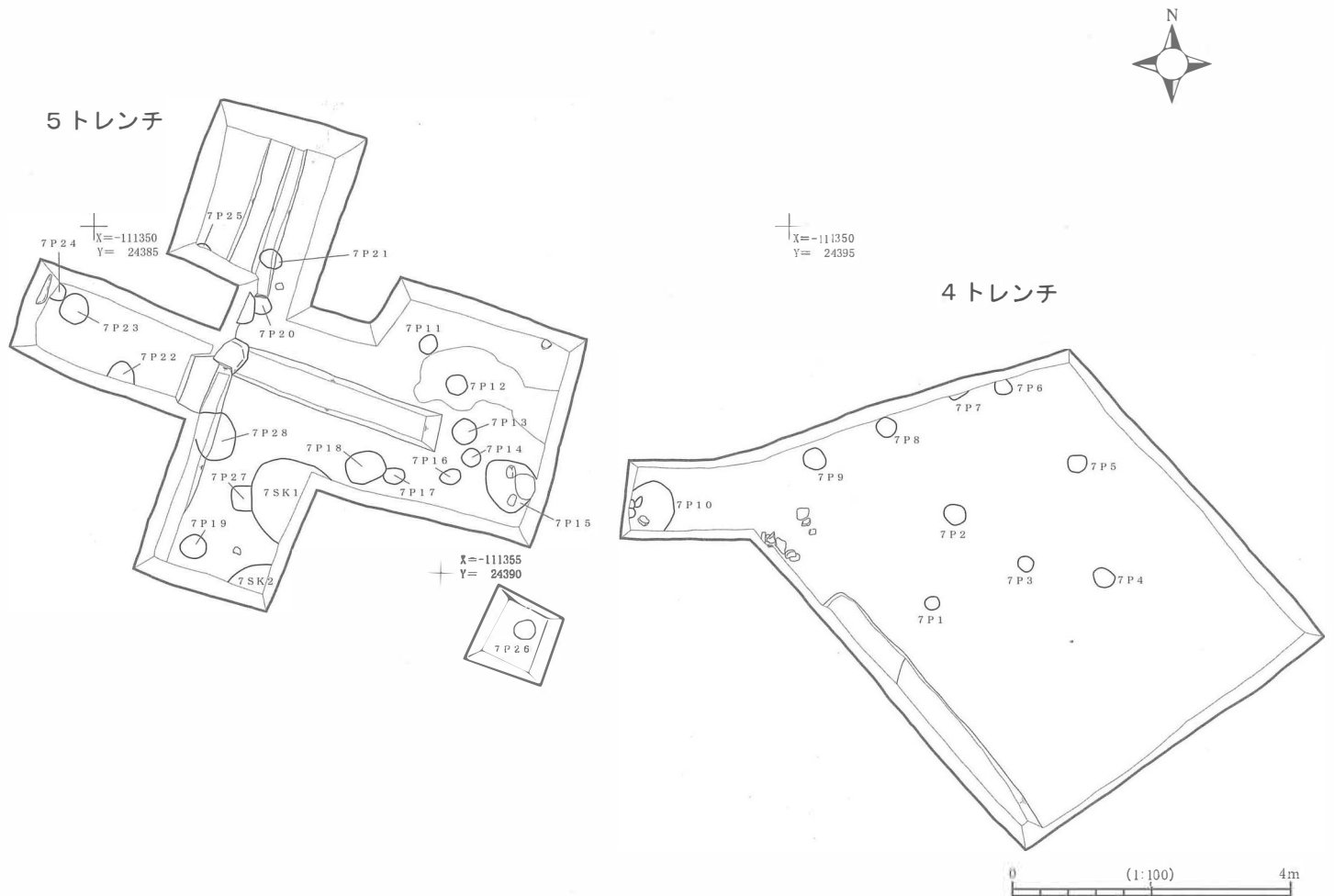
〔基本土層〕 土層は黒色土の表土層が $40 \sim 60$ cm ほどと厚く形成されている。下層にはやや明るい黒色土層が 20 cm 程度堆積する。これらの下層はいわゆる地山層で黄褐色の堅い砂質シルト質土層である。

〔調査方法〕 丘陵頂部に近い位置の平坦面での遺構の分布状況を確認するため、調査区を設定した。

〔検出遺構〕 この調査区は次年度の調査である第8次調査の範囲（TD8-T1）と一部重複しており、遺構の詳細は第3節で合わせて記載する。なお、第7次調査ではこの範囲で30～50cm大の石を複数確認したほか、さらに一段下げた面では柱穴を複数確認している。ただし、この調査ではこれらが組み合う状況は明確ではなく、建物跡を構成できていない。

また、遺物は12世紀代のかかわり、国産陶器が出土し、輸入陶磁器も少量ながら出土している。

（櫻井）



第18図 第7次調査4・5トレンチ 平面図

(2) 出土遺物 (第19～22図)

○第7次調査出土遺物の概要

第7次調査ではかわらけ 24,166.3 g、国産陶器類 4,148.9 g、輸入陶磁器類 67.5 g が出土している。各調査区ごとの出土量は表4のとおりである。

TD7-T1では新たな掘削を行っていないため、出土量は極めて少ないが、他の調査区からは12世紀代のかかわりが一定量出土している。7SD1堀跡の精査を行ったTD7-T2からの出土が目立つが、検出にとどまる範囲が多いTD7-T3及びTD7-T4・T5からもかわらけが一定量出土しており、第7次調査の

調査範囲である高館丘陵の東側周辺が 12 世紀代に機能したことを反映した出土傾向と推察できる。

なお、図化していない資料中でも、11 世紀代などの古代の土器と判断できる明確な特徴を持つ資料は確認できなかった。また、国産陶器類及び輸入陶磁器類も一定量出土している点は遺跡の内容を検討する上で重要な要素と捉えられる。また一方で、上層や表土には近世の陶器などが含まれるが、中世後期と判断できる資料も含まれていない。旧表土中とみた土層中には縄文土器の細片なども含む。このほか、表土などからは鉄製品なども少量ながら出土している。

(櫻井)

表 4 第 7 次調査出土遺物

	かわらけ (g)	国産陶器類 (g)	輸入陶磁器類 (g)	その他
T 1	190.8	-	-	鉄製品か
T 2	17,753.0	3,031.0	67.5	石製品、鉄製品等
T 3	3,055.6	416.6	-	鉄製品等
T 4・T 5	3,167.4	701.3	-	近世陶器、鉄製品等
合計	24,166.3	4,148.9	67.5	

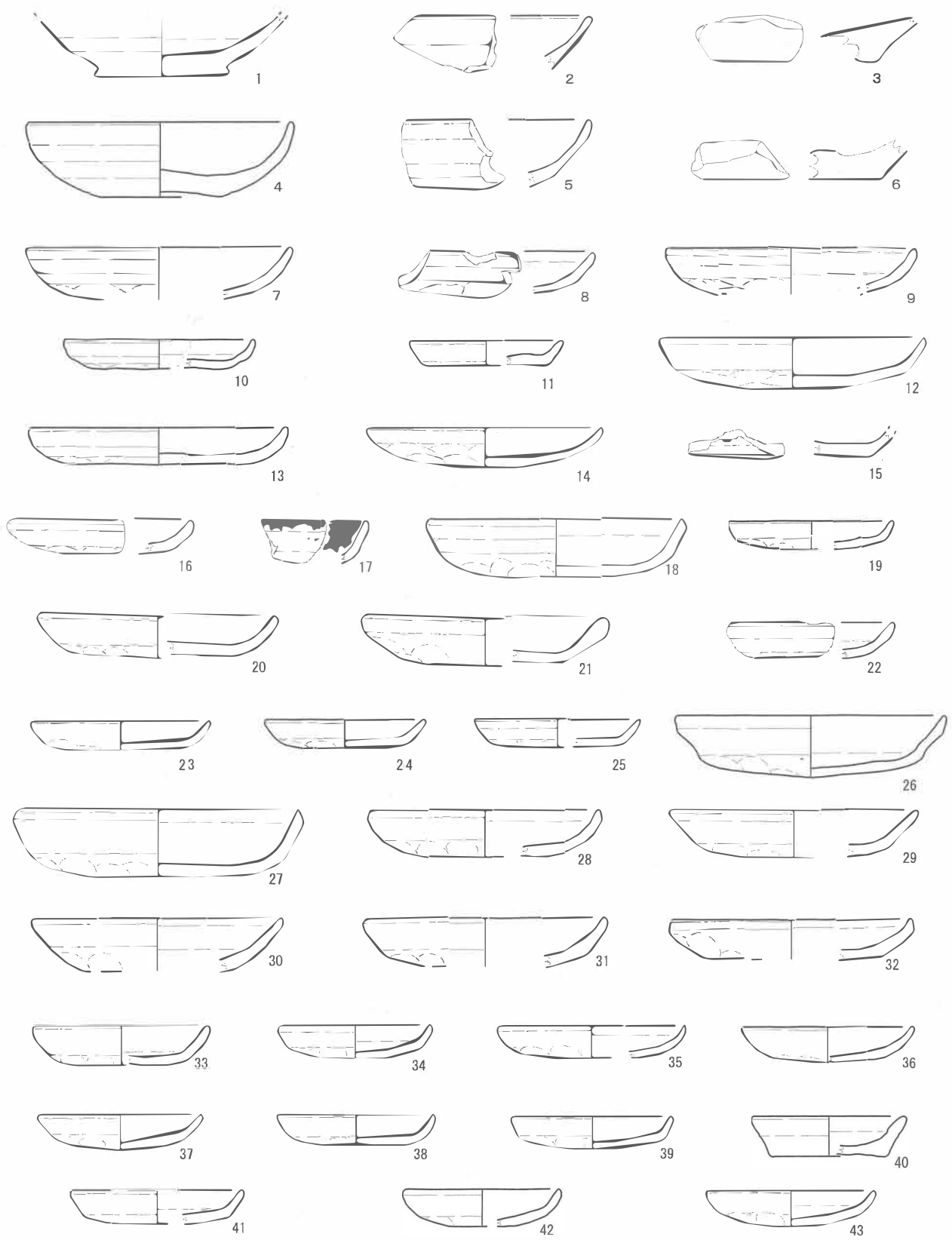
○ 7SD1 堀跡出土遺物 (第 19 ~ 21 図)

かわらけ 16,880.8 g、国産陶器 3,031.0 g、輸入磁器 67.5 g が出土している。このうち、かわらけ 43 点、国産陶器 40 点、輸入陶磁器 6 点を図示した。

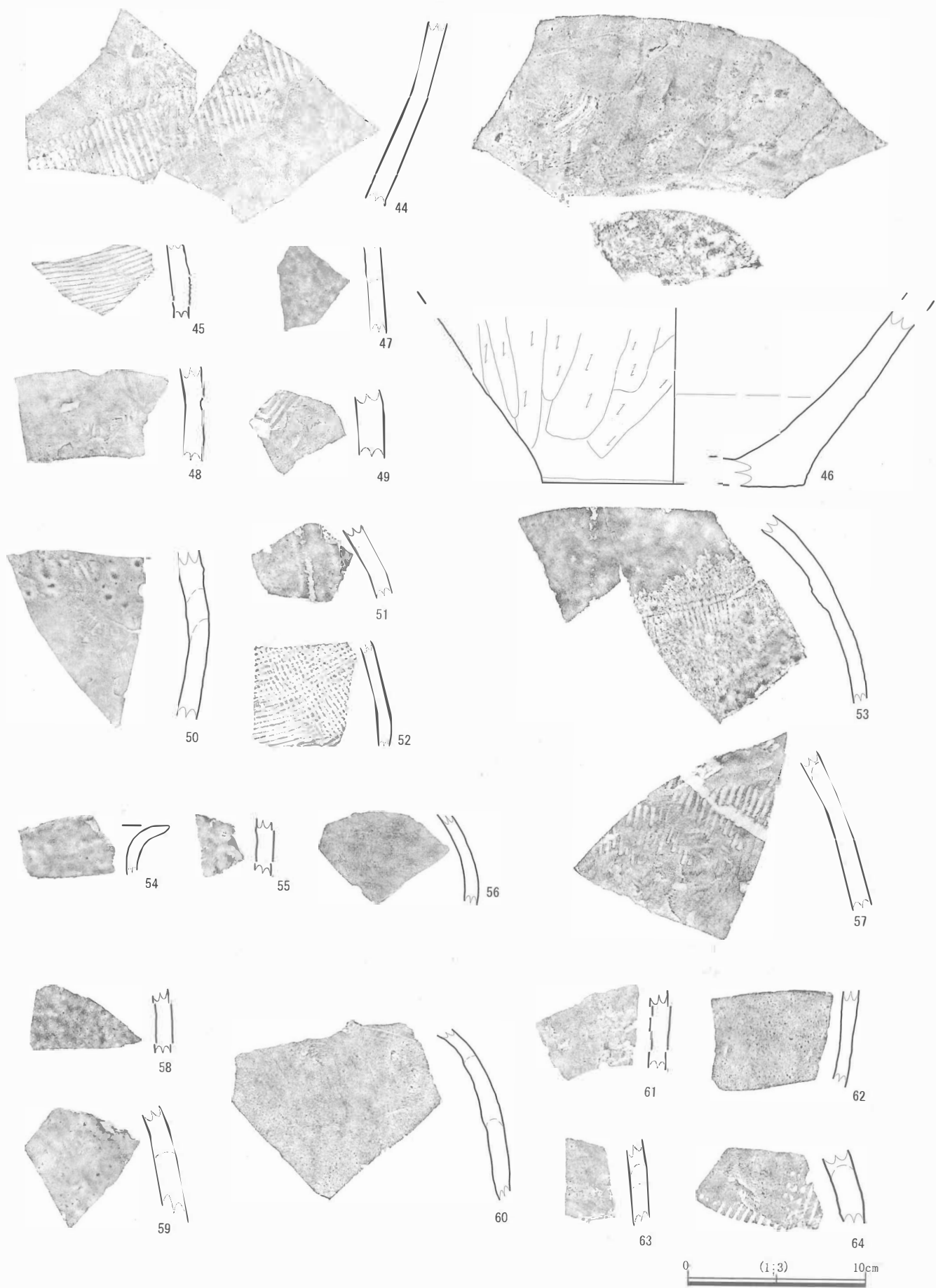
1 は最下層付近から出土したロクロかわらけ大皿である。全体の形状は不明だが、底径は 7.0cm ほどである。2 は 14 層から出土したロクロかわらけ大皿である。10 層以下から出土した資料のうち、図化できたものはいずれもロクロかわらけである (1 ~ 6)。図示できていないが、細片では手づくねかわらけを含む。いずれも流入した土層からの出土だが特徴を概観すると、遺物の種別では埋土下位の資料にロクロ成形のかわらけを含むものの、同一の土層からは手づくねかわらけの資料も含み、いずれかに偏在するものではない。器形の特徴からも 12 世紀の前半代に顕著な器形は確認できない。多くの資料は 12 世紀後半代に多くみられる特徴を示す土器群と捉えられる。

10 層より上層から出土した資料では (7 ~ 43)、手づくねかわらけを多く含む。埋土上位に位置する 5 層からの出土資料が図示したものは多い (26 ~ 39)。手づくねかわらけ大皿では口径 14cm 以下の小さい器形の資料が多い。27 は口径 15.4cm とやや大型の器形である。手づくねかわらけ小皿なども含め、いずれの資料も 12 世紀後半の資料にみられる特徴をもつ資料が多い。

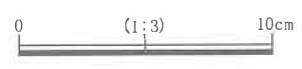
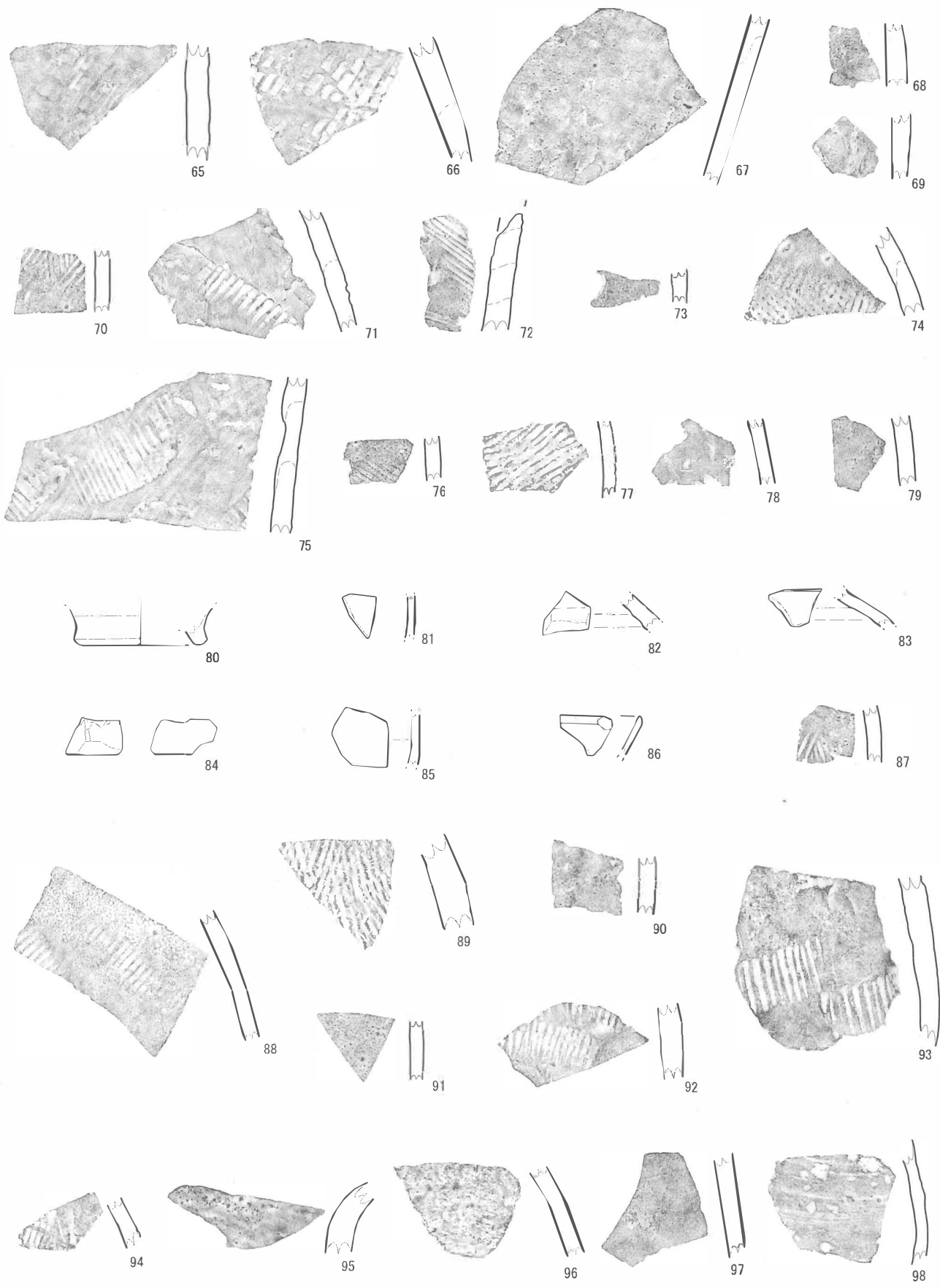
国産陶器は、埋土上位に位置する 1 ~ 6 層からの出土が大半を占める (44 ~ 93)。破片が多く器形の復元ができる資料は少ないものの、破片の特徴から、12 世紀代の資料とみられる。平泉の他遺跡で確認されている国産陶器類と同様に産地は常滑産及び渥美産が大半を占め、須恵器もしくは須恵器系陶器が少量含まれる。器種は甕類や壺類が多くを占める。常滑や渥美産の押印は、縦線文が施されるものが多い。56 と 77 は須恵器で、器形の特徴からは古代に属する資料を含む可能性はあるものの、確定できない。なお、古代の土師器は確認されておらず、須恵器についても他の陶器類と同時期の可能性も高い。また、土師器類でも 11 世紀代などの時期に特定できる資料は確認できていない。輸入磁器類は (80 ~ 86)、白磁壺類が多い。80 ~ 85 はいずれも白磁で四耳壺類とみられる。86 は 1 層から出土した青磁碗である。いずれも 12 世紀代の資料とみられる。図化していない資料でも、12 世紀代以降の中世に属するとみられる資料は確認できていない。



第19図 第7次調査出土土器類実測図(1)



第 20 図 第 7 次調査出土土器類実測図 (2)

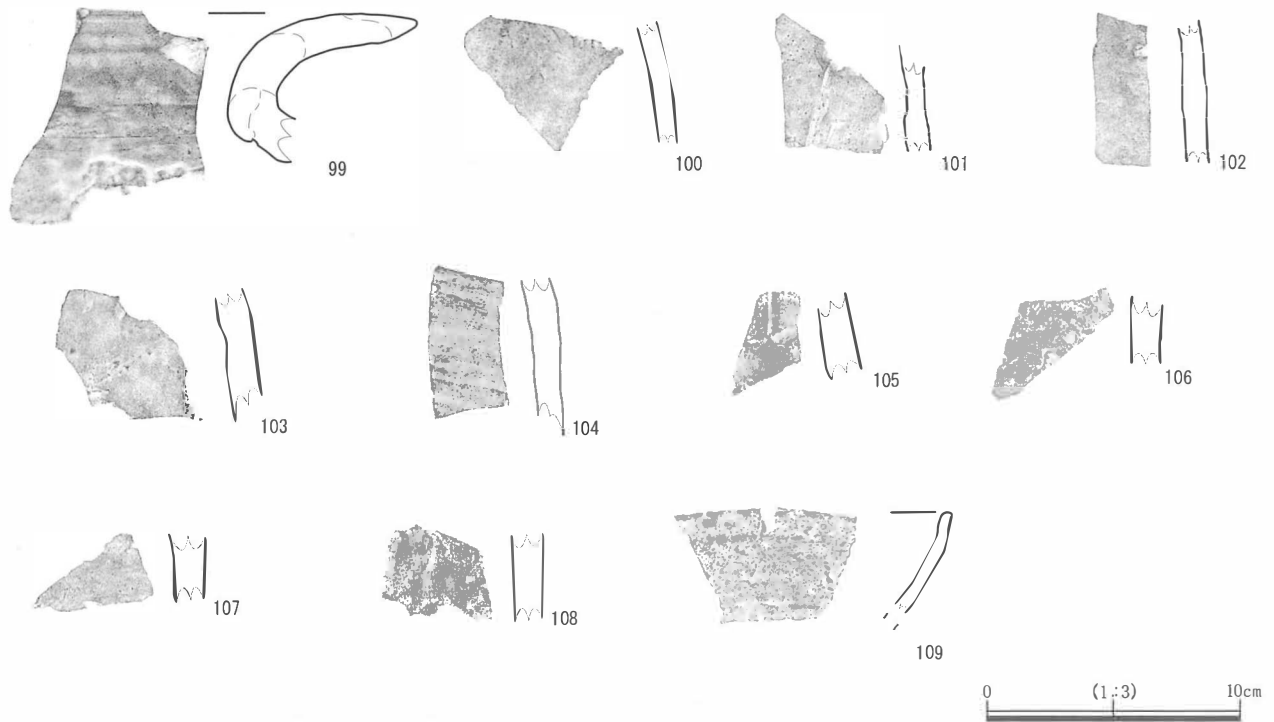


第 21 図 第 7 次調査出土土器類実測図 (3)

○遺構外出土遺物（第 21 ～ 22 図）

国産陶器類 23 点を図示した（87 ～ 109）。表土からの出土が大半を占める。国産陶器類は、破片資料のみで器形を復元できる資料は含まれていない。渥美産及び常滑産の甕壺類が多くを占め、89 の須恵器系陶器及び 98 の須恵器を除き、常滑産及び渥美産とみられる。109 は山茶碗とみられる口縁部から体部片である。

（櫻井）



第 22 図 第 7 次調査出土土器類実測図（4）

第3節 第8次調査の遺構と遺物

(1) 各トレンチの調査成果 (第12・23図)

○1トレンチ (TD8-T1) (第24図)

〔調査地点〕 $X=-111,360 \cdot Y=24,385$ 付近に位置する。第7次調査で TD7-T4・T5 を設定した範囲の周囲を広げ、一部重複して調査している。

現在の高館周辺は北上川によって大きく丘陵が削られたこともあり、丘陵頂部を含めても平坦な地形面が広がる位置は少なく、建物跡等の所在が推定可能な範囲も限定的である。この調査区は、現在義経堂が所在する丘陵頂部からは地形的に一段下がるものの、頂部に近く比較的平坦な地形が確認できる場所に設定した。

高館の丘陵の中で最も高い位置にあたる現在の義経堂及び周囲の整備されている範囲から、東側に位置する柳之御所遺跡の方向へ向かって地形的に一段下る部分にあたる平坦面にあたる。なお、この2つの平坦面の間は、時期は不明だが、小溝状の堀切の痕跡がある。

〔基本土層〕 土層は黒色土の表土層が40～60cmほどと厚く形成されている。下層にはやや明るい黒色土層が20cm程度堆積する。これらの下層はいわゆる地山層で黄褐色の堅い土層である。



第23図 調査区位置図(2)

〔調査方法〕 第7次調査で柱穴等が所在することが確認できたため、建物跡等を構成するか確認するため、第7次調査の調査区を周囲に広げた。可能な範囲で平面的に広げることを意図したが、周囲は雑木が多く、十分な面積を確保することは難しかった。また、雑木林の中に設定した調査区のため、照度なども遺構の検出に際しては良好な条件とは言い難い部分もある。調査では表土を人力によって掘削した後、やや明るい黒色土層の上面などで適宜遺構検出を行いながら、掘り下げを行った。第7次調査では全体に一段下げて検出を行っているが、第8次調査では石列を検出したこの土層の上面で検出を行った。より掘り下げた場合には遺構の検出数が増えることが想定できるが、今次調査区は周囲の条件など必ずしも良好ではなく、遺構保護の点からもこの土層上面での検出に努めた。

〔検出遺構〕 検出遺構は、柱穴31個、土坑2基、焼土の散布箇所などである。また、扁平な平面形が円形の礫を5個確認している。

〈柱穴、焼土等〉 第7次調査では、下層のやや明るい黒色土層の上面で30cm大の石を複数確認しており、第8次調査区ではこの面の上面で遺構の検出を行った。柱穴等は確認できなかったが、石はこの面で5個確認している。石の周囲に断面観察用のトレンチを設定し、下層や地業の確認を行ったものの掘り込み等は確認できず、旧表土に直接置かれたような状況が観察された。石の大きさは20～40cmとやや幅はあるものの、いずれも平坦な面が上面になっている。

このうち調査区中央付近の4個については東西方向に並ぶようにも観察されるが、石の中心部で計測すると10cm程度南北方向に位置が乱雑になっており、正確な直線とはならない。また、表面で観察できた凹みを基準にした場合でも必ずしも直線的に並ぶものではなかった。石の形状や一部に若干の凹みが観察できることから礎石等の可能性も残るが、周囲に広がらないため、確定できない。12世紀代の遺構でみられるような地業等がみられないことや、検出面についても土層の様相からはより新しい段階の旧表土の可能性が高く、この石列についても年代の確定はできないものの12世紀段階より後世のもの可能性が高い。ただし、現状では石列は1列のみしか確認できていないが、周辺の土層からは本来この範囲の地形は南側に傾斜していたとみられ、これらの石も原位置を保っていない可能性があることは留意すべき点である。

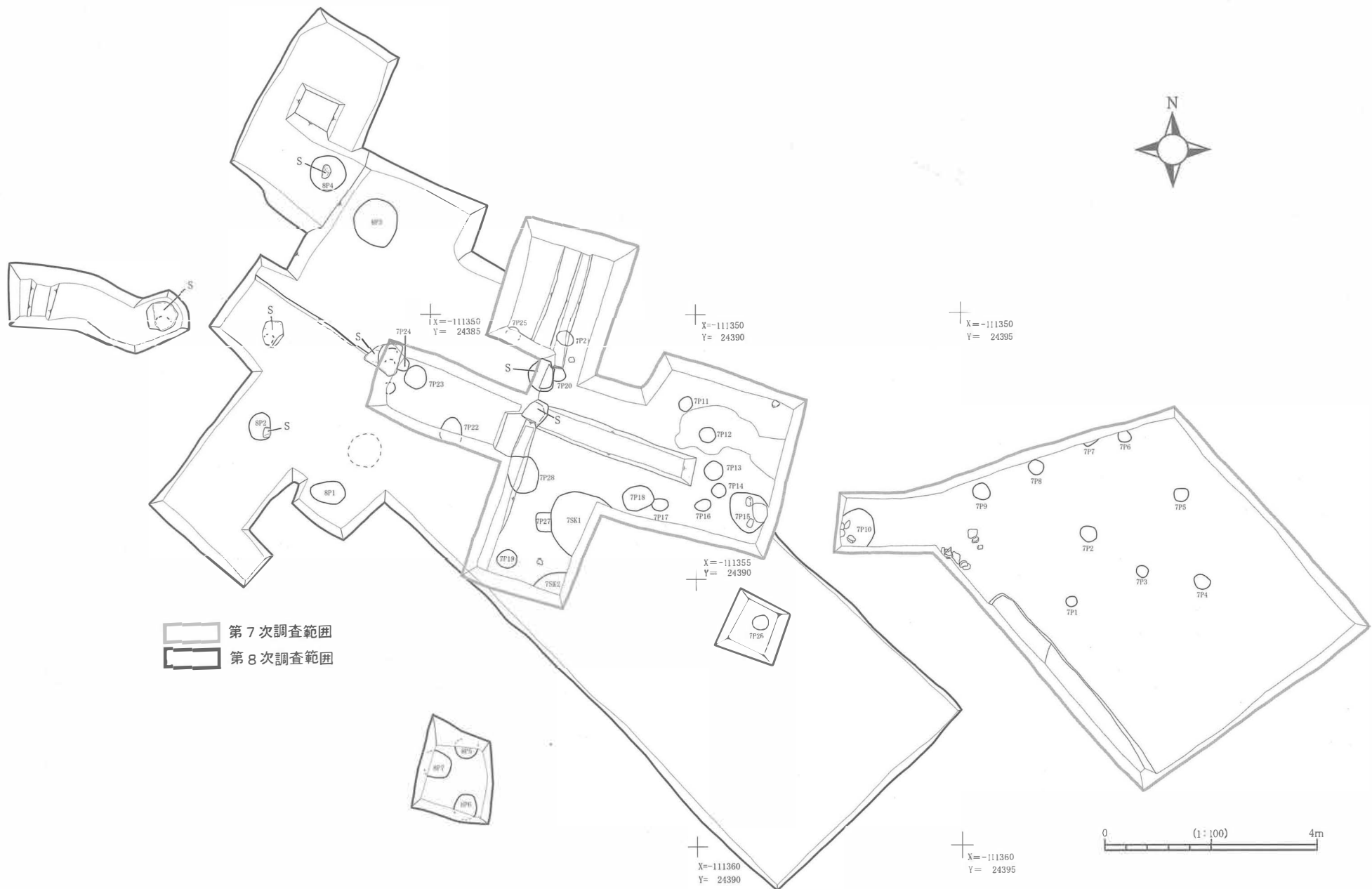
石列を確認した、やや明るい黒色土の上面で周囲の精査を行ったが、柱穴等は検出できていない。また、建物とみた場合に想定される位置でも組になる石は確認できておらず、明確な建物跡等は確認できなかった。第7次調査を中心に一部はさらに一段掘り下げ、いわゆる地山面で検出を行った。この面では第7次調査と第8次調査を合わせて31個の柱穴を検出している。いずれも円形を基調とし、径20cmほどの規模が小さい柱穴である。一部は並ぶように観察されるものもあるものの、建物跡を構成できていない。第8次調査で上面での遺構の検出を行い、掘り下げを一部にとどめたことは留保されるが、これらの柱穴からは明確な建物跡等は復元できていない。また、個別の柱穴についての個々の特徴からも規模等が小規模で、遺物等は確認できておらず、時期の特定は難しい。埋土は黒色土を基調に構成される。土層の締まりなどの土質からは近現代の遺構の特徴とはやや異なるようにも観察されるが、小規模な柱穴でもあり、いずれの時期に帰するかは確定できない。

このほか、一段下げた地山面で、焼土粒がややまとまって分布する集中域が複数ある。ただし、いずれも部分的なもので、明確な遺構は確認できていない。

遺物は12世紀代のかわけ、国産陶器が出土し、輸入陶磁器も少量ながら出土している。近世以降の遺物が少量、表土で出土しているものの、12世紀を含まないそれ以降の時期の遺物は少ない。また、鍛冶等に関連するとみられる滓片が表土から出土している。

(櫻井)

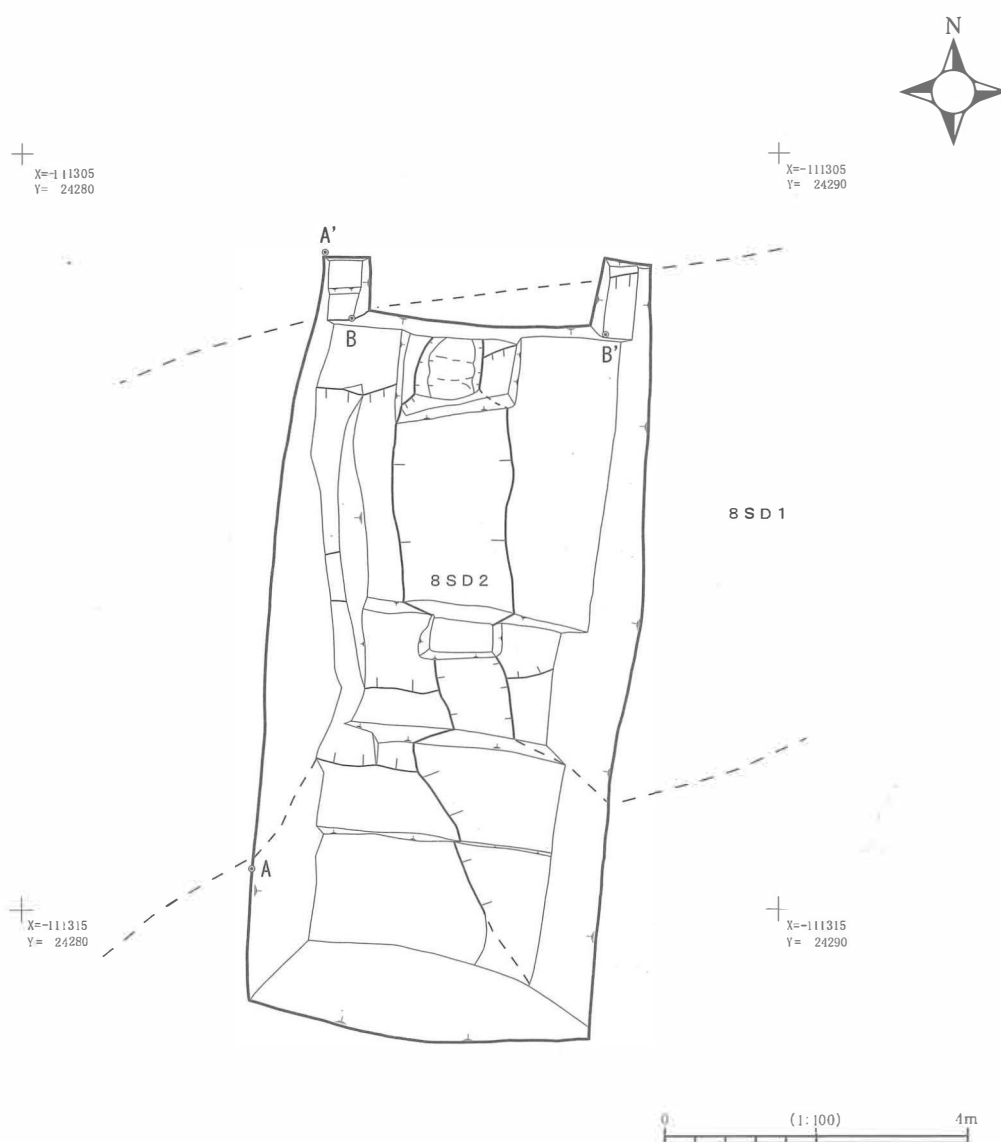
第24図 第8次調査1トレンチ 平面図



○2トレンチ (TD8-T2) (第23・25・26図)

〔調査地点〕 X=-111,305・Y=24,280 付近に位置する。第7次調査で確認した堀跡の延長の確認を目的とし、高館の丘陵部の南側、現在の義経堂の直下の平坦面を対象にしている。第7次調査では丘陵東部の部分で堀跡を確認したが、走行方向などに課題も残されていた。そこで、丘陵の南西側などで堀跡の有無を含めて遺構の状況を確認する必要があると考えられた。

周囲の平坦面の分布などの地形の状況から、帯状に等高線に沿う平坦面が伸びる位置に堀跡が位置する可能性があるとして想定し、第7次調査の調査範囲から西へ200 m程離れた位置に調査区を設定した。この位置は駐車場として利用されていたため、近現代の改変も想定されたが、周辺部の地形の観察から平坦面の残存理由の一端は旧来の地形が残ることに起因する可能性が高いものと判断した。



第25図 第8次調査2トレンチ 平面図

〔基本土層〕 現在の駐車場造成時の土層とみられる表土を除去した直下の、いわゆる地山層にあたる黄褐色粘土層での検出となった。地山層は斜面地のため、上層からの崩落土で形成される。土層中に円礫等を含む位置もある。

〔調査方法〕 堀の走行位置を想定し、地形全体での傾斜方向に直行させて幅5m、長さ10m程の調査区を設定した。堀跡を検出した後、一部は土層確認のため埋土の掘削を伴う精査を行った。

なお、調査時には縦方向の堀跡と重複して調査区を設定したかたちとなったため、検出時に縦方向の溝については本来の法肩にあたる位置をやや掘り下げすぎている箇所がある。

〔検出遺構〕 検出遺構は表土直下での検出となる。想定された横方向の堀跡（8SD1堀跡）と、それを切って直交する溝跡（8SD2溝跡）の2条の堀・溝跡を確認した。

〈8SD1堀跡〉 8SD1堀跡は等高線に沿って走る横方向の堀跡で、現在確認できる規模は幅約6.2mほど、深さは遺構を検出した面から約1.9mほどである。底面は緩やかな傾斜をもち、緩やかなV字に近い形状を呈する。平面での観察及び断面の状況から、8SD2溝跡に壊されていることがわかる。

堆積土は自然堆積の土層で形成され、いずれも斜面上部からの流入による堆積を基本とする。最下層に近い部分では円礫を含む土層がある。特に、19層では人頭大の石を多く含み、斜面上部からの崩落とみられる。いずれの土層からも出土遺物は少ないが、19層以下の下層から12世紀代とみられるかわらけ片が少量出土している。これらより上層においても、堀の堆積土の多くは斜面上方からの流入による自然堆積である。かわらけ小片や炭化物を含む土層も散見されるものの、土器類の出土はきわめて少ない。

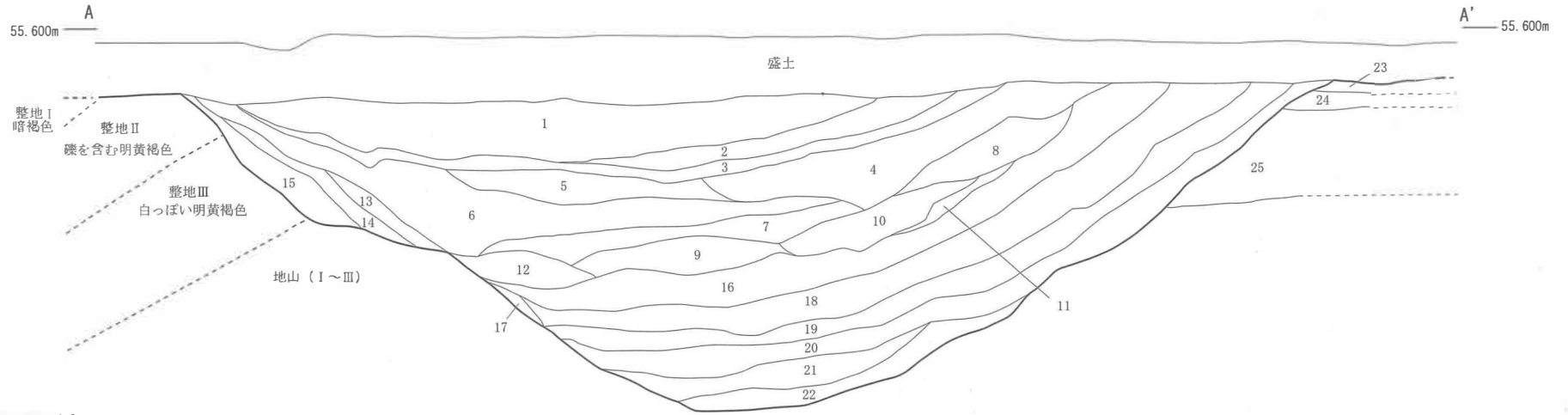
また、斜面下方にあたる範囲の17層では斜面下方にあたる南側からの流入による土層が確認できる。この層より上位の13～15層でも地山ブロックなどを含み、斜面下方からの流入である。斜面下方に現状の肩より高位まで、地山ブロック土を用いた人為的な整地層が存在した可能性が高いと判断している。ただし、土量は少なく本来の法肩の位置の推定は困難である。断面での観察では堀の法肩の部分で確認した土層（断面図上の整地Ⅰ～Ⅲ）を整地層と判断している。8SD1堀跡の斜面下方は黄褐色土の地山土が斜面方向に傾斜して堆積する。土質はこの範囲の地山土にあたる黄褐色の粘質土である。ブロック状の地山粒が土層中に確認できる部分もある。これらの整地Ⅰ～Ⅲとした土層が、斜面下方への崩落による自然地形の形成によるものか、人為的な整地によるものかはこの範囲のみでは確定が難しいものの、他の調査範囲や地山との土質の差異から整地地業による土層と考えられる。なお、同様の整地層は第9次調査で横方向の堀から斜面下方に当たる部分で確認しており、この周囲の全体で一連の整地が行われたとみられる。また、地点は離れるものの第7次調査では同様の範囲を堀掘削時の掻き揚げに伴うとみられる土層で整地しており、この範囲についても周囲の様相からは斜面下方を造成して整地により平坦な範囲を形成したとみられる。

3層は旧表土とみられる黒褐色土層で、堀跡が自然堆積によって埋没した後、この位置でくぼんだ状況となっていた時期が想定される。それより上層の1～2層は近世以降の盛土層である。

〈8SD2溝跡〉 8SD2溝跡は、高館の斜面方向と同方向に頂部及び等高線に直交して延びる溝跡である。幅は約3mほど、深さは確認した面から約1mほどである。部分的な確認だが、底面が平坦な逆台形状を呈する。8SD1堀跡と直交し、それを壊して構築される。埋土は2層に分層可能だが、いずれの土層も地山ブロックを含み、人為的な埋め戻しによる堆積である。

遺物は出土しておらず時期の特定は難しいが、遺構の重複から8SD1堀跡より新しい。また、埋土中に旧表土などの発達もみられず、8SD1堀跡の上層の盛土を掘り込んで構築されており、他地点で確認されている縦方向の堀跡との相違が目立つ。より新しい時期の遺構の可能性が高いとみられる。

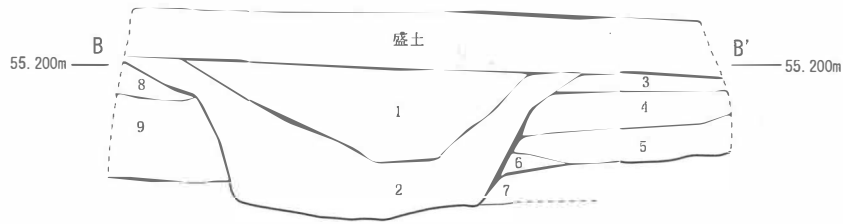
8SD1 (A-A')



[8SD1 断面A-A']

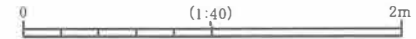
- | | | | | | | | |
|--------------------|----------|------------|----------------------------------|--------------|----------|------------|-------------------------------------|
| 1. 近代盛土 | 2. 5Y8/6 | 黄色 | 地山等のブロックで構成され、円礫を多く含む層 | 13. 南側からの崩落土 | 2. 5Y7/6 | 明黄褐色土 | かわらけ炭化物を少量含む 地山ブロックを含む層で薄い南側からの崩落土 |
| 2. 近代盛土 | 2. 5Y8/4 | 淡黄色 | 地山ブロックで構成される層、1層と同様だが、より混じりが少ない | 14. 南側からの崩落土 | 2. 5Y6/4 | にぶい黄色土 | 地山ブロック炭化物を少量含む |
| 3. 旧表土 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | | 15. 南側からの崩落土 | 2. 5Y8/4 | 淡黄色土 | 地山崩落土で構成される。13層と同様に堀構築時にかき上げた土層の崩落か |
| 4. 自然堆積地山ブロック等は少ない | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 5cm程の円礫を含み、炭化物が多い 自然堆積の土層で山側から崩落 | 16. 山側からの崩落土 | 10YR8/6 | 黄褐色シルト質土 | 地山ブロック 炭化物を含む土層で、山側からの崩落 |
| 5. 自然堆積地山ブロック等は少ない | 2. 5Y6/4 | にぶい黄色シルト質土 | 炭化物を少量含む | 17. 南側からの崩落土 | 2. 5Y6/4 | にぶい黄色シルト質土 | |
| 6. 自然堆積地山ブロック等は少ない | 2. 5Y6/4 | にぶい黄色シルト質土 | 炭化物を少量含む しまりやや強い | 18. 山側からの崩落土 | 10YR7/6 | 明黄褐色土 | 地山ブロックを大量に含み、山側からの崩落土 |
| 7. 自然堆積地山ブロック等は少ない | 2. 5Y4/4 | オリーブ褐色シルト | 円礫、炭化物を多く含む地山ブロックが少量含まれる | 19. 山側からの崩落土 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | 大小の円礫を大量に含み、礫で構成される、かわらけ、陶器が出土 |
| 8. 自然堆積地山ブロック等は少ない | 2. 5Y5/3 | 黄褐色土 | 円礫、地山ブロックを少量含む | 20. 山側からの崩落土 | 2. 5Y7/6 | 明黄褐色土 | 砂質シルト10cm程度の円礫を少量含む |
| 9. 地山の崩壊土が多い層 | 10YR8/8 | 黄褐色土 | 地山ブロックを多く含む層で、少量礫を含む | 21. 山側からの崩落土 | 2. 5Y6/4 | にぶい黄色砂質シルト | |
| 10. 地山の崩壊土が多い層 | 2. 5Y6/8 | 明黄褐色土 | 地山崩落土で構成される | 22. 山側からの崩落土 | 2. 5Y7/3 | 淡黄色砂質シルト | |
| 11. 自然堆積 | 10YR7/6 | 明黄褐色シルト | | 23. 地山I | 2. 5Y5/2 | 暗灰黄色土 | |
| 12. 自然堆積 | 10YR7/4 | にぶい黄褐色 | シルト質土 炭化物、礫を少量含む | 24. 地山II | 2. 5Y8/6 | 黄色土 | |
| | | | | 25. 地山III | 2. 5Y4/2 | 暗灰黄色土 | |

8SD2 (B-B')



[8SD2 断面B-B']

- | | | | |
|----------|----------|------------|---------------------------------------|
| 1. 8SD2 | 2. 5Y7/6 | 明黄褐色土 | 人為的な埋土で盛土造成にもなる土層 |
| 2. 8SD2 | 2. 5Y8/4 | 淡黄色土 | 地山ブロック等2. 5Y6/2灰黄色土層で構成される人為的な土層とみられる |
| 3. 8SD1 | | 8SD1(A-A') | 断面18層と同じ |
| 4. 8SD1 | | 8SD1(A-A') | 断面19層と同じ |
| 5. 8SD1 | | 8SD1(A-A') | 断面20層と同じ |
| 6. 8SD1 | | 8SD1(A-A') | 断面21層と同じ |
| 7. 地山I | | (A-A') | 断面23層と同じ |
| 8. 地山II | | (A-A') | 断面24層と同じ |
| 9. 地山III | | (A-A') | 断面25層と同じ |



〔遺構の変遷〕 調査区内での遺構の新旧は、遺構の重複関係から下記のように捉えられる。

8SD1 堀跡（横方向の堀）→ 8SD2 溝跡（縦方向の溝）

（2）出土遺物（第27図）

○第8次調査出土遺物の概要

第8次調査ではかわらけ 1,204.0 g、国産陶器類 874.7 g が出土している。各調査区ごとの出土量は下表のとおりである。

各調査区からは12世紀代のかわらけが少量出土している。第7次調査でかわらけが一定量出土した位置と同様に丘陵東側に設定した TD8-T1 ではかわらけや国産陶器が出土しており、当該範囲の12世紀代における機能が窺える。一方で丘陵の中央から西側にあたる位置に設定した TD8-T2 ではかわらけ類の出土が少なく、出土も表土などからである。なお、図化していない資料中でも、12世紀代以前の古代の土器と判断できる明確な特徴を持つ資料は確認できなかった。また、国産陶器類も一定量出土している点は遺跡の内容を検討する上で注目できる。

また、上層や表土には近世の陶器などが含まれるが、中世後期と判断できる資料は含まれていない。

丘陵頂部にあたる TD8-T1 の表土などからは羽口とみられる破片や鉄滓なども少量ながら出土している。

表5 第8次調査出土遺物

	かわらけ (g)	国産陶器類 (g)	輸入陶磁器類 (g)	その他
T 1	941.9	476.1	-	羽口、鉄滓等
T 2	262.1	398.6	-	-
合計	1,204.0	874.7	-	

○8SD1 出土遺物

国産陶器類が 331.0 g 出土している。このうち4点を図示した（110～113）。110、111は常滑産甕の体部である。112は渥美産甕の口縁部、113は渥美産甕類の体部である。

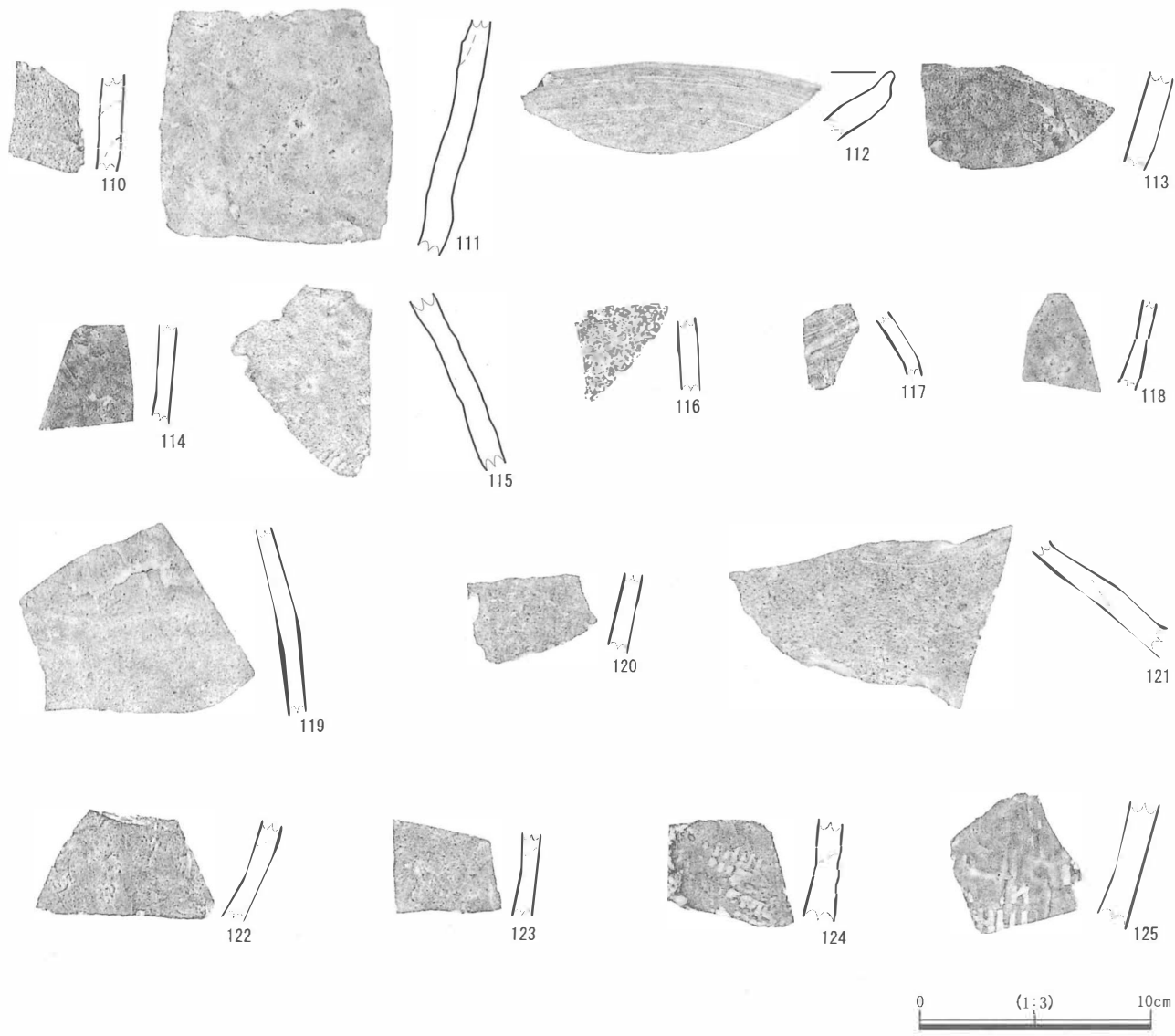
このほか、図示できていない資料では12世紀代とみられるロクロ及び手づくねのかわらけが出土している。

○遺構外出土遺物

国産陶器類が 543.7 g 出土している。12点を図示している（114～125）。いずれも調査区表土からの出土で、多くは丘陵東側の頂部にあたる TD8-T1 からの出土である。常滑産とみられる資料が多く、渥美産も少量含まれる。いずれも甕類及び壺類で、口縁部1点のほかは体部片である。

115は8SD1堀跡の堆積土中に含まれたものではないが、TD8-T2からの出土である。常滑産の甕類の体部片である。

（櫻井）



第 27 図 第 8 次調査出土土器類実測図

第 4 節 第 9 次調査の遺構と遺物

(1) 各トレンチの調査成果 (第 12・23 図)

○ 1 トレンチ (TD9-T1) (第 28・29 図)

〔調査地点〕 X=-113, 150・Y=24, 270 付近に位置する。8SD1 堀跡の延長の確認を目的とし、高館の丘陵部の南側、現在の義経堂の直下の平坦面を対象にしている。第 7 次調査では丘陵東部の部分で堀跡を確認したが、走行方向などに課題も残されていた。そこで、遺跡範囲の中での堀の位置を確定していくためには、丘陵の南西側などで遺構の有無などを確認する必要があると考えられた。そのため、第 8 次調査では周囲の平坦面の分布など地形の状況から、堀跡が延びる可能性があると思定できる範囲に、調査区を設定した。

第 3 節で既述のとおり、第 8 次調査ではこの範囲で堀跡を確認したものの走行方向などに課題も残

されていた。そこで第9次調査では堀の延長方向などの確認を目的として、第8次調査の範囲(TD8-T2)に隣接した北西側に調査区を設定した。

〔基本土層〕 現在の駐車場造成時の土層とみられる表土を除去した直下の、いわゆる地山層にあたる黄褐色粘土層での検出となった。地山層は斜面地のため、上層からの崩落土で形成され、円礫等を含む位置もある。

〔調査方法〕 堀の走行位置を想定し、幅10m、長さ15m程の調査区を設定した。その後、さらに西側についても幅3m、長さ15m程の調査区を拡張して設定した。堀跡を検出した後一部を精査したほか、縦方向の溝についても一部精査を行った。

〔検出遺構〕 堀跡1条、溝跡2条、整地範囲を確認した。

〈8SD1 堀跡〉 8SD1 堀跡は等高線に沿って走る横方向の堀跡で、幅6.5mほどの規模で確認した。堀はそのまま西に向かって延びるが、丘陵の傾斜方向と同方向の等高線に直交して延びる縦方向の溝(9SD3 溝跡)によって端部が壊されている。この調査区では遺構の精査を行っていないが、第8次調査の所見からは深さ2mほどでV字に近い断面形状が推察できる。

8SD1 堀跡の北側は、駐車場等の造成時に平坦面が広げられたとみられ、本来は斜面を利用して上方側の法肩を成形して8SD1 堀跡が構築されたとみられる。現在の平坦面で確認している堀の肩で推察される堀の幅より規模が大きく、上幅はより広がるものとみられる。

8SD1 堀跡の走行方向は、第8次調査及び第9次調査を合わせて20m程確認したこととなる。第8・第9次調査の位置では、高館丘陵の頂部に平行して東西方向に走る。ほかの調査位置では丘陵端部に沿って位置して堀跡が確認されており、東側への延長は丘陵頂部に沿う方向で、そのまま東方向へ延びると推察できる。

また、8SD1 堀跡の西端は上述のとおり、9SD3 溝跡によって壊されている。周囲の地形状況を観察すると、平坦面はここで途切れることが理解できる。この周囲では丘陵の中腹を廻る平坦面がここで途切れ、より上部には縦方向の溝跡(9SD3 溝跡)の痕跡が斜面上方へと延びる。現況地形で確認できる西側の平坦面の延長はそのまま平坦面を縮小しながら、西側に位置する自然地形の急斜面に至る。これらから8SD1 堀跡の走行は新規の溝によって壊されて確認できないが、より西方に堀の構築を可能とする地形面は確認できず、平面的な観察からはそのまま自然地形の斜面方向に流れて消えるものと推察できる。また、現状で観察できる自然地形自体は、城館段階での造作も想定されうるものの、周囲との地形的連続性からは12世紀代に形成されている地形を保ち、当時においても斜面地となっていたものと推察している。現状の調査範囲の制約などはあるものの、これより西側には遺構が伸びる余地が確認できない。堀による圍繞範囲はこの位置まで堀が延びた後、自然地形による傾斜によって区切られた可能性が想定できよう。

〈9SD3 溝跡〉 8SD1 堀跡を切って端部を壊す、等高線に直交して走る縦方向の溝跡である。9SD3 溝跡は幅4～5mほど、現地表面からの深さ4mほどである。

西側に拡張した調査区は概ね、9SD3 溝跡の平面に収まっており、9SD3 溝跡の端部は一部で確認したのみである。9SD3 溝跡の、斜面上方への延長は現況の地形でもくぼみ状に観察され、そのままより上方へと延びることが推察できる。一方、斜面下方については、既述のとおり急傾斜の自然地形となっており、そのまま下るとみられるが、下端の位置は判然としない。

堆積土は自然堆積によるもので、上層では斜面上方からの崩落土による堆積で、地山ブロックや円礫を多く含む。粘性の弱い土質による堆積が多く観察できる。下層は水分を多く含むほか、斜面上方からとみられる円礫や地山ブロックを含む土層が確認される。上層では12世紀代の遺物や近世以降

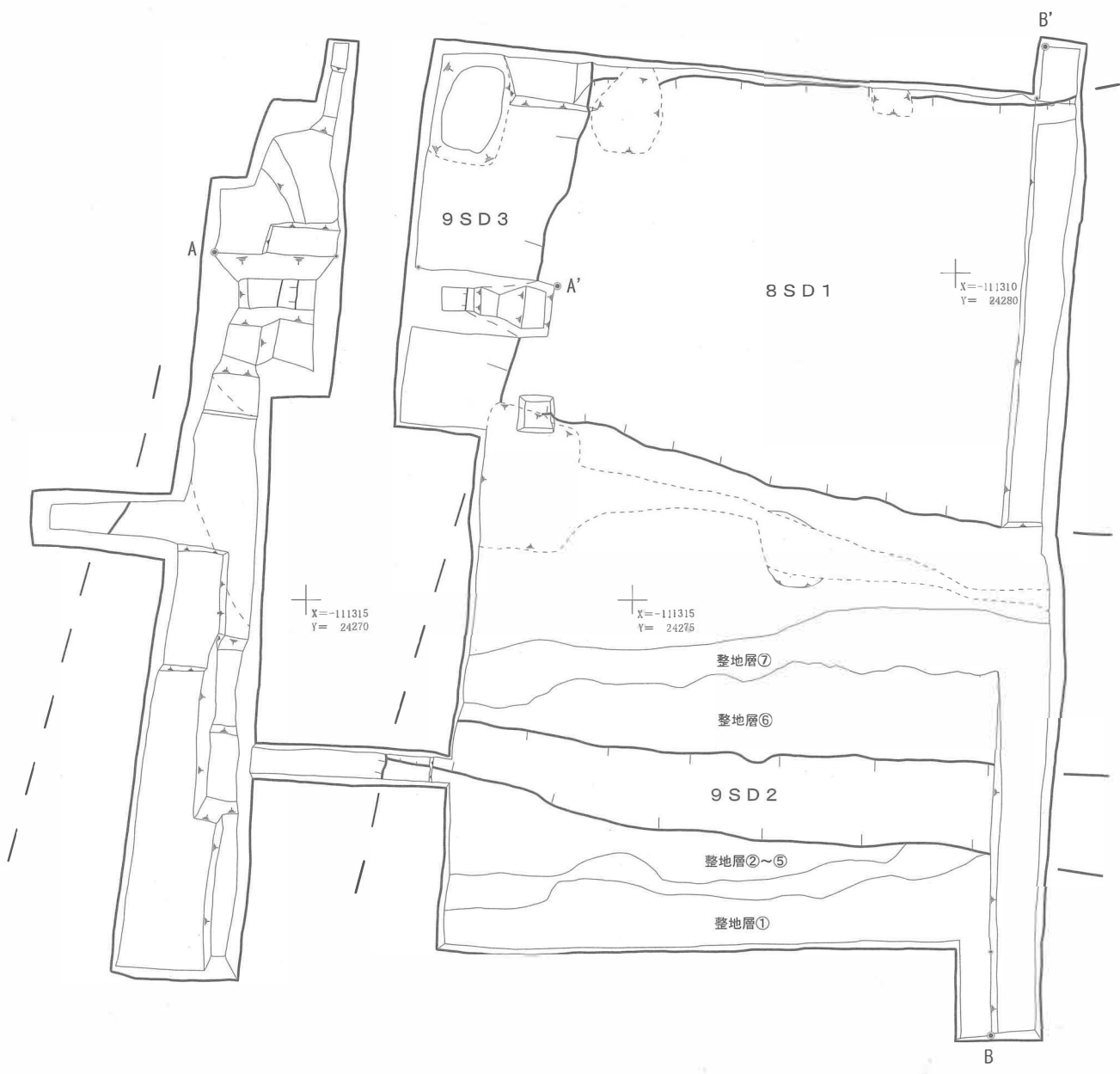


X=-111305
Y= 24270

X=-111310
Y= 24280

X=-111315
Y= 24270

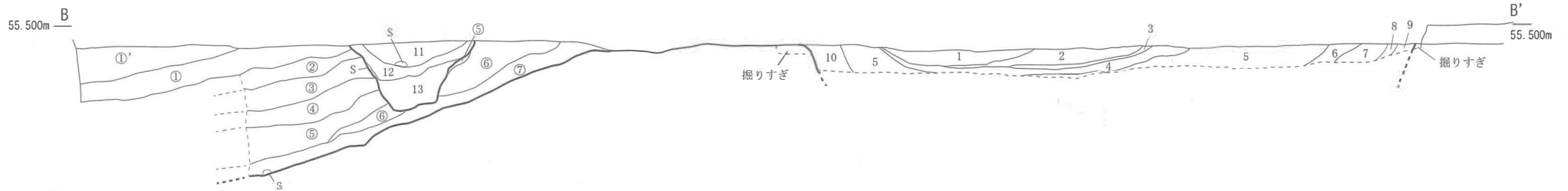
X=-111315
Y= 24275



0 (1:100) 4m

第28図 第9次調査1トレンチ 平面図

1トレンチ (B-B')

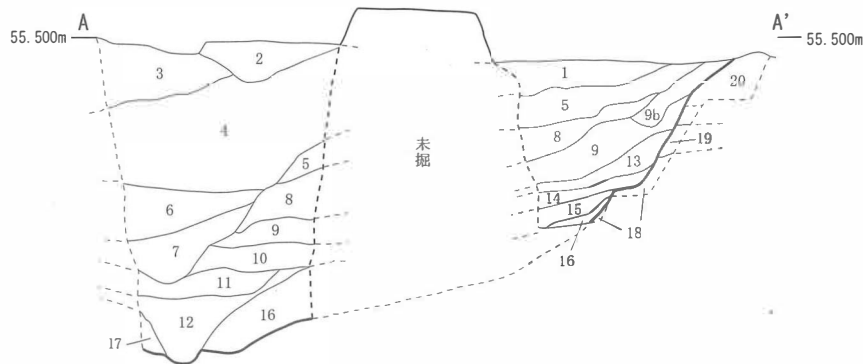


[1トレンチ 断面B-B']

- | | | | | | | |
|-----|--------------------|----------|-----------|------------------|--------|------------------------------|
| 1. | 近現代造成盛土 | 2.5Y8/6 | 黄色粘土 | しまりあり | 粘性あり | 円礫含む |
| 2. | " | 10YR6/3 | にぶい黄褐色粘質土 | 地山ブロック多く含む | 盛土 | 炭化物 円礫を多く含む |
| 3. | 盛土時の表土 | 10YR4/1 | 褐灰色土 | しまりややあり | 粘性なし | |
| 4. | 8SD1埋土 (盛土1.2前の盛土) | 2.5Y7/6 | 明黄褐色粘土 | しまりあり | 粘性あり | 最下部に旧表土とみられる黒色が一部あり |
| 5. | 8SD1埋土 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 炭化物を含む 径2~30cm程度の円礫を最上部山側に含む |
| 6. | 8SD1埋土 | 10YR5/2 | 灰黄褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 炭化物を比較的多く含む |
| 7. | 8SD1埋土 | 10YR8/4 | 浅黄褐色土 | 地山ブロックの崩壊で形成される層 | しまりあり | 粘性あり |
| 8. | 8SD1埋土 | 7.5YR5/1 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 炭化物を含む層 |
| 9. | 8SD1埋土 | 10YR5/1 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性強 | |
| 10. | 8SD1埋土 | 2.5Y8/3 | 淡黄色土 | 地山ブロックの崩壊で形成される | しまり強い | 一部に垂炭層の地山をブロックで含む |
| 11. | 9SD2埋土 | 10YR6/3 | にぶい黄褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 炭化物を少量含む 最下層付近がやや黒色化 土器出土 |
| 12. | 9SD2埋土 | 10YR7/4 | にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 地山ブロック土を多く含む |
| 13. | 9SD2埋土 | 2.5Y7/3 | 浅黄色土 | しまり弱 | 粘性ややあり | 地山ブロックを少量含む |

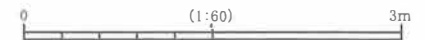
- ①* 整地層 ①~⑦と一連とみられるが後世の可能性もある 最上層
- ② 整地層 2.5Y8/6 黄色土 しまりあり 粘性ややあり 地山ブロックで形成される層
- ③ 整地層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 地山ブロックと黄褐色の土層で形成される
- ④ 整地層 2.5Y7/6 明黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 地山ブロックを主体に少量の黄褐色土を含む
- ⑤ 整地層 2.5Y7/4 浅黄色土 しまりややあり 粘性ややあり 地山ブロックを主体とする
- ⑥ 整地層 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性ややあり 黄褐色の土層を主体に地山ブロックを少量含む
- ⑦ 整地層 2.5Y8/4 浅黄色土 しまりややあり 粘性ややあり 地山ブロックを主体に黄褐色の土層をごくわずかに含む
- ⑧ 整地層 2.5Y7/4 浅黄色土 しまりややあり 粘性あり 最下部に円礫を少量含む 地山ブロックを主体に黄褐色の土層を少量含む

1トレンチ (A-A')



[1トレンチ 断面A-A']

- | | | | | | | | | |
|-----|--------|----------|----------|---------|-------|--------|--|--|
| 1. | 9SD3埋土 | 近現代盛土・造成 | 7.5YR5/2 | 灰褐色土 | しまりあり | 粘性弱い | 5~10cm程度の黄色地山ブロックを含む | 2層との切り合いはトレンチ内では不明だが近現代の盛土と見られる (平面のプランから) |
| 2. | 9SD3埋土 | | 10YR6/1 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性強い | 平面図への注記に暗褐色土とした土層 | 礫を含む 自然堆積層 |
| 3. | 9SD3埋土 | | 10YR8/4 | 淡黄褐色土 | しまりあり | 粘性弱い | 斜面方向からの崩落土層 | 礫を多く含む 上層に遺物がはりつのように確認でき、ある一階層の表土に近い |
| 4. | 9SD3埋土 | | 10YR3/3 | 暗褐色土 | しまりあり | 粘性弱い | 厚い自然堆積の土層でこの下層でのくぼみとして9SD3が残存した時期が長いとみられる | 遺物を含まない |
| 5. | 9SD3埋土 | | 10YR8/6 | 黄褐色砂質土 | しまりあり | 粘性なし | 10cm程度の礫、黄色、灰白色の粘土 (地山ブロックを含む) | |
| 6. | 9SD3埋土 | | 10YR5/1 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 礫を含む | 堆積方向は水平に近いが山方向からの崩落か |
| 7. | 9SD3埋土 | | 10YR7/3 | にぶい黄褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 黄色の地山ブロックを多く含む | 山方向からの崩落か |
| 8. | 9SD3埋土 | | 10YR7/6 | 明黄褐色砂質土 | しまりあり | 粘性なし | 5層と似るが礫を含まない | 9層との層界でさびが見られる |
| 9. | 9SD3埋土 | | 10YR7/1 | 灰白色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 黄色の地山ブロックを多く含む | |
| 10. | 9SD3埋土 | | 10YR5/1 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性強い | 水分を多く含む土層 | 9bとした部分はやや黄色みが強いが土質は類似する 漸移的な変化で同一の堆積か |
| 11. | 9SD3埋土 | | 2.5Y8/4 | 淡黄色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 地山ブロックの崩落土 | |
| 12. | 9SD3埋土 | | 2.5Y4/1 | 黄灰色粘質土 | しまりあり | 粘性あり | 水分を多く含む土層 | |
| 13. | 9SD3埋土 | | 10YR5/1 | 褐灰色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 地山ブロックを含む | 粘性が強くなり層界にあり水分の影響を受けた土層 この下層で一段階あり |
| 14. | 9SD3埋土 | | 2.5Y7/1 | 灰白色砂質土 | しまりあり | 粘性弱い | 砂質土で古い層の崩落か | |
| 15. | 9SD3埋土 | | 2.5Y8/3 | 淡黄色砂質土 | しまりあり | 粘性弱い | 14と同様の土層とみられる | |
| 16. | 9SD3埋土 | | 2.5Y4/1 | 黄灰色粘質土 | しまりあり | 粘性ややあり | 水分を含む土層 | |
| 17. | 9SD3埋土 | | 2.5Y3/1 | 黒褐色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 水分を多く含む | 下層に地山ブロック及び礫を含む |
| 18. | 8SD1埋土 | | 10YR8/2 | 灰白色砂質土 | しまりあり | 粘性あり | 自然堆積土 | |
| 19. | 8SD1埋土 | | 10YR7/3 | にぶい黄褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 10~20cmの礫を多く含む | |
| 20. | 8SD1埋土 | | 10YR6/6 | 明黄褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 8SD1の埋土としたが、9SD3の構築時の土層のかき上げの可能性もある。カクランか 8SD1の上層の近現代盛土のため不明 | |



の遺物もみられるものの、出土量は極めて少ない。また、下層についても遺物はきわめて少ない。そのため時期比定の根拠は少ないが、土質の状況からは近現代等の構築とみる根拠も得られていない。

〔9 整地層〕 8SD1 堀跡の南側では厚い整地土層が確認できる。整地層は土層の違いから7層に分けることができ、それぞれ地山起源の黄褐色土ブロック土を多く含むが、その包含の割合などが異なる。旧来の傾斜地を、8SD1 堀跡を掘削した際に起因する土層が掻き上げられ、斜面下方が整地されたものとみられる。現在の地形では整地土正面は平坦面を形成しているが、上部の削平の有無は判然とせず、これが整地時点での平坦な造成とみることができるかは確定できない。

第7次調査でも7SD1 堀跡の南側に掻き上げたとみられる整地層が確認できている。上面は平坦だったものの、後世の特に中世後期段階での改変の有無は不明である。造成は8SD1 堀跡の構築と同時期に行われたとみられる。現況では整地層面の上面では柱穴や地業等は確認できず、施設の有無は確定できない。この整地層上面で検出した遺構は、8SD1 堀跡の南側で平行して走る9SD2 溝跡のみである。

〔9SD2 溝跡〕 9SD2 溝跡は8SD1 堀跡と平行して走り、整地層上面から掘削されている。幅1.4m程、深さ0.8m程で確認し、断面は底面に平坦面をもち、逆台形状に立ち上がる。9 整地層及び9SD2 溝跡はいずれも、8SD1 堀跡と同様に9SD3 溝跡によって壊されている。

堆積土は3層に分けられ、最下層は地山ブロックを少量含む。12層は地山ブロックを多く含む。11層と12層の層界は薄い黒色土も観察でき、この位置での段階差の想定も可能である。遺物は少なく、11層からかわらけの小片が出土しているのみである。9SD2 溝跡は9 整地層上面から掘り込まれており、9 整地層の形成後に溝が構築されたことが分かる。8SD1 堀跡と平行して確認されることから、大きな時間差はなく、堀跡及び整地層と9SD2 溝跡が同時期に機能した可能性が想定できる。

〔遺構の変遷〕 調査区内での遺構の新旧は、遺構の重複関係から下記のように捉えられる。

8SD1 堀跡・9 整地層（横方向の堀）⇄（→）9SD2 溝跡（横方向の溝）→ 9SD3 溝跡（縦方向の大溝）
（櫻井）

○2 トレンチ・3 トレンチ（TD9-T2・3）（第30・31 図）

〔調査地点〕 X=-111,370・Y=24,365 付近に位置する。平成26・27年度の調査で調査区を設定した丘陵頂部の平坦面（TD7-T4・T5）（TD8-T1）の南側に設定した。

第7次調査では遺跡頂部の下の帯曲輪状の平坦面で、7SD1 堀跡を確認している。この調査区はその平坦面が延長して伸びるように、平坦な地形面が観察できる部分である。地形の連続性から、後述のTD9-T4・T5を設定した位置と合わせて、7SD1 堀跡が延長する可能性が高いと想定した。

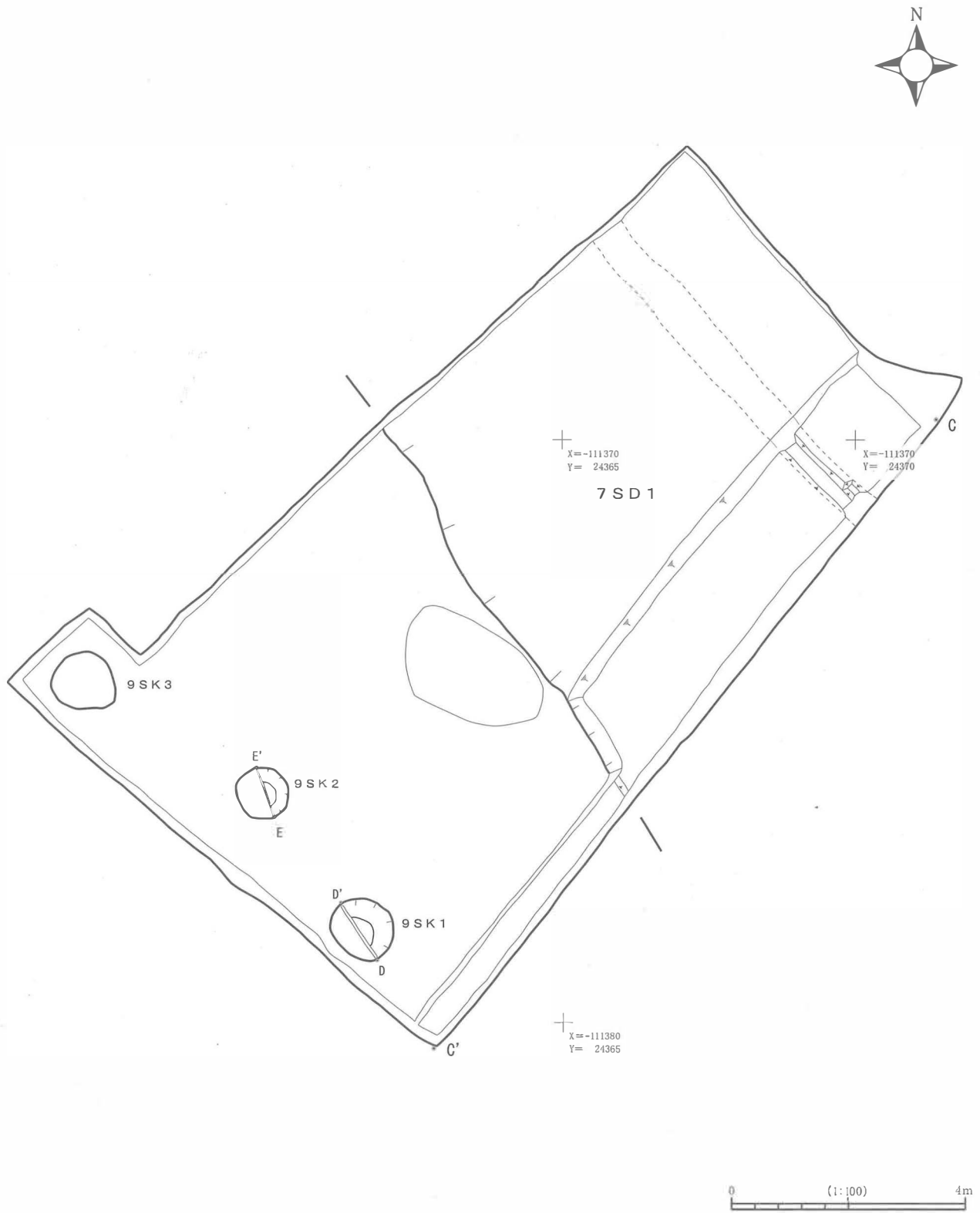
また、第8次調査及び第9次調査で8SD1 堀跡を確認した平坦面と類似した地形的特徴をもつ。そこで、ここまでの調査で確認している堀跡の延長や接続を把握することと平坦面における遺構の状況の確認を目的として調査区を設定した。

〔基本土層〕 黒色でしまりが弱い表土を除去した直下に、いわゆる地山層にあたる黄褐色粘土層を検出面と想定した。

〔調査方法〕 堀の走行位置を想定し、それと直交するように幅8m、長さ15mほどの調査区を設定した。一部で広げたため、2・3 トレンチと呼称しているが、一連の調査区である。

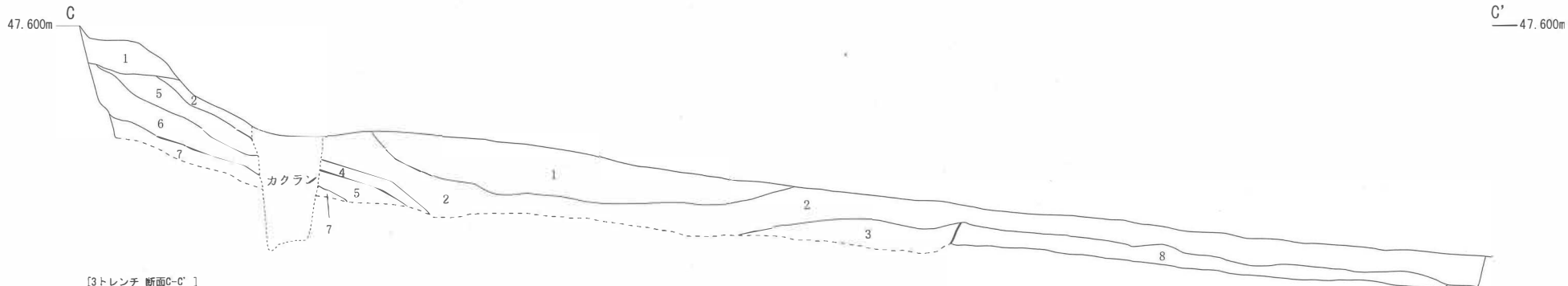
〔検出遺構〕 堀跡1条、土坑3基を確認した。後述のTD9-T4の成果と合わせ第7次調査で確認した7SD1 堀跡と一連の遺構の可能性が高いと捉えている。以下、第9次調査の2～5 トレンチで確認された横方向の堀跡について7SD1 の遺構名を付す。

〔7SD1 堀跡〕 7SD1 堀跡は等高線に沿って走る横方向の堀跡で、幅7mほどで確認している。精査は底



第30図 第9次調査2・3トレンチ 平面図

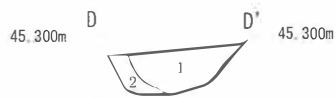
3トレンチ (C-C')



[3トレンチ 断面C-C']

- | | | | | | | |
|-----------------|---------------|---------|---------|--------|----------------------|----------------------------|
| 1. 7SD1より新しい堆積 | 7.5VR3/1 黒褐色土 | しまりなし | 粘性弱い | 表土 | かわらけ等を含む | 上部は斜面からの崩落土の為しまりが弱い |
| 2. 7SD1より新しい堆積 | 7.5VR4/1 褐灰色土 | しまりなし | 粘性弱い | 石 | かわらけを含む | |
| 3. 7SD1の埋土 | 10VR5/3 | にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性弱い | 炭化物、かわらけ片を少量含む | 堀の埋土だが上層のもの 斜面下部のせいか遺物も少ない |
| 4. 7SD1の埋土 | 7.5VR7/6 | 褐色土 | しまりややあり | 粘性強い | 上部からの崩落土 | 5cm弱の礫を多く含む |
| 5. 7SD1の埋土 | 7.5VR5/2 | 灰褐色土 | しまりややあり | 粘性弱い | 4層との上下関係はカクラン部分のため不明 | 6との類似から5、6が4の下層と見られるか |
| 6. 7SD1の埋土 | 7.5VR4/3 | 灰褐色土 | しまりややあり | 粘性強い | 礫、かわらけを少量含む | |
| 7. 7SD1の埋土 | 7.5VR7/6 | 褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 炭化物 | かわらけ片を含む |
| 8. 7SD1の外側の整地土か | 7.5VR6/4 | にぶい褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 地山ブロック含む | 遺物は含まない 整地土か |

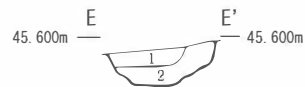
9SK1 (D-D')



[9SK1 断面D-D']

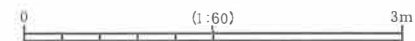
- | | | | |
|------------------|-------|------|--------------------------|
| 1. 10VR4/2 灰黄褐色土 | しまりなし | 粘性弱い | 旧表土 (地山ブロック 南北断面 8層) を含む |
| 2. 10VR4/2 灰黄褐色土 | しまりなし | 粘性弱い | 8層の地山ブロックが入らない |

9SK2 (E-E')



[9SK2 断面E-E']

- | | | | |
|------------------|-------|------|-------------------------|
| 1. 7.5VR4/1 褐灰色土 | しまりなし | 粘性弱い | 9SK1の1、2層と似るがやや明るみのある土質 |
| 2. 2.5V5/2 暗灰黄色土 | しまりなし | 粘性弱い | |



面まで行っておらず、深さ及び形状は不明である。

今回の調査区内では斜面上方の法肩は現況で確認した位置より上方に延びる様子が確認できる。他の調査位置での様相を勘案すると、斜面上方にあたる法肩は斜面の傾斜を活かして成形されているとみられる。本来の堀の上端は調査区よりさらに上方に位置するとみられる。なお、斜面下方は掘り込みをもつ。斜面下方の法肩の周辺の土層は地山ブロックを含む土層で形成されており、整地土を含む可能性はあるものの、他の地点で確認できるような厚い整地等は確認できていない。

確認された堆積土は上層の一部だが、自然堆積によるもので、斜面上方からの流入とみられる土器類を含む。土器類は12世紀代の資料を含むが、それより新しい時期の遺物を含むものではない。

7SD1堀跡は高館丘陵の頂部に平行し、北西から南東にN-45° -W程度で走る。これらから、横方向の堀跡が丘陵頂部の平坦面を囲み、現地形からは直下にあたる平坦面上に位置している可能性が高いことが確認できた。なお、平坦面は、当時の様相としては旧地形も傾斜が緩やかだった可能性があるが、堀の構築に伴う地形改変によって造成された地形面とみられる。

〈土坑 (9SK1・9SK2)〉 下方の平坦部で土坑を3基確認しているが(9SK1～3)、うち2基を精査した。遺物はかわらけの小片のみで、時期・性格は不明である。堆積土はいずれも自然堆積による。

(櫻井)

○4トレンチ・5トレンチ (TD9-T4・T5) (第32～35図)

〔調査地点〕 X=-111,380・Y=24,385付近に位置する。高館の頂部から南方に下る丘陵斜面の中位(標高46m付近)に立地する。現況は、TD8-T1を設定した丘陵上部平坦面の南縁斜面下に展開する帯状の平坦面～緩斜面となっており、これと直交して傾斜方向に走行する堅堀様の凹地が認められる地点である。

〔基本土層〕 観察される地山構成層は、下部が風化凝灰岩様の緻密な黄褐色粘土層、上部が褐色の砂層で、他地点に比して丘陵基盤のより下部が表れた状態となっている。全体的に削剝を経験している地点であり、原地形に伴って形成されたはずの古表土層はほとんど残存しないが、斜面下方では一部に暗褐色土層の堆積が観察される。なお、堅堀様凹地の西側が整った平坦面であるのに対し、東側は緩斜面となっている。後述するが、堀の掘削土等により斜面下方側に形成された人為盛土層が、東側では後世の地滑りにより一部崩壊しているものと推測される。

〔調査方法〕 当地点では山側の斜面裾に沿って東西方向に走行する堀跡の存在が想定されていたことから、これを捕捉するため横断方向のトレンチを2本設定した(断面A1-A4・断面B1-B3)。また、堅堀様凹地の内容確認と、これと重複しているとみられる上記堀跡との関係を把握するため、当該凹地の西半の一部を精査し、併せて両者の連続断面を観察した(断面C1-C2・断面D1-D2)。

〔検出遺構〕 堀跡2条(横堀跡1・堅堀跡1)、土坑2基、性格不明遺構1箇所を検出した。

〈7SD1古期堀跡(横堀)〉 他地点でも確認されている、丘陵頂部を取り囲む堀跡に連続するものとみられる。当地点においては等高線に沿って概ね東西方向に走行する。上記凹地の東側に設定したトレンチ(断面A1-A4)では、両岸の壁面上部を確認した。壁上端間は10.5m前後を測る。一方、凹地西側では斜面上方側の壁面上部を検出したが(断面B1-B3:11層下面)、下方側は確認できなかった。当堀跡の上部を厚く覆う人為層(同9層)の上面において、より新期の遺構(後掲)が検出されたことから、以下の掘削を行わなかったためである。断面A1-A2・同B1-B3のトレンチでは堆積土の下部が未精査であり、底面までの深度及び断面形状等の詳細については不明となっている。

埋土は斜面上方側から断続的に供給された地山起源の砂質土を主体としている。中位にかかわらけ細片と炭化物をやや多く含む暗色層を挟み、その下位では自然流入層と壁崩落層が互層を成す様子が観

察された。一方、暗色層の上位は上述の人為層に覆われている。埋没途上にあった本堀跡内の凹部を埋め均すように充填された地山ブロック層である。なお、断面 A3-A4 では、斜面下方側の岸から供給された地山ブロック層も確認された（同 8・9 層）。本来の地山構成層の堆積レベルよりもさらに高位から流入したものであり、斜面下方側の岸の外側に地山土主体の人為層が存在したことを示唆している。同断面 6 層下面が下位の地山土層を削り取り、調査区のさらに下方へと流出した状況が観察されることから、周辺の現況地形も考慮すれば、後世、地滑りによる崩壊が生じたものと推測される。

当地点における精査所見のみから帰属時期を特定することは困難だが、他地点の成果と層序の整合性を勘案すれば、12 世紀代に構築されたものである蓋然性は高いと考えられる。当地点において最も古い段階に位置づけられる遺構である。

〈9SD4 新期堀跡（竪堀）〉 現況では、傾斜に沿って概ね南北方向に走行する溝状の凹地として認識される。TD8-T1 が位置する平場の南東縁及び南西縁はそれぞれ切岸状の急斜面となっており、凹地は両者の斜面裾が交わり屈曲する付近を北端とし、前掲古期堀跡と直交してそのまま斜面下方（南方）へと延びている。精査では凹地の西半の一部にトレンチを設定し、この部分の埋土を完掘して西側の壁面及び底面の一部を検出した。上端幅 7.0 m ほどの概ね逆台形の断面形をもつと推測されるが、精査範囲が狭小であり全体形状及び堆積状況の詳細は不明のままとなっている。図示した断面 C1-C2 は横断面の西半部、同 D1-D2 は縦断面の一部である。横断面には本堀跡が古期堀跡の埋土を切る状況が観察できる。また現況にも認められる両岸沿いの高まりが、地山土ブロック主体の人為盛土によるものであることを確認した（断面 C1-C2：8・9 層）。この盛土層はさらに西側の下方へと落ち込むように延び、古期堀跡の上部を埋める整地土層に連続している。このことから、両岸に伴う土塁状の高まりは、古期堀跡の上部が未だ埋まりきらない段階に、これを埋め均す平坦面造成と併せて構築されたものと理解される。同様に本堀跡の掘削排土もまた造成盛土の一部に用いられたと考えられることから、本堀跡の構築時期にも同段階が想定される。本堀跡内部の堆積状況は、底面から順次自然堆積によって埋没した様相を示している。注目されるのは、底面直上を覆う暗褐色土層（断面 C1-C2：4 層＝同 D1-D2：4 層）から、多量の炉壁片・鞆羽口片・炭化物が出土している点である。羽口・炉壁の大振りな形態は「製鉄炉」のそれを想起させるが、鉄滓や木炭片等の集中箇所は確認されなかった。堀跡西壁の最下部には、垂直で短い立ち上がり直線的に延び、その直下の底面には小溝・小穴様の凹部が断続的に観察されている（断面 C1-C2：5 層）。堀跡内部が何らかの施設として利用された痕跡である可能性を指摘しておきたい。

〈土坑・性格不明遺構〉 先述の通り、新期堀跡の西側は、古期堀跡の上位が人為盛土で覆われた平坦面となっている。断面 B1-B3 のトレンチでは、この平坦面上に構築されたとみられる遺構を検出した。確認範囲が幅の狭いトレンチ内に限定されており、いずれも全体形状は不明となっている。

2 基の土坑（9SK4、9SK5）はトレンチの底面に表れた人為盛土層の上面で近接して検出された。いずれも内部の精査は行わず面的な確認に止めている。埋土は地山土ブロックを多く含む暗褐色土で、検出面となる周囲の人為盛土層に比してやや暗く、白色・淡黄色等の粘土ブロックの混入が目立つ。土坑の周囲は竪穴建物跡の床面に類似した硬化が認められ、同面には炭化物の散布も観察された。トレンチ西壁に重複する 1 基では、プラン中央から壁上端に接する範囲に焼粘土塊の集中が見られ、その下面に現地性焼土の生成箇所が確認されている（断面 B1-B3：5 層）。

またこれらとは別に同トレンチの南端部では、竪穴状の掘り込みをもつ性格不明遺構（9SX1）が検出されている。等高線と平行方向に直線的に延びる直立した壁面と、平坦に整い硬化した床面をもつもので、壁直下には壁溝状の浅い小溝が観察された。また壁面に近接したところから、炉壁状の焼粘

土小片の集中箇所が検出されている。

〔土層の対応関係と変遷過程〕

下表は、各断面に観察される堆積層の対応関係を検討・整理したものである。4つの層群に大別され、当地点における土地利用の変遷に対応する各段階を示していると考えられる。

最も古い段階は古期堀跡（横堀）埋土の層群で、自然流入土及び崩落土により漸次埋積が進んだ状況を示している。最上部のかわらけ片や炭化物を包含する自然堆積層は、堀内部の堆積が相当程度進んだ段階に、上位平坦面（TD8-T1付近）から流入したものと解される。他地点の成果も踏まえれば当該堀跡の構築年代は12世紀代と推定される。

次段階には、古期堀跡の上部に残った凹部を埋め均して平坦面を造り出す、大規模な改変が行われている。この平坦面上に設けられた土坑・性格不明遺構や、新时期堀跡（縦堀）とこれに伴う土層の高まりの構築もまた、本段階に位置づけられよう。新时期堀跡及び造成面上の各遺構は、炉壁片・鞆羽口片等、製鉄あるいは鍛冶の操業に関連する遺物を伴っており、この段階における当地点の利用状況の一端を示唆するが、調査範囲は極めて限定的であり、全体像・細部ともに現時点では不明と言わざるを得ない。本遺跡の立地する丘陵には中世後期の城館として利用された痕跡が広く認められることから、本段階の帰属年代としては中世後期を想定しておきたい。


上記の遺構群の廃絶後に位置づけられるのが次段階の堆積層で、再び自然堆積による埋没が進んだ状況が観察される。その過程で、先述の通り新时期堀跡の東側では地滑りによる土砂の流出が生じており、斜面下方の現況地形にもその痕跡が看取される。右表ではこの地滑りの前後で層群を区分した。地滑り以降は締まりを欠いた土層が現表土に連続して堆積しており、新时期堀跡の西側では平坦面を山側に若干拡張する新しい再整地（耕作等に伴うか）の痕跡も観察されている（断面B1-B2：1a～2b層下面）。

〔放射性炭素年代測定〕

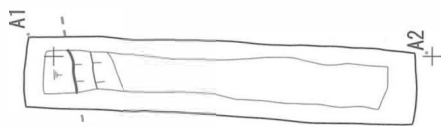
新时期堀跡の底面直上（断面D1-D2：4層最下部／試料NO.1）、焼粘土塊集中と現地性焼土を伴う土坑の焼土層直上面（断面B1-B3：5層直上／試料NO.2）、竪穴状性格不明遺構の底面直上（断面B1-B3：6層下面／試料NO.3）、以上3点の炭化物を採取し年代測定を実施した。いずれも古期堀跡を覆う整地造成面段階に位置づけられる遺構に伴う試料である。測定による14C年代（δ 13C補正あり）は、NO.1が360 ± 20yrBP、NO.2が20 ± 20yrBP、NO.3が310 ± 20との結果を得ている。上に想定した当地点の変遷過程に調和する結果と評価できる。年代測定の詳細は第IV章を参照されたい。

表6 TD9-T4・T5区 土層対応表

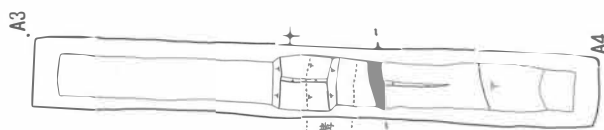
断面	A1-A2	A3-A4	B1-B3	C1-C2	D1-D2	層群の性格・所見等
層名	1	1	1a ⇔ 1	⇔ 1	⇔ 1	現表土～地滑り面
		2	1b			
		3	2a ⇔ 6			
		4	2b			
		5				
		6				
		2	7	3	2 ⇔ 2	地滑り以前の自然堆積層 ～新时期堀跡・不明遺構埋土
		3		4	3 ⇔ 3	
			(5)	4 ⇔ 4		
			6	(5)	(5)	
			7			古期堀埋戻し人為層 (平場造成か)
			8 ⇔ 7			
		8	9 ⇔ 8			
		9		9		古期堀跡埋土
	4	10	10	11		
5	11	11	12			
6	12		13			
	13		14			
	14		(15)			
	15					

※ ⇔ 連続する同一の層
 かわらけ片・炭化物が比較的集中する層

(村上)



X = -111375
Y = 24390



X = -111390
Y = 24390



堀跡 (古期)

水道管理設備

C2

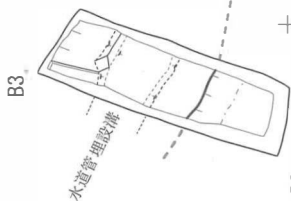
+

+

+

+

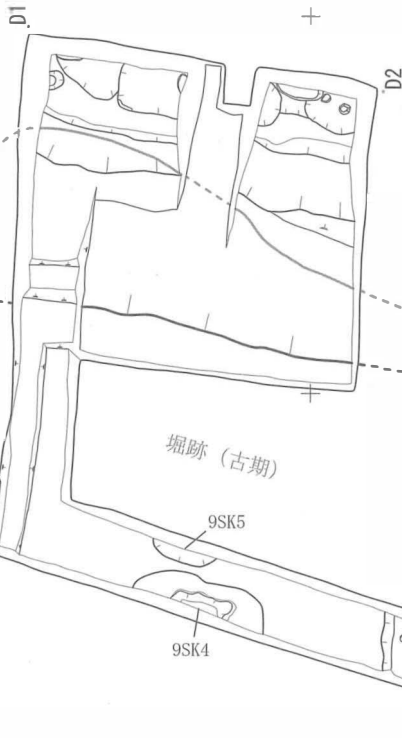
X = -111375
Y = 24380



水道管理設備

X = -111380
Y = 24375

C1



堀跡 (新期)

堀跡 (古期)

9SK5

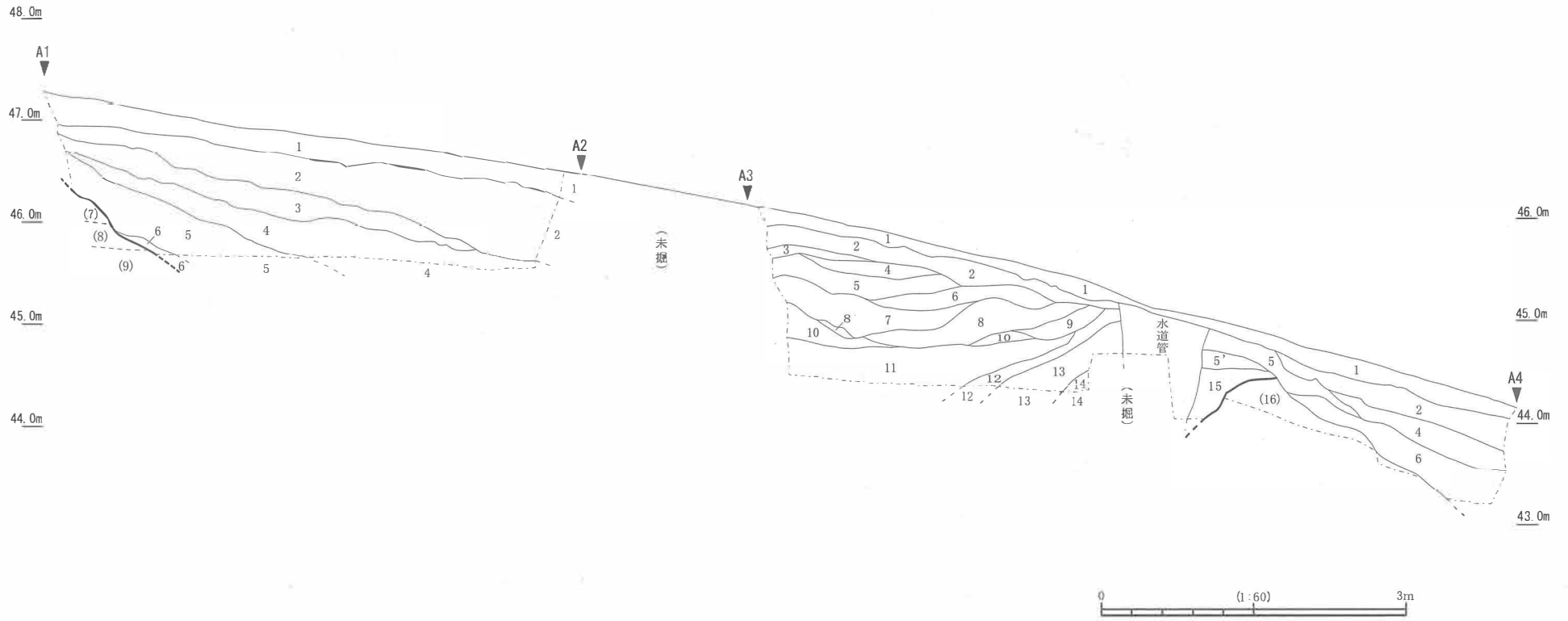
9SK4

9SX1

X = -111390
Y = 24375

第32図 第9次調査4・5トレンチ 平面図

第33図 第9次調査4・5トレンチ 断面図 (1)



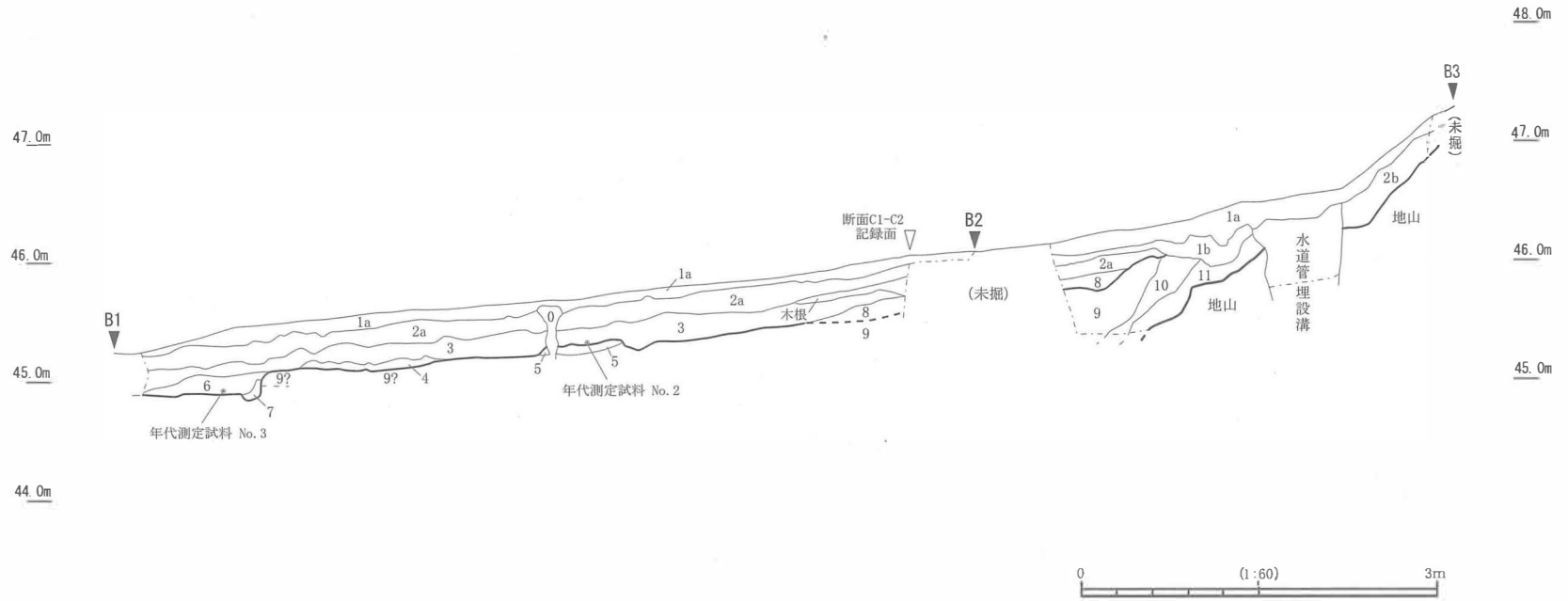
〔断面 A1-A2〕

1. 断面 A3-A4 の 1 層に同じ。
2. 10YR5/4-4/6 にぶい黄褐色 - 褐色 砂質シルト。粘性やや弱。締まり中。
3. 10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック (地山砂層由来) 微。礫 (径 5-30 mm) 少。粗砂・細砂全体を含む。
4. 10YR4/3-4/4 にぶい黄褐色 - 褐色 シルト。粘性中。締まり中。礫 (径 5-20 mm) 微。粗 - 細砂全体に微量含みや砂質帯びる。
5. 10YR4/3-3/3 にぶい黄褐色 - 暗褐色 シルト。粘性やや強。締まり中。礫 (径 5-15 mm) 極微。木炭細片 (径 5-10 mm) 極微 (上下位層に比して木炭混入目立つ)。
6. 10YR4/4 褐色 シルト。粘性やや強。締まり中。
7. 10YR4/4-4/6 褐色 砂質シルト。粘性中。締まり中。地山 7・8 層由来の砂やや多。
8. 7.5YR5/8 明褐色 砂。粘性弱。締まりやや密。礫 (径 2-5 mm) 多。酸化により全体に赤味帯びる。
9. 10YR7/3-7/4 にぶい黄褐色 粘土。粘性やや強。締まり密。凝灰岩の風化層か。

〔断面 A3-A4〕

1. 10YR3/2-3/3 黒褐色 - 暗褐色 シルト。粘性中。締まり弱。腐植多。森林腐植土層。下部はやや明るく 10YR4/3-4/4 にぶい黄褐色 - 褐色。
2. 10YR4/4 褐色 砂質シルト。粘性やや弱。締まり中。礫 (径 5-10 mm) 極微。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト。粘性やや弱。締まりやや疎。礫 (径 5-10 mm) 極微。2 に似るがやや暗い。
4. 10YR4/3-4/4 にぶい黄褐色 - 褐色 砂質シルト。粘性やや弱。締まり中。10YR7/4-6/6 にぶい黄褐色 - 明黄褐色粘土ブロック (径 5-10 mm) 極微。礫 (径 5-20 mm) 微。
5. 10YR4/4-4/6 褐色 砂質シルト。粘性中。締まり中。10YR7/4-6/6 にぶい黄褐色 - 明黄褐色粘土 (径 5-10 mm) 極微。礫 (径 5-20 mm) 微。炭粒 (径 5-10 mm) 極微。7 に似るがやや多く暗い。
6. 5 層に似るがやや黄味帯びる。6 層にも似る。
7. 10YR4/6 褐色 砂。粘性やや弱。締まり中。
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト・10YR7/4 にぶい黄褐色粘土・10YR5/6 黄褐色粘土の混ブロック層。各ブロック径 10-30 mm。粘性やや強。締まり密。
9. 8 によく似るが、10YR4/3 にぶい黄褐色シルトの比が高くやや暗い。
10. 10YR4/2-4/3 灰黄褐色 - にぶい黄褐色 粘土質シルト。粘性やや強。締まりやや密。炭粒 (径 5-10 mm) 微 (目立つ)。かわらけ細片がやや多い層。
11. 10YR5/6 黄褐色 砂。粘性弱。締まりやや密。礫 (径 5-50 mm) 少。かわらけ片極微量含む。
12. 10YR1/3-3/3 にぶい黄褐色 - 暗褐色 粘土質シルト。粘性やや強。締まりやや密。黄褐色粘土ブロック少。上下位層に比して黒味強い。
13. 10YR4/3-3/3 にぶい黄褐色 - 暗褐色 粘土質シルト。粘性やや強。締まり密。黄褐色粘土ブロック (径 20-30 mm) やや多。上下位層に比して黒味強い。
14. 10YR4/4-4/6 褐色 砂質シルト。粘性やや弱。締まり密。礫 (径 5 mm) 少。
15. 10YR5/6-4/6 黄褐色 - 褐色 シルト。粘性中。締まりやや密。10YR4/4 褐色シルトブロック極微。
16. 7.5YR4/1-3/4 褐 - 暗褐色 シルト。粘性中。締まりやや密。窪地前の旧表土か。全体に黄味帯びる。地山相当。

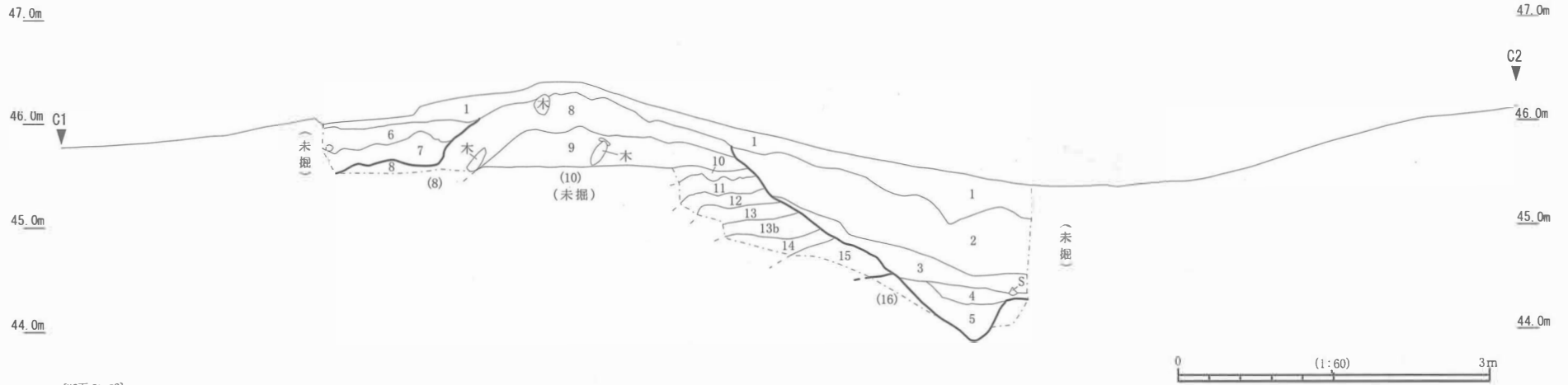
第34図 第9次調査4・5トレンチ 断面図(2)



[断面 B1-B2-B3]

- 1a. 断面 C1-C2 の 1 層に同じ。
- 1b. 10YR4/3-4/4 にぶい黄褐色 - 褐色 シルト。粘性中。締まりやや硬。現表土層下部。
- 2a. 断面 C1-C2 の 6 層に同じ (同 2 層に類似)。
- 2b. 10YR6/6 明黄褐色 シルト。粘性やや強。締まりやや硬。地山土再堆積 (崩落) 層。
3. 10YR4/3-3/4 にぶい黄褐色 - 暗褐色 シルト。粘性中。締まり中。全体に地山砂含み砂質帯びる。鉄滓 (?)・炉壁状の粘土塊多く出土。
4. 10YR4/3-3/4 にぶい黄褐色 - 暗褐色 シルト。粘性やや強。締まり中。地山淡黄色粘土ブロックやや多。
5. 5YR4/4-3/6 にぶい赤褐色 - 暗赤褐色 粘土質シルト (焼土)。粘性やや強。締まり密。上面酸化顕著。赤変深度 8 cm 前後。鍛冶炉か。
6. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト・10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR4/6 褐色砂の混土層。粘性中。締まり中。焼土ブロック・板状焼粘土片多く含む。人為層。
7. 10YR4/3-3/4 にぶい黄褐色 - 暗褐色 シルト。粘性中。締まり中。
8. 断面 C1-C2 の 7 層に同じ。
9. 断面 C1-C2 の 8 層に同じ。人為層。
10. 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト。粘性中。締まり中。小礫 (径 5-10 mm) 極微。かわらけ小片含む。
11. 10YR5/4-4/4 にぶい黄褐色 - 褐色 砂質シルト。粘性中。締まり中。地山砂多く含む。

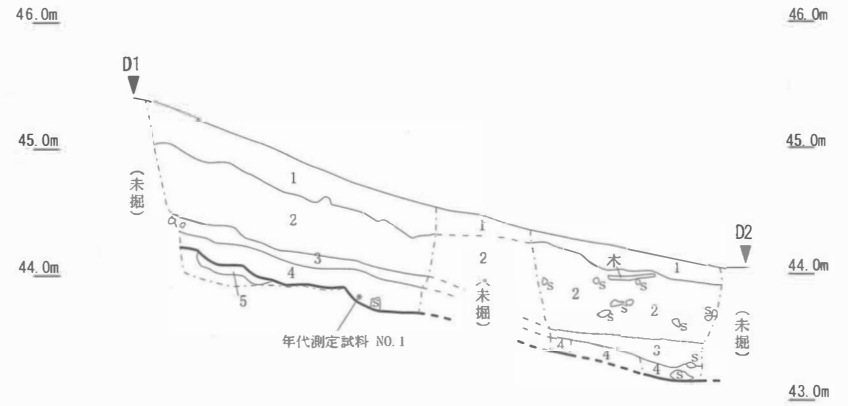
第35図 第9次調査4・5トレンチ 断面図 (3)



〔断面 C1-C2〕

1. 10YR3/2-3/3 黒褐-暗褐色 シルト。粘性やや強。締まりやや疎。上半部に黄褐色粘土が被覆する部分見られる。現表土層。
2. 10YR4/3-4/4 にぶい黄褐-褐色 砂質シルト。粘性中。締まり中。小礫(径5-10mm) 微。
3. 10YR5/3-4/3 にぶい黄褐 砂質シルト。粘性中。締まり中。小礫(径5-10mm) 極微。2層によく似るがやや暗い(12・13層の再堆積土を含むため)。
4. 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト。粘性やや弱。締まり中。礫(径5-20mm) 少。全体に砂多く含む。酸化集積部みられる。断面 D1-D2 で炉跡(?)の直上を覆う土層。鉄滓・炉壁状粘土塊を多量に含む。
5. 10YR5/2-4/3 灰黄褐-にぶい黄褐色 砂質シルト。粘性中。締まり中。地山砂含み砂質強い。酸化斑目立つものの青味がある(グライ化?)。
6. 10YR4/3-4/4 にぶい黄褐-褐色 シルト。粘性中。締まり中。本草根やや多。2層に似る。
7. 10YR5/3-5/4 にぶい黄褐色 シルト。粘性中。締まりやや密。8層の崩落土含む。
8. 10YR5/6-5/8 黄褐色 シルト。粘性中。締まりやや密。10YR8/4 浅黄褐色凝灰礫(径10-30mm) 多量に含む。壱壱細削土を盛り上げたものか。
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト。粘性中。締まり密。地山砂礫・粘土塊を全体に含む混合土層。壱壱細削土を盛り上げたものか。
10. 10YR5/4-5/6 にぶい黄褐-黄褐色 粘土ブロック層。粘性やや強。締まりやや密。
11. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト。粘性中。締まりやや密。礫(径5-10mm) 極微。
12. 10YR3/1 暗褐色 粘土質シルト。粘性やや強。締まりやや密。礫(径5-10mm) 極微。11層より黒味強い。
13. 11層に同じ。
- 13b. 12層に同じ。
14. 10YR4/6 褐色 砂質シルト。粘性中。締まり中。全体に地山砂多く含む。
- (15). 10YR5/6 黄褐色 砂。粘性弱。締まり中。
- (16). 10YR5/4 にぶい黄褐色 粗砂。粘性弱。締まり密。風化花崗岩屑か。

※ 2-5: 壱壱埋土。8-9: 土壘状盛り土。10-14 (15?): 12世紀? 壱埋土。



〔断面 D1-D2〕

1. 断面 C1-C2 の 1 層に同じ。
2. 断面 C1-C2 の 2 層に同じ。
3. 断面 C1-C2 の 3 層に同じ。
4. 断面 C1-C2 の 4 層に同じ。
5. 7. 5G13/1 暗緑灰色 還元? 硬化部。粘性無。ガッチリと硬化。

(2) 出土遺物

○第9次調査出土遺物の概要(第36図)

第9次調査ではかわらけ 5,860.9 g、国産陶器類 885.5 g が出土している。各調査区ごとの出土量は下表のとおりである。

各調査区からは12世紀代のかわらけ等が少量出土している。TD8-T2に隣接した、丘陵の中央からより西側にあたる位置に設定したTD9-T1では12世紀代の遺物の出土が少ない。一方でこれまでの調査でも遺物の出土量の多い丘陵東側に設定したTD9-T2・T3及びTD9-T4・T5からはかわらけ類を中心に一定量の出土が確認できる。これらの多くは調査区より上部からの流入に伴うと判断でき、これまでの調査と同様に丘陵東側からの出土が多い傾向が、第9次調査区での遺物の様相からも補強できる。

なお、図化していない資料中でも、12世紀代以前の11世紀代などの古代の土器と判断できる明確な特徴を持つ資料は確認できなかった。また、国産陶器類も一定量出土している。上層や表土には近世の陶器などが含まれるが、中世後期と判断できる資料は含まれていない。TD9-T2・T3の表土などからは羽口とみられる破片や鉄滓なども少量ながら出土している。また、TD9-T4・T5からは羽口や鉄滓が一定量出土している。

表7 第9次調査出土遺物

	かわらけ (g)	国産陶器類 (g)	輸入陶磁器類 (g)	その他
T 1	466.8	131.8	—	石等
T 2・T 3	3,202.6	620.9	—	羽口・壁土等
T 4・T 5	2,191.5	132.8	—	羽口・壁土等
合計	5,860.9	885.5	—	

○1トレンチ (TD9-T1) 出土遺物

国産陶器類4点を図示している(126～129)。常滑産及び渥美産の甕類の体部片である。小片のため、器形の復元はできない。

このほか、図示できていないが、ロクロ及び手づくねのかわらけが出土しているもののいずれも細片で、出土量は極めて少ない。

○2・3トレンチ (TD9-T2・T3) 出土遺物

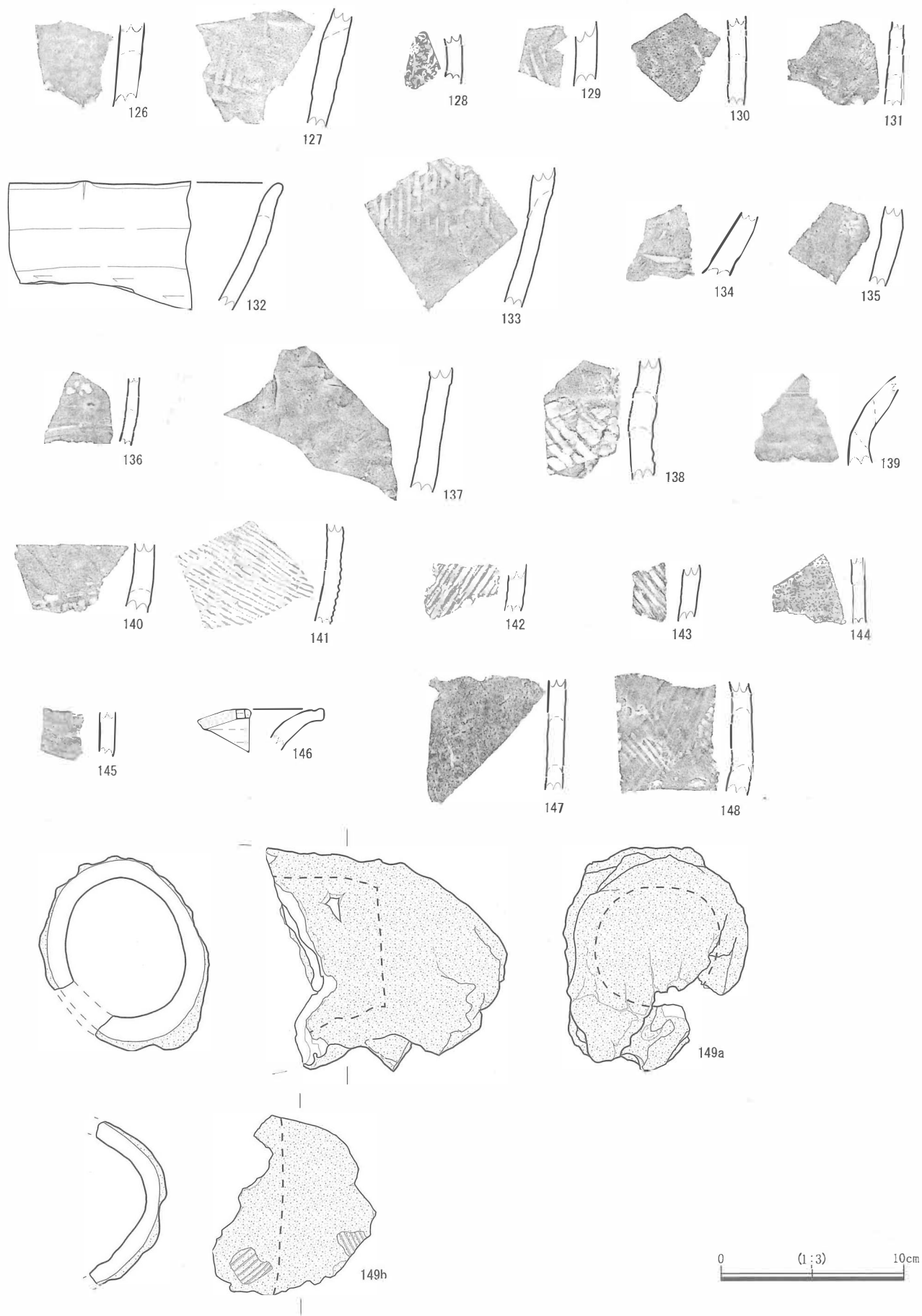
国産陶器類16点を図示している(130～145)。いずれも表土等からの出土である。このうち、143は7SD1堀跡の検出面から出土している。須恵器系陶器で甕類の体部片である。また、145は7SD1堀跡の埋土上層からの出土である。水沼産の可能性もあるが産地は不明で、甕類の体部片である。

このほか、図示できていないがロクロ及び手づくねのかわらけ片が出土している。いずれも小片のため図示できていないが、破片数としては比較的まとまった出土量がある。

○4・5トレンチ (TD9-T4・T5)

遺構外出土遺物

国産陶器類3点(146～148)のほか、羽口1点を図示している。国産陶器類は常滑産の甕類及び渥美産の甕類である。149は底面付近から出土した羽口である。径が12cmほどの大型の形状で、周



第 36 図 第 9 次調査出土土器類実測図 (1)

囲に鉄滓が附着している。

このほか、図示できていないがロクロ及び手づくねのかわらけ片が出土している。いずれも小片のため図示できていないが、破片数としては比較的まとまった出土量がある。

(櫻井)



第37図 調査区位置図(3)

第5節 第10次調査の遺構と遺物

(1) 各トレンチの調査成果

○1トレンチ (TD10-T1) (図37～40)

〔調査地点〕 $X=-111,385 \cdot Y=29,470$ 付近に位置する。高館の頂部から南方に下る丘陵斜面の中位(標高38～41m付近)に立地し、東側は北上川の侵食による急崖に接する。斜面下方で柳之御所遺跡堀外部地区に隣接する地点である。調査範囲の北西端部が昭和40年代の造成による小規模な平坦面に掛かるほかは、全体にやや急な斜面地となっている。なお今次調査区は平成5年に平泉町教育委員会が実施した高館跡第3次調査地点(2トレンチ・3トレンチ)に一部重複している。

〔基本土層〕 地山は黄褐色粘土層とその上位の凝灰礫を含む砂質土層によって構成される。後者の一部は古い崖錐性堆積層とみられる。これらを被覆する暗褐色土層が古表土で、遺構埋土の主体土となる。この上位は現表土で、一部に後世の崩落層及び客土層を挟む。

〔調査方法〕 まず、傾斜方向に対して平行・直交するT字状のトレンチを設定し、当該地点における層序の把握と遺構の平面検出を行った。その後、必要に応じて部分拡張及びサブトレンチの追加を行い、全体の平面図作成と要所の断面記録(A1-A2・B1-B2-B3・C1-C2・D1-D2)を行った。なお、検出した遺構はその保全を優先し、内部の掘削は最小限に止めた。このため個々の詳細や相互の先後関係等については未確認となった部分も少なくない。

〔検出遺構〕 検出遺構は、溝跡1条、平場遺構(竪穴建物跡か)複数、焼土土坑4基、土坑2基、小ピット9個である。

〈YG24SD4 溝跡〉 高館跡第3次調査において当地点への延長が確認されていたYG24SD4である。概ね斜面方向に沿って南北方向に走行する、長さ14.5mの帯状範囲として検出した。当区中央を縦断し、両端はいずれも区外に延伸する。確認面における最大幅は300cm、北端部の残存深度は190cmである。断面形は幅狭の底面と急斜度の壁面からなるV字状を呈し、白色の凝灰粒を含む自然堆積の褐色土によって埋没している(断面D1-D2:3～5層)。重複関係及び埋土の様相から、後掲のいずれの遺構よりも新しいと判断される。平泉町教委の報文においても本溝跡が柳之御所遺跡堀外部地区の区画溝のうち最も新段階に位置づけられており、今次調査で確認した他の12世紀遺構との相対的な先後関係を調和するが、本溝跡が構築・機能した実年代についてはなお検討の余地を残している。

〈10SX1 平場遺構〉 斜面上方を切り崩して構築された平坦面である。同一標高上に展開する、長さ14.5m・幅4.0mほどの帯状範囲として検出し、サブトレンチによる部分精査を行った。

調査区西端の断面A1-A2では、竪穴建物跡の床面に類似する底面(新旧2面)と、斜面上方側で立ち上がる壁面を確認した。壁面から25～30cmほど内側には、壁に平行する小溝(壁溝)を伴う。

新期床面は全体に硬化が顕著で、部分的に地山粘土(11層土)による貼床が施されている。木炭小片を多量に含む暗褐色土層(5層)がこれを被覆し、完形かわらけを含む出土遺物は本層に集中する。同面の遺物分布は、当初斜面下方側(南側)に連続した広がりを持つように思われたが、斜面下方側の遺物分布面は上方側に比してわずかに低く、遺物の取上げ後さらに下位からより古期の床面と濃密な遺物分布面が検出されたことから、新旧が重複していることが判明した。

古期床面は、斜面上方側では地山白色粘土層(11層)、斜面下方側では8層土面を削り出して構築されている。同面の出土遺物は陶器の大形破片を主体とし、かわらけ主体の新期床面とは様相を異に

する。なお、古期床面は斜面上方側（新期床面下位）にさらに延伸するとみられるが、新期床面と後掲の焼土遺構を温存するため、追跡は行わなかった。

調査区中央付近の断面 B2-B3 においても、同様の床面と壁面が確認された。斜面上方は地山土層（15 層）の削り出し、下方は 12 層上面に 15 層由来の白色粘土を部分的に貼って床面が構築されている。この貼床状白色粘土の広がりには、一部溝状に落ち込む箇所が認められた。壁溝と直交方向に延び、白色粘土の薄層が上から沈み込んだ状況が観察されることから、倒壊時の柱材（壁材）または床面上の根太など、内部の構築材に関する痕跡の可能性が考えられる。また、この下位からはより古期の床面（12 層下面）が検出され、断面 A1-A2 と同様、新旧重複した状態であることが確認された。古期床面を覆う 12 層からは略完形のかわらけ等が出土している。

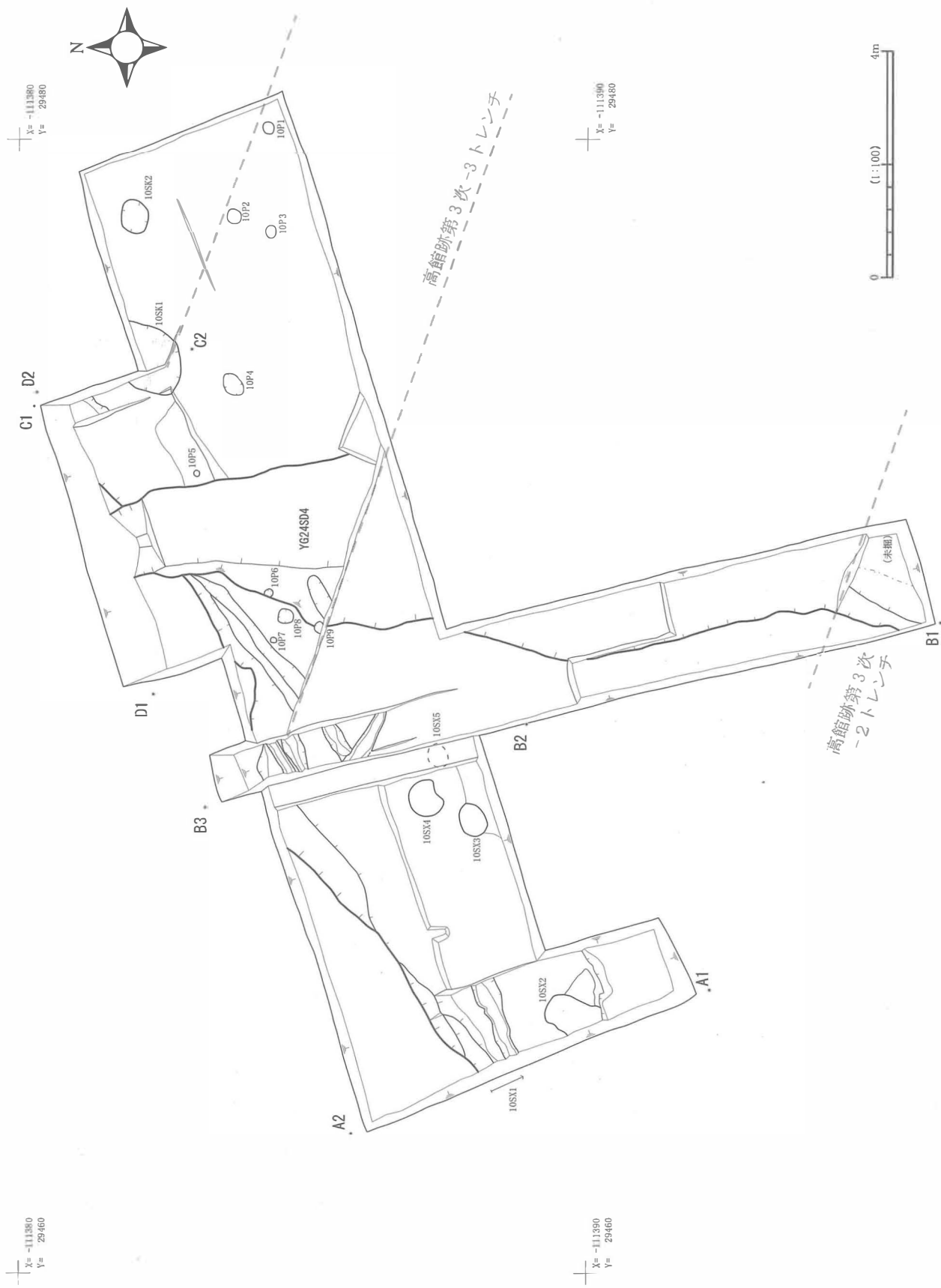
断面 C1-C2 でも同様の壁面・床面が観察される。床面は斜面上方側で地山粘土層（10 層）、下方側で地山砂礫層（9 層）を水平に削り出したもので、部分的に 10 層土ブロックによる貼床土（6 層）が観察される。この地点では床面の重複はみられないが、4 層が壁際で先行埋土（5 層）を深く切っており、4 層下面段階に堆積過程の断絶が想定できる。ただし 4 層下面に硬化や貼床は確認できない。また壁直下に明瞭な小溝（壁溝）も検出されなかった。

以上のように、標高 39.4 m 前後に若干のレベル差をもった床面が重複して観察されることに加え、壁上端プランにやや角張った突出部が認められることなどから、堅穴建物に類似した長方形プランを有する遺構が複数重複した状態となっている可能性が高い。ただし当該地点の傾斜を考えれば、斜面下方側に「堅穴」の壁面を想定することは難しい。柳之御所遺跡第 24 次調査「第 1 区画地区」の「段切り状遺構」を小規模にしたものが想起される。精査した部分が限られたため不明点が多く残るが、しっかりと硬化し平坦に整えられた床面や、壁面直下に連続する壁溝を見る限り、上屋を有する構造物である可能性を考慮に入れるべきであろう。後掲の焼土土坑（炉跡か）を本遺構の付属施設とみなせば、何らかの生産施設（工房）等の性格が想定されよう。断面 D1-D2 にも明らかのように、先掲溝跡 YG24SD4 は本遺構の埋土を断ち切っており、埋土性状の相違も勘案すれば、本遺構の廃絶時期は YG24SD4 の構築以前に求められる。

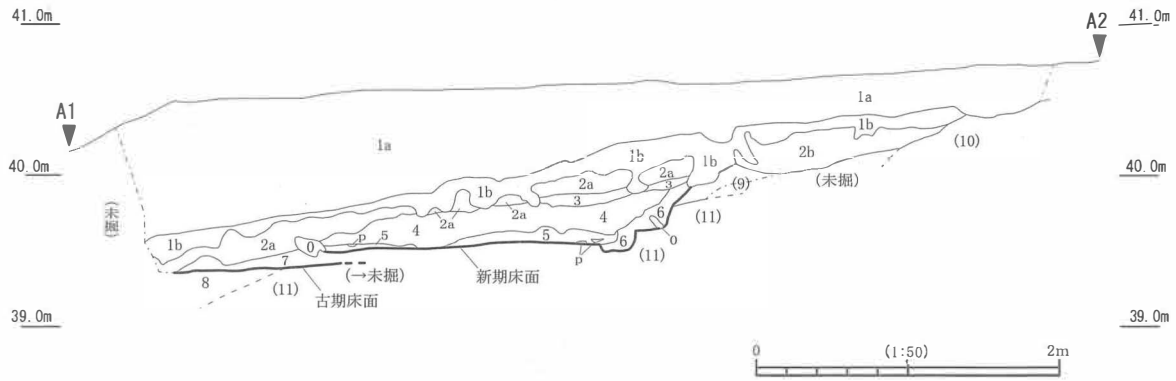
〈焼土土坑〉 4 基はいずれも先掲平場遺構のプラン内で確認したものである（10SX2～10SX5）。内部の精査は行っていない。平面形は径 60 cm 前後の円～楕円形を呈し、壁内面の被熱部がプラン外周に沿って環状に観察される。土坑内の埋土は径 10 mm 前後の木炭細片が目立つ暗褐色土で、平場遺構の床面直上層から連続して堆積したものとみられる。調査区西縁付近の 10SX4 は断面 A1-A2 の新期床面（5 層下面）を構築面としており、土坑の輪郭から瘤状に張り出した強変被熱部が観察される。また、セクションポイント B2 の北側 160 cm 付近の断面で確認された 10SX5 は、西側に近接する 2 基（10SX3・10SX4）と共に B2-B3：5 層下面が構築面となっている。断面 B2-B3 で新期床面とした 9 層下面よりもさらに上位の面であり、この地点においてはより新期の床面が存在したことを示唆している。柳之御所遺跡第 24 次調査「第 1 区画地区」の「段切り状遺構」A 面及び B 面では、同様の焼土土坑が複数確認されており、平坦面の外縁から 2 m 内外の床面上にまとまって分布するなどの類似点も指摘できる。

〈土坑・小ピット〉 高館跡第 3 次調査 3 トレンチと重複し地山面が広く表れた範囲（調査区東半部）で検出したものである。いずれも断面 D1-D2：8 層土に相当する暗褐色土を埋土とするものであり、断面 C1-C2 に見る通り、10SK1 は平場遺構の床面に切られている。平場遺構の埋土をのこした中央部～西半部では、下位に同様のピット類が分布しているものと推測される。埋土の性状から平場遺構と同時あるいはより古い段階に位置づけられるものと考えられる。

（村上）



第38図 第10次調査1トレンチ 平面図

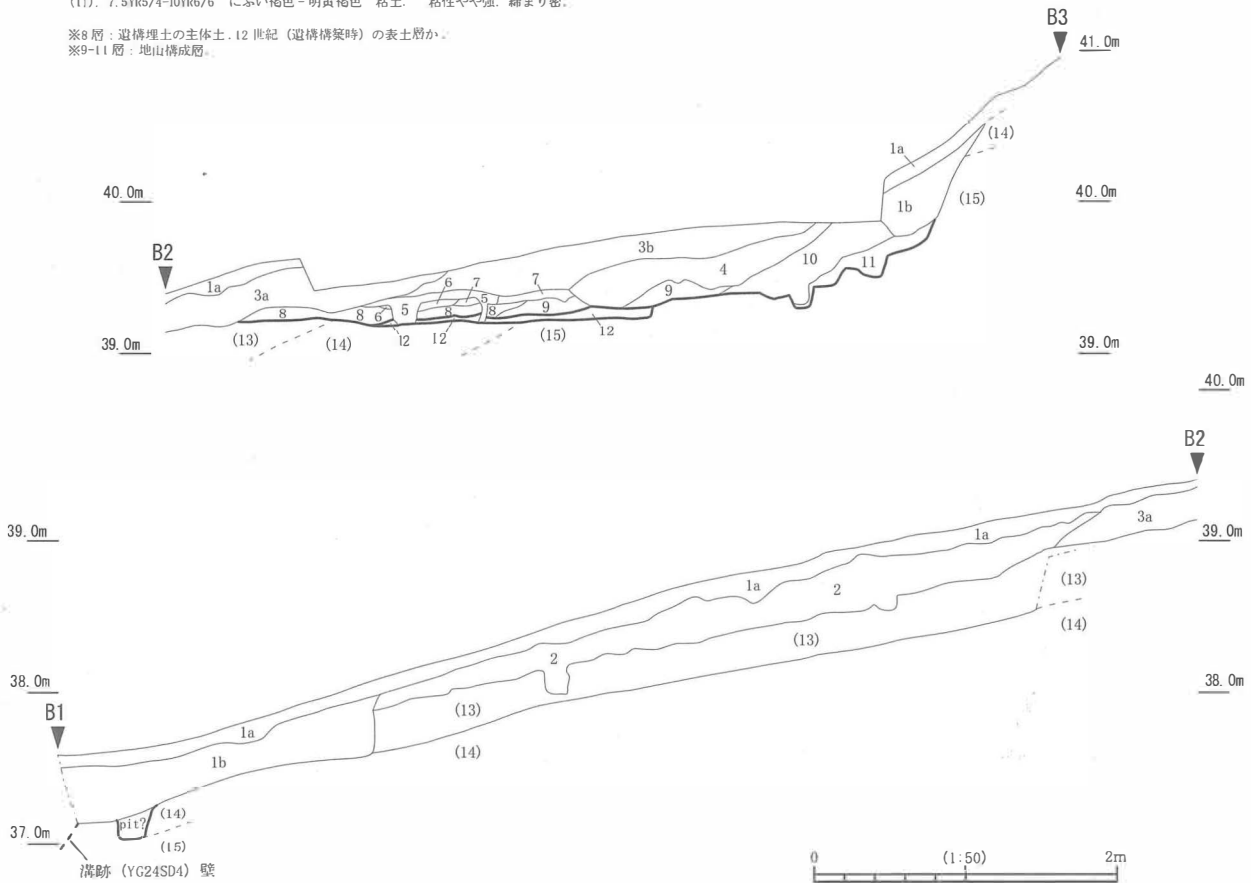


[T1区 断面A1-A2] (旧T1-1)

0. 根攪乱。
- 1a. 近現代造成盛土ブロック層。地山土ブロック大量。粘性中。締まりやや密。現状平坦面造成時のもの。
- 1b. 10YR3/3 暗褐色 シルト。粘性中。締まりやや疎。草木根やや多。下部ほど明るい。2aとの層界漸移的。盛り土直前の表土層。
- 2a. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト。粘性中。締まりやや疎。
- 2b. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト。粘性中。締まりやや密。2a層土主体の根攪乱か。9層土ブロック微。凝灰礫(径5-10mm)微。
3. 10YR4/3-3/4 にぶい黄褐色-暗褐色 シルト。粘性やや強。締まりやや密。9層土ブロック(径5-10mm)微。炭細片(径5-10mm)微(角張った大きめのもの主体)。炭混入により全体に黒味。
4. 10YR4/4 褐色 砂質シルト。粘性中。締まりやや密。9層土ブロック(径10-50mm)やや多。8層土ブロック(径10-50mm)微。炭細片(径5-10mm)極微。9層土ブロックは斜面上方。8層土ブロックは斜面下方に多く、いずれも大径のもの目立つ。9層土ブロックの混入により層全体が明るい。
5. 10YR4/3-3/4 にぶい黄褐色-暗褐色 粘土質シルト。粘性やや強。締まり中。9層土ブロック(径5-10mm)微。炭細片(径5-20mm)やや多。かわらけ等遺物集中する。炭量も多く黒味強い層。新期床面を直に被覆。
6. 10YR4/3-3/4 にぶい黄褐色-暗褐色 粘土質シルト。粘性中。締まり密。9層土ブロック(径5-10mm)少。炭細片(径5mm)極微。壁際小溝~壁面を埋める土層。
7. 10YR4/4 褐色 シルト。粘性やや強。締まりやや密。混入物ほとんど含まないプレーンな土層。古期床面及び同面に分布する陶器片群を被覆する。
7. 5YR4/3 褐色 粘土質シルト。粘性やや強。締まりやや密。炭粒(径2mm)極微。全体にわずかに赤み帯びる。
9. 10YR4/4 褐色 シルト。粘性やや弱。締まり密。凝灰礫(白色・淡黄色。径5-15mm)微。10層に比してやや暗い。
10. 7.5YR5/6 明褐色 砂質シルト。粘性弱。締まり密。凝灰礫(白色・淡黄色。径10-30mm)多。
11. 7.5YR5/4-10YR6/6 にぶい褐色-明黄褐色 粘土。粘性やや強。締まり密。

※8層: 遺構埋土の主体土。12世紀(遺構構築時)の表土層か。

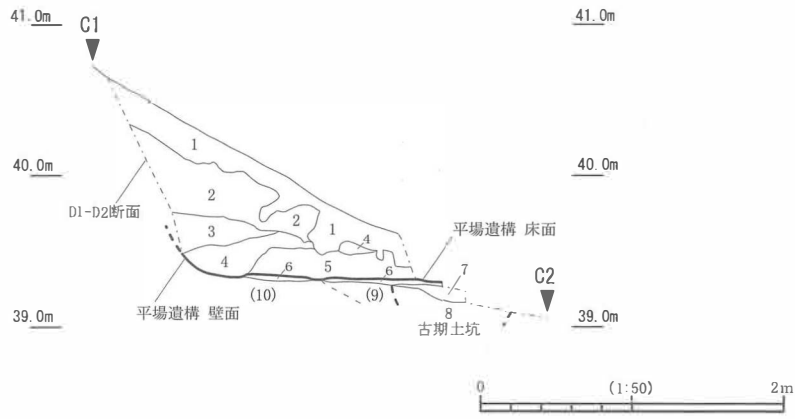
※9-11層: 地山構成層。



[T1区 断面B1-B3] (旧T1-2)

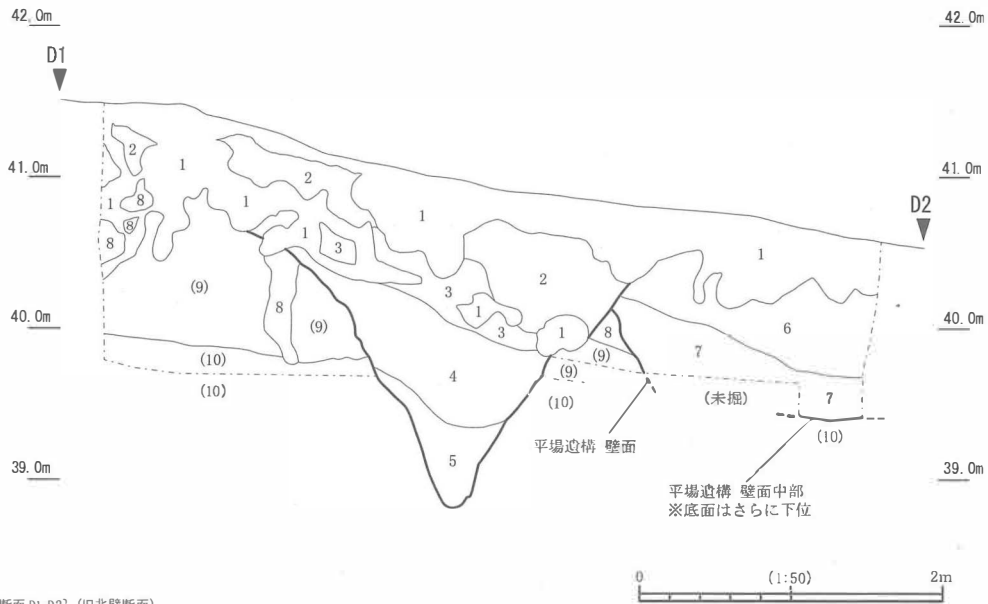
- 1a. 10YR3/3 暗褐色 シルト。粘性やや強。締まりやや疎。草根多く乾燥しやすい。現表土。
- 1b. 「高館跡第3次調査2トレンチ」の埋め戻し土。
2. 10YR3/4 暗褐色 シルト。粘性中。締まり中。小礫(径5mm)極微。旧耕作土か。
- 3a. 10YR4/3-4/4 にぶい黄褐色-褐色 砂質シルト。粘性やや弱。締まりやや密。白色凝灰粒(径2-5mm)少(全体に目立つ)。砂質帯び全体に乾燥しやすい。
- 3b. 10YR4/4 褐色 砂質シルト。粘性弱。締まり密。白色凝灰小礫(径2-30mm)やや多。3a層に似るが礫混入多くなると明るい。
4. 10YR4/4 褐色 砂質シルト。粘性やや弱。締まりやや密。凝灰礫(径5-40mm)やや多。3b層に比して大径礫の割合多い。15層土ブロックを少量含む全体に黄味帯びる。
5. 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト。粘性中。締まり密。凝灰粒(径2-5mm)極微。炭粒(5-10mm)微。炭は小ビット状の落ち込み特に集中。
6. 5YR4/6-3/6 赤褐-暗赤褐色 シルト。粘土。粘性中。締まり密。下位層(7・8)の被熱赤変部。
7. 10YR4/4 褐色 砂質シルト。粘性中。締まり密。黄褐色粘土ブロック(15層由来)やや多。全体に黄味強。
8. 10YR4/4 褐色 砂質シルト。粘性やや弱。締まり密。凝灰礫(径2-10mm)微。
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト。粘性中。締まり密。凝灰礫(径2-10mm)極微。8に比して暗い。
10. 10YR4/4 褐色 砂質シルト。粘性中。締まりやや密。凝灰礫(径2-10mm)極微。
11. 10Y14/4 褐色 砂質シルト。粘性やや弱。締まりやや密。凝灰礫(径10-40mm)大量。黄褐色粘土ブロック微。
12. 7.5YR4/4-3/4 褐-暗褐色 粘土質シルト。粘性中。締まりやや密。
13. 7.5YR3/3-3/4 暗褐色 シルト。粘性やや強。締まりやや密。小礫(径5-10mm)極微(14層由来・14層との層界付近に多い)。
14. 7.5YR4/4-10YR1/4 褐色 砂質シルト。粘性やや弱。締まり密。凝灰礫礫(円~歪円礫・径5-50mm)多量。酸化鉄により全体に赤味。
15. 10YR4/6 褐色 粘土。粘性やや強。締まりやや密。層上面から下位約30cmで白色粘土(10YR7/3 にぶい黄褐色)層となり、間に数枚の酸化鉄集積面を挟む。

第39図 第10次調査1トレンチ 断面図(1)



【T1区 断面C1-C2】(旧北壁直交断面)

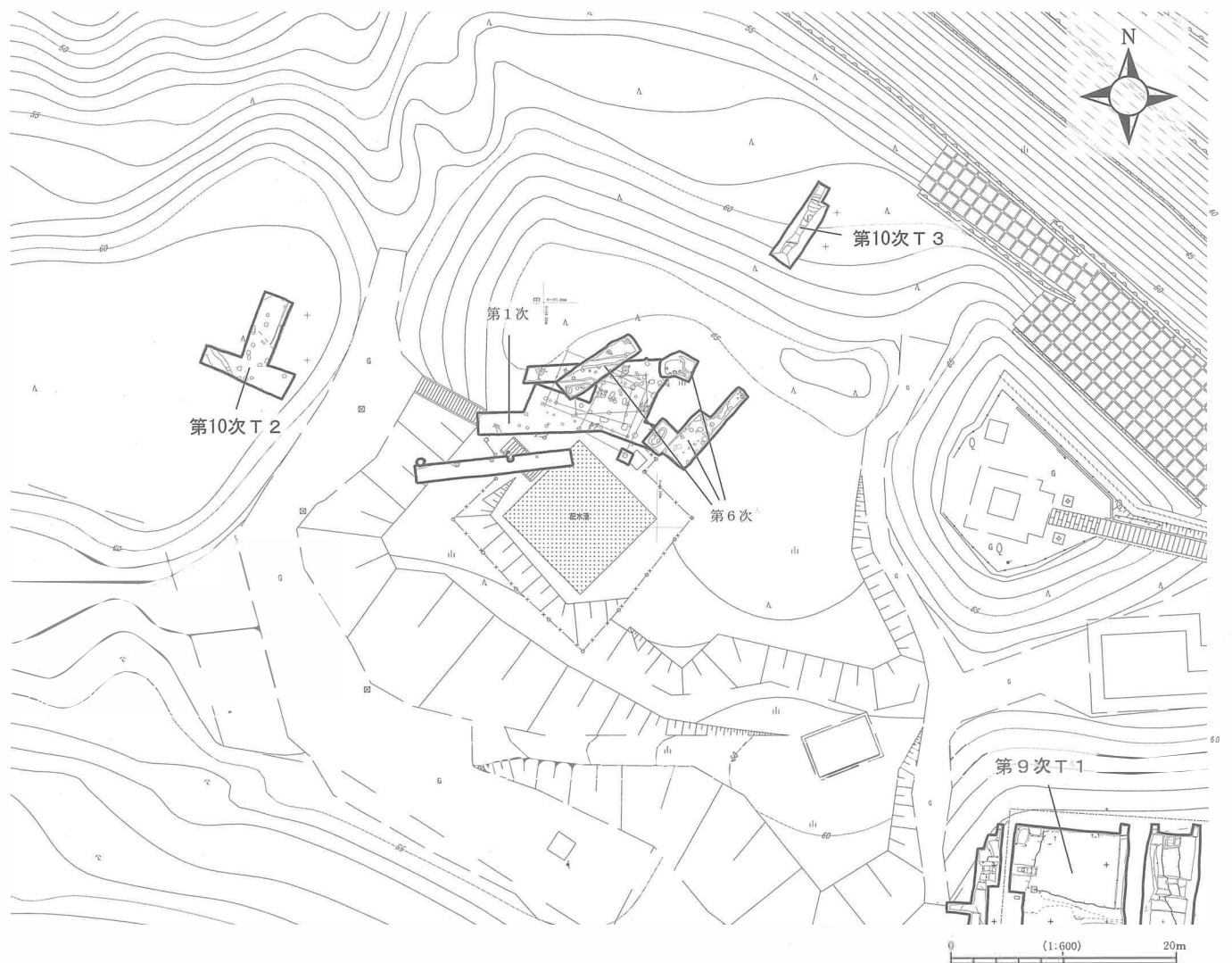
1. D1-D2の1層。
2. D1-D2の6層。
3. D1-D2の7層。
4. 10YR4/4 褐色 シルト。粘性中。締まり密。10層由来の粘土ブロック(径5-20mm) やや多。壁側に向かって下のように堆積する。凝灰礫(径5-10mm) 極微。下面が新期遺構の床面の可能性。
5. 10YR4/4 褐色 シルト。粘性中。締まり密。10層由来の粘土ブロック(径5-20mm) 極微。凝灰礫(径5mm) 極微。
6. 10層土ブロック層。貼床状。上面平坦に硬化。粘性中。締まり密。
7. 9層土ブロック層。粘性弱。締まり密。
8. 7.5YR4/4-3/4 褐-暗褐色 シルト。粘性やや強。締まりやや密。D1-D2の8層土によく似る。平面で径1m弱の円形プランが認められることから、平場遺構に先行する土坑の埋土とみられる。
- (9). D1-D2の9層。
- (10). D1-D2の10層。



【T1区 断面D1-D2】(旧北壁断面)

1. 現表土及び根打擾乱。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト。粘性やや強。締まり中。現表土の下位層。
3. 10YR4/4-4/6 褐色 砂質シルト。粘性やや弱。締まりやや密。凝灰礫(径5-10mm) 極微。
4. 10YR5/4-4/4 にぶい黄褐色-褐色 砂質シルト。粘性やや弱。締まりやや密。凝灰礫(径5-30mm) 少。3・5層に比して砂礫の混入多く乾き易い。全体に白色粒子目立つ。B1-B2-B3断面の3a・3b層によく似る。
5. 10YR4/4-4/6 褐色 シルト。粘性中。締まり中。凝灰礫(径5-10mm) 微。地山黄褐色粘土ブロック微(下部に多い・壁崩落)。白色粒子極微(4よりずっと少ない)。
6. 10YR4/6 褐色 シルト。粘性中。締まり中。凝灰礫(径5-10mm) 極微。全体に地山土含みや黄味。
7. 7.5YR4/4-10YR4/4 褐色 シルト。粘性やや強。締まり中。
8. 7.5YR4/4-3/4 褐-暗褐色 シルト。粘性やや強。締まりやや密。下部に凝灰礫(5-10mm) 極微。炭粒(径2mm) 極々微。図左半(壁側)では凝灰礫(径5-10mm) 微量含み、上位の6層に似る。
- (9). B1-B2-B3の14層。地山砂礫層。
- (10). B1-B2-B3の15層。地山粘土層。

第40図 第10次調査1トレンチ 断面図(2)



第41図 調査区位置図(4)

○2トレンチ (TD10-T2) (第42図)

〔調査地点〕 $X=-111,261 \cdot Y=24,200$ 付近に位置する。高館丘陵全体のうち、西側に伸びる丘陵頂部に位置する。これまでの高館跡での調査位置のうち、もっとも西側に位置する。岩手大学による第1次調査及び平泉町教育委員会による第4次調査の調査位置から、堀切状の地形を挟んで更に西側へと伸びる丘陵頂部に設定した。

これまでの調査から高館跡の丘陵頂部付近を堀に囲繞された範囲として想定していたが、城館としての利用範囲がより広く広がることは地形観察からも認識できる。この調査区の位置よりさらに西側はこの位置を帯曲輪状の平坦面に囲まれて丘陵頂部に平坦面が広がる。

遺物分布状況なども含めて、堀の囲繞範囲の検討材料を得るため、諸条件が整う中では西端付近にあたる位置に、調査区を設定した。

〔基本土層〕 表土を除去した直下に、いわゆる地山層にあたる黄褐色粘土層が確認でき、検出面と想定して検出を行った。

〔調査方法〕 周囲には雑木が多く繁茂しており、それらの雑木間で出来る限り平面的に検出を行うよう調査区を設定した。

〔検出遺構〕 柱穴26個、溝1条のほか、整地を確認した。

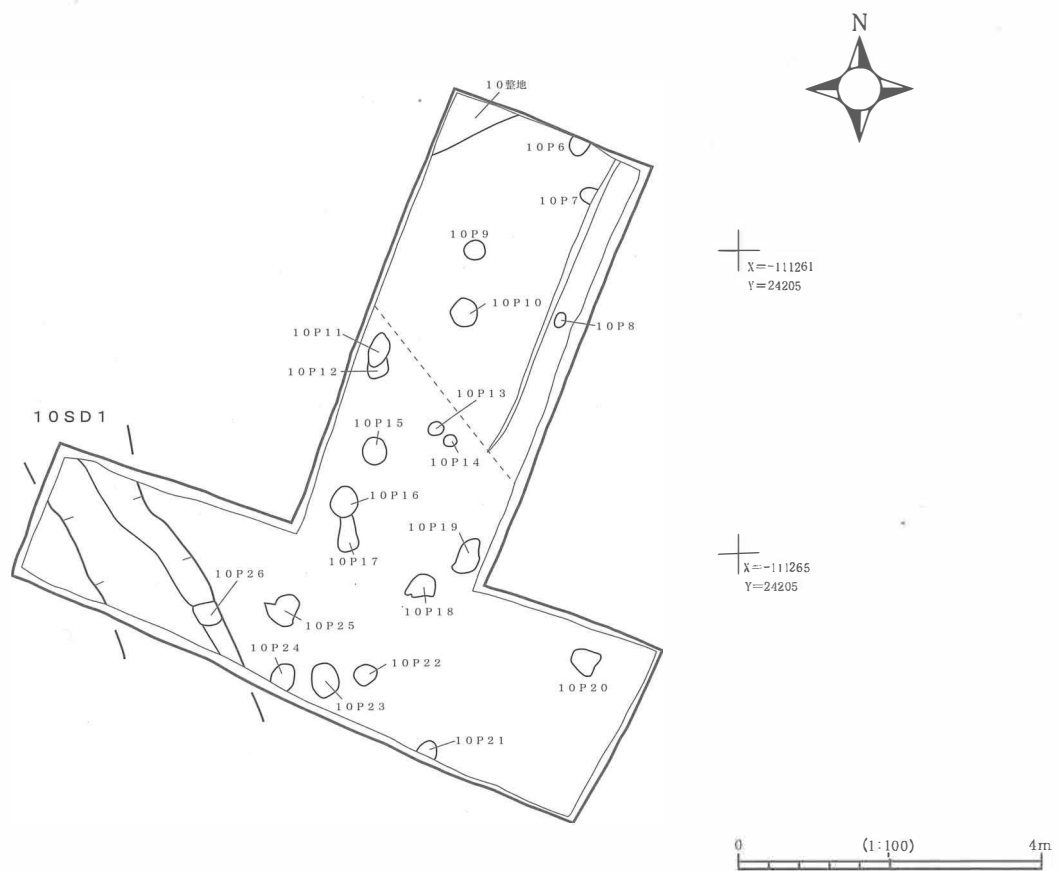
〈10SD1 溝跡、柱穴、10 整地〉 10SD1 溝跡は幅 1 m ほどで、北方向に延びる溝跡である。精査しておらず、深さ等は不明だが、埋土はしまりの弱い黒色土である。

柱穴は 26 個確認しているが、いずれも径 10 ～ 20cm 程と規模が小さい。調査区内ではこれらの柱穴が組み合う状況は確認できておらず、建物跡等の復元はできない。また、埋土は黒色で観察されるが、縮まりや規模などから 12 世紀代の遺構の可能性は低いとみられる。

調査区の北側では地山ブロックを多く含む黄白色土を主とする整地が確認できる。土質のしまり等は弱く、上面でも柱穴など遺構は確認できていない。また、整地層中からは遺物等は出土していない。

なお、調査区全体で遺物はほとんど出土していない。表土から 12 世紀代の可能性がある土器の小片が 1 片出土したのみである。

(櫻井)



第 42 図 第 10 次調査 2 トレンチ 平面図

○3 トレンチ (TD10-T3) (第 43・44 図)

〔調査地点〕 X=-111, 250・Y=24, 250 付近、義経堂の北約 30 m に位置する。義経堂及び町水道施設が存する丘陵頂部平坦面の北縁部、北上川に向かって下る急崖の頂部付近 (標高 60 m 前後) に立地する。現況は山林である。

〔基本土層〕 浅黄色の粘土層とこれに挟在する砂層が地山を構成する。トレンチ周辺は広く後世の削剥を受けており、地山の上位にプライマリーな自然堆積層は残存しない。トレンチ内では堆積層の上部に大量の河床礫が混入しており、下部の土層と大きく様相を異にしている。

〔調査方法〕 丘陵頂部平坦面の縁部に沿った位置に堀の存在を想定し、これに直交する方向に 7.7 × 2.0 m のトレンチを設定した。トレンチ内部は地山に到達するまで完掘した。

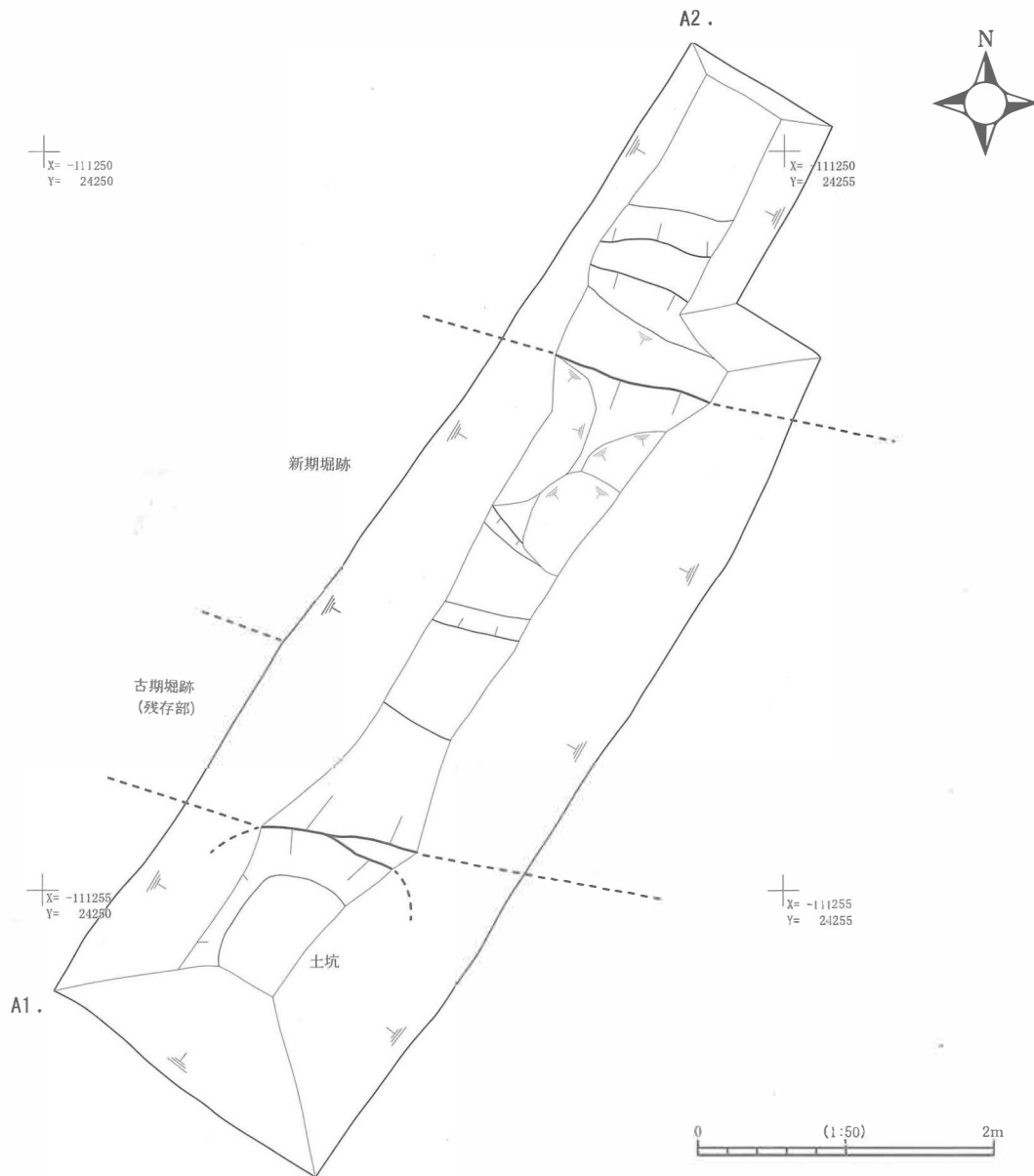
〔検出遺構〕 検出遺構は、堀跡 2 条、土坑 1 基である。このほか後世の整地痕跡が複数重複する状況が観察されている。

〈10SD2 堀跡〉 幅の狭いトレンチ内で確認したものであり詳細は不明だが、周辺の現況地形等も勘察すれば、概ね同一標高付近を東西方向に走行すると推測される。東側は義経堂北縁の崖面に接するところで断ち切られる形となるが、崖面の侵食が進む以前はそのまま延伸し義経堂の平坦面の裾をめぐるように走行していたと考えるべきであろう。断面 A1-A2 では、概ね逆台形の断面形を呈する新旧の堀跡が切り合った状態で確認された。12～17 層は古段階の埋土である。地山ブロックを主体としており、山側からの崩落土または埋め戻しによる堆積層と考えられる。これを切るのが 11a・11b 層の新时期堀跡埋土で、最下部の 11b 層には粘土・砂の互層からなる水成堆積の様相が見られた。帰属年代としては 12 世紀～中世後期が想定されるが、個別の時期を特定する根拠は得られなかった。

〈10SK1 土坑〉 斜面上方側のトレンチ底面端部で検出したものである。上端・下端の一部を確認したのみで全体形状は不明であるが、径 1.5 m ほどの円形を呈すると推測される。断面 A1-A2 : 7 層が本遺構の埋土の一部であり、粘土と砂の互層からなる水成堆積の様相を示している。上掲の新时期堀跡埋土下部 (11b 層) に類似した土層である。また、7 層の上位の 6a・6b 層は本土坑を切って設けられた新たな掘り込みで、大量の河床礫が充填されていた。この礫充填層はトレンチの対向断面まで連続しており、土坑なのか堀跡に平行する溝状を呈するのかわについては不明となっている。河床礫を多量に包含するのは断面 A1-A2 の 10 層以上に顕著な特徴であり、これらの土層との対比から、相対的には新时期に後続する段階に位置づけられよう。

〈整地痕跡等〉 上述の通り、断面 A1-A2 : 10 層以上には多量の河床礫が含まれている。同様の礫を含む自然堆積層は丘陵上部には認められないことから、北上川河床等から人為的に搬入されたものである可能性が高い。他地点の様相等から中世後期以降のことと推測される。その後は埋没した堀跡に沿って平坦面を形成する造成が繰り返し行われており (1・4・8・9 層の各下面)、帯状平坦面として現在もその痕跡をとどめている。

(村上)



第 43 図 第 10 次調査 3 トレンチ 平面図

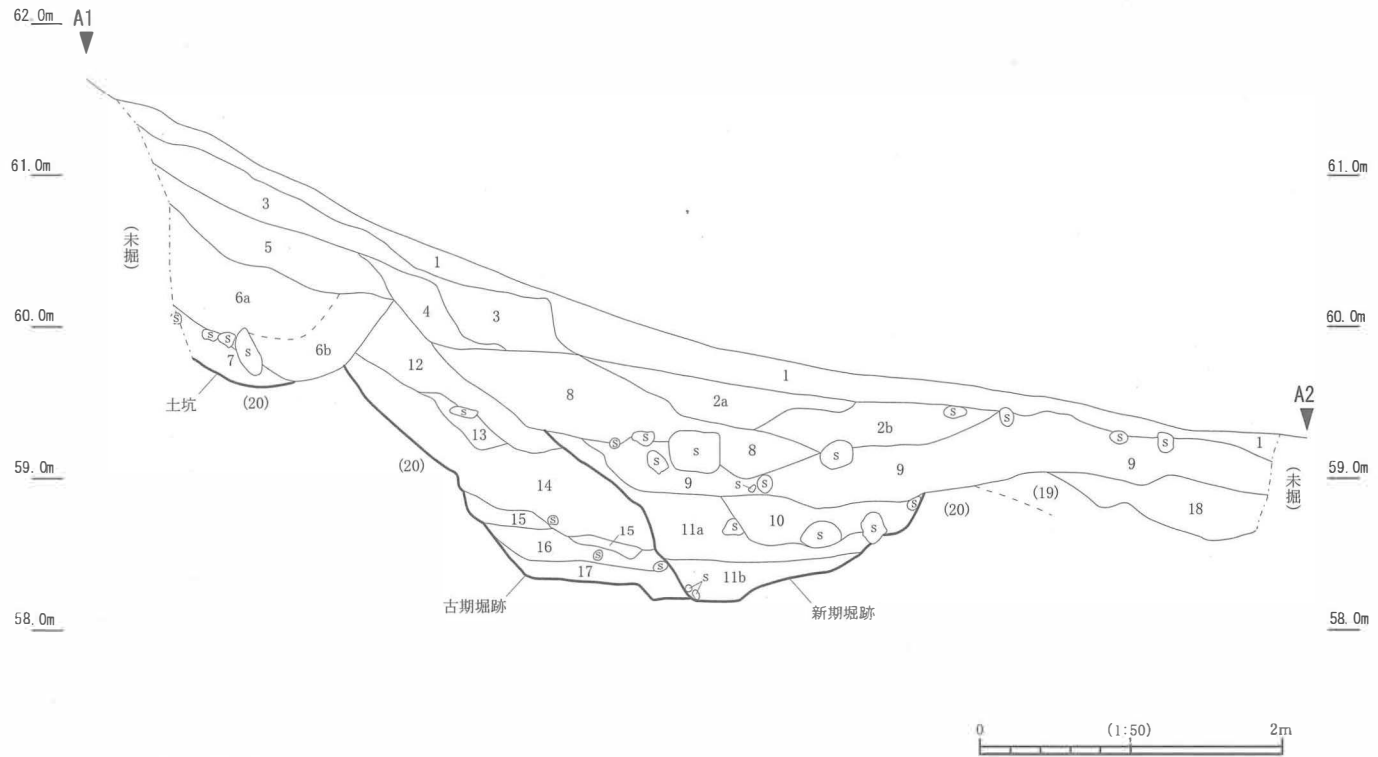
(2) 出土遺物

○第 10 次調査出土遺物の概要 (第 45 ~ 47 図)

第 10 次調査ではかわらけ 4,256.1 g、国産陶器類 7,990.7 g が出土している。各調査区ごとの出土量は下表のとおりである。

各調査区からは 12 世紀代のかかわりが少量出土している。丘陵の東側に設定した TD10-T1 からはかわらけや国産陶器類が多く出土している。特に、国産陶器類がまとまって出土している点は、調査区の位置の機能を考える上でも重要な成果である。一方で、TD10-T2 及び TD10-T3 では遺物の出土が極めて少ない。特に、TD10-T2 は丘陵全体の中央部付近に設定しており、今回の一連の調査で最も西側に位置する調査区にあたるが、遺物の出土が表土を含めても僅少である。小片のため時期の特定は難しいがかわらけ片が 1 片出土しているのみである。

第44図 第10次調査3トレンチ 断面図



[T3区 断面 A1-A2]

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト、粘性やや強、締まりやや疎、草木根多、礫(径20-40mm)微、現表土(森林腐植土)層。
- 2a. 10YR2/3-3/3 黒褐-暗褐色 シルト、粘性やや強、締まり中、1に似るが草根入らず全体にわずかに明るい、径30mm前後の円礫多量。
- 2b. 10YR2/3-3/3 黒褐-暗褐色 シルト、粘性やや強、締まり中、2aによく似る、径20-150mmの円礫多量(2aに比して径の大きい礫が主体)。
3. 10YR3/3 暗褐色 シルト、粘性中、締まりやや疎、円礫(径10-20mm)少。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト、粘性やや強、締まりやや疎、5層土の崩落再堆積ブロックを多く含み、全体黄味帯びる、準大円礫(径100mm)微(6層由来)。
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト、粘性やや強、締まりやや疎、地山粘土ブロック(20層土・径10-30mm)大量、円礫(径20-30mm)微。
- 6a. 10YR4/2 灰黄褐色 礫層、粘性弱、締まり疎、径30mm前後の円礫が充填されている。
- 6b. 6a層によく似る、径の大きい円礫(200mm前後)が集中する部分。
7. 10YR4/1-3/1 褐灰-黒褐色 粘土、粘性強、締まりやや密、下面に酸化した砂の薄層、11b・13・15層に似る。
8. 10YR4/2-3/2 灰黄褐-黒褐色 シルト、粘性中、締まりやや密、円礫(径100mm前後)微、炭粒(径2-10mm)極微(下部に集中)。
9. 10YR4/2-3/2 灰黄褐-黒褐色 シルト、粘性中、締まり中、円礫(径100-150mm)大量、全体に砂ブロック(19層由来)少量。
10. 10YR4/2-3/3 灰黄褐-暗褐色 砂質シルト、粘性中、締まり中、9層によく似るが砂質強くやや臭味、混入礫は径250-300mmの大きなものが集中。
- 11a. 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト、粘性やや強、締まり密、円礫(径10-30mm)極微、全体に砂混入。
- 11b. 10YR4/1 褐灰色粘土と10YR5/4 にぶい黄褐色砂の互層、粘性やや強、締まり中。
12. 10YR5/2-4/3 灰黄褐-にぶい黄褐色 砂質シルト、粘性中、締まり密、全体に砂ブロック多(酸化により赤味)。
13. 10YR5/2-4/1 灰黄褐-褐灰色 粘土、粘性やや強、締まりやや密。
14. 10YR4/2-4/3 灰黄褐-にぶい黄褐色 粘土質シルト、粘性中、締まりやや密、地山ブロック(19・20層土・径10-30mm)大量、上方から流入した様相。
15. 13層に同じ。
16. 10YR6/4-5/4 にぶい黄橙-にぶい黄褐色 粗砂、粘性やや弱、締まりやや疎、地山粘土ブロック(20層土)少。
17. 2.5Y6/3 にぶい黄色 粘土、粘性やや強、締まり中、壁面(20層)からの流入土か、下面が構築面、上面が機能面か。
18. 10YR3/2 黒褐色 シルト、粘性中、締まり中、砂ブロック(19層土か・径10-20mm)少、本根目立つ、下面不整に乱れる(木根による攪乱の可能性)。
- (19). 10YR5/6-4/6 黄褐-褐色 砂、粘性弱、締まりやや密、上位には再び20層類似粘土層が堆積している、地山構成粘土層に挟在する砂層。
- (20). 2.5Y7/3-6/3 浅黄-にぶい黄色 粘土、粘性やや強、締まりやや密、腐鼻及びクラックに酸化鉄集積顕著。

※3層：TD10-T1区にもみられる現表土の低位層に對比。

なお、図化していない資料中でも、12世紀代以前の古代の土器と判断できる明確な特徴を持つ資料は確認できなかった。また、国産陶器類も一定量出土している。

表 8 第 10 次調査出土遺物

	かわらけ (g)	国産陶器類 (g)	輸入陶磁器類 (g)	その他
T 1	4, 181. 5	7, 930. 4	—	近世陶器等
T 2	9. 2	—	—	—
T 3	65. 4	60. 3	—	近世陶器等
合 計	4, 256. 1	7, 990. 7	—	

○3 トレンチ (TD10-T3) 出土遺物 (第 45 図)

国産陶器類が 60. 3 g 出土している。このうち 3 点を図示した (159～161)。いずれも常滑産とみられ、甕もしくは片口鉢類の体部片である。

このほか、ロクロ及び手づくねのかわらけ片が出土しているが、小片のため図示できておらず、出土量も極めて少ない。

○1 トレンチ (TD10-T1) 出土遺物 (第 45 図)

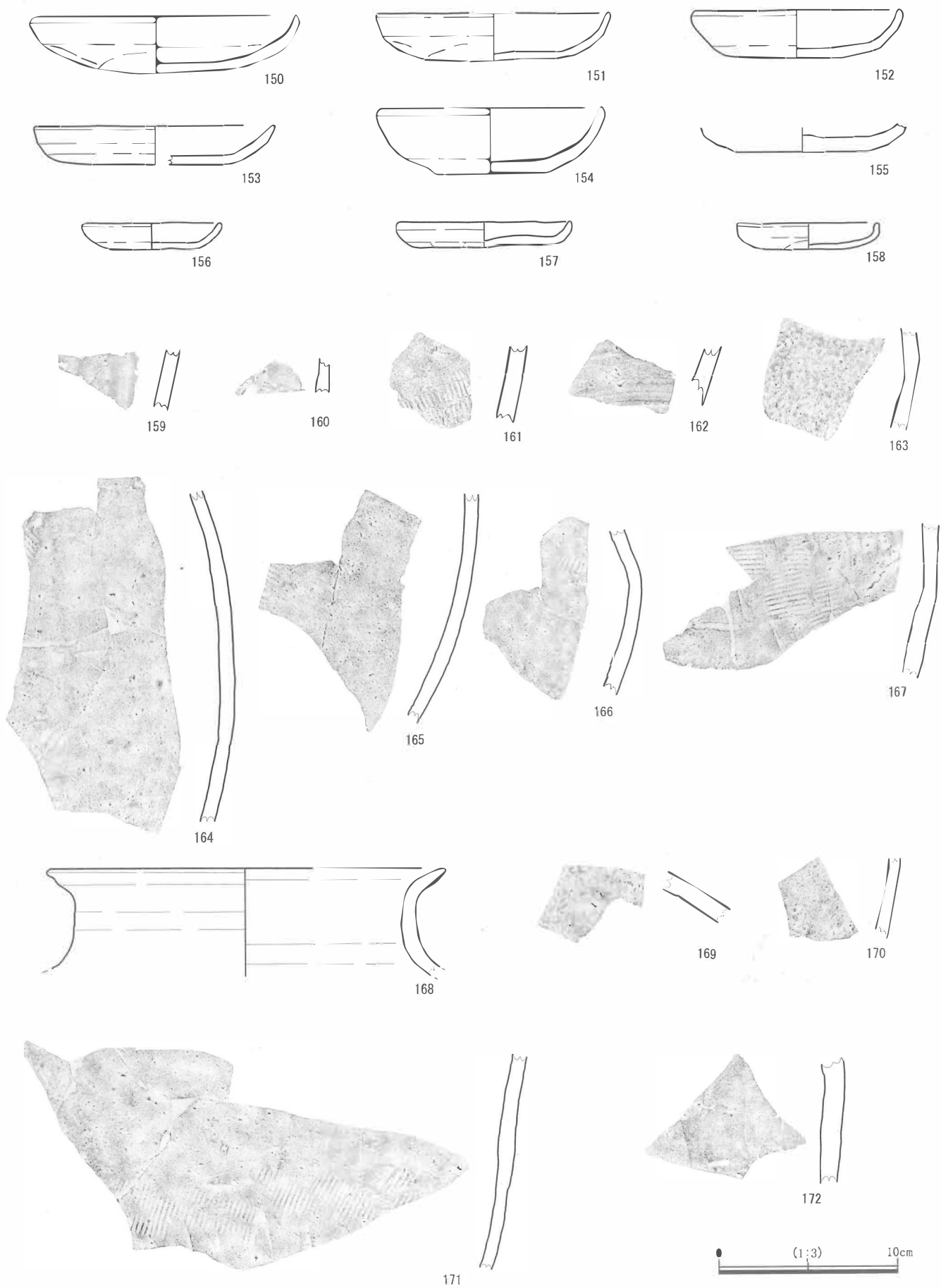
かわらけが 4, 181. 5 g、国産陶器類が 7, 930. 4 g 出土しており、そのうち、かわらけ 9 点と国産陶器 37 点を図示した。

かわらけは多くは 10SX1 の埋土及び底面付近から出土している (150～158)。図示した資料では、150 は手づくねかわらけの大皿で口径 14. 8cm と比較的大型の器形である。151～153 は手づくねかわらけ大皿で口径は 13cm 前後以下で、152 は口径 11. 8cm と口径が小さい器形である。154 はロクロかわらけの大皿で、器高 3. 7cm である。なお、旧期の遺構出土とみられる資料には 12 世紀中葉などを含むやや古相の特徴をもつ資料が多く含まれるように見受けられたが、今回の調査区のうち下層まで掘り下げた位置は極めて限定的なため数量的な取り上げ及び把握ができていない。ただし、いずれの調査位置でも 12 世紀前半までに遡る特徴を明確にもつ資料は得られていない。

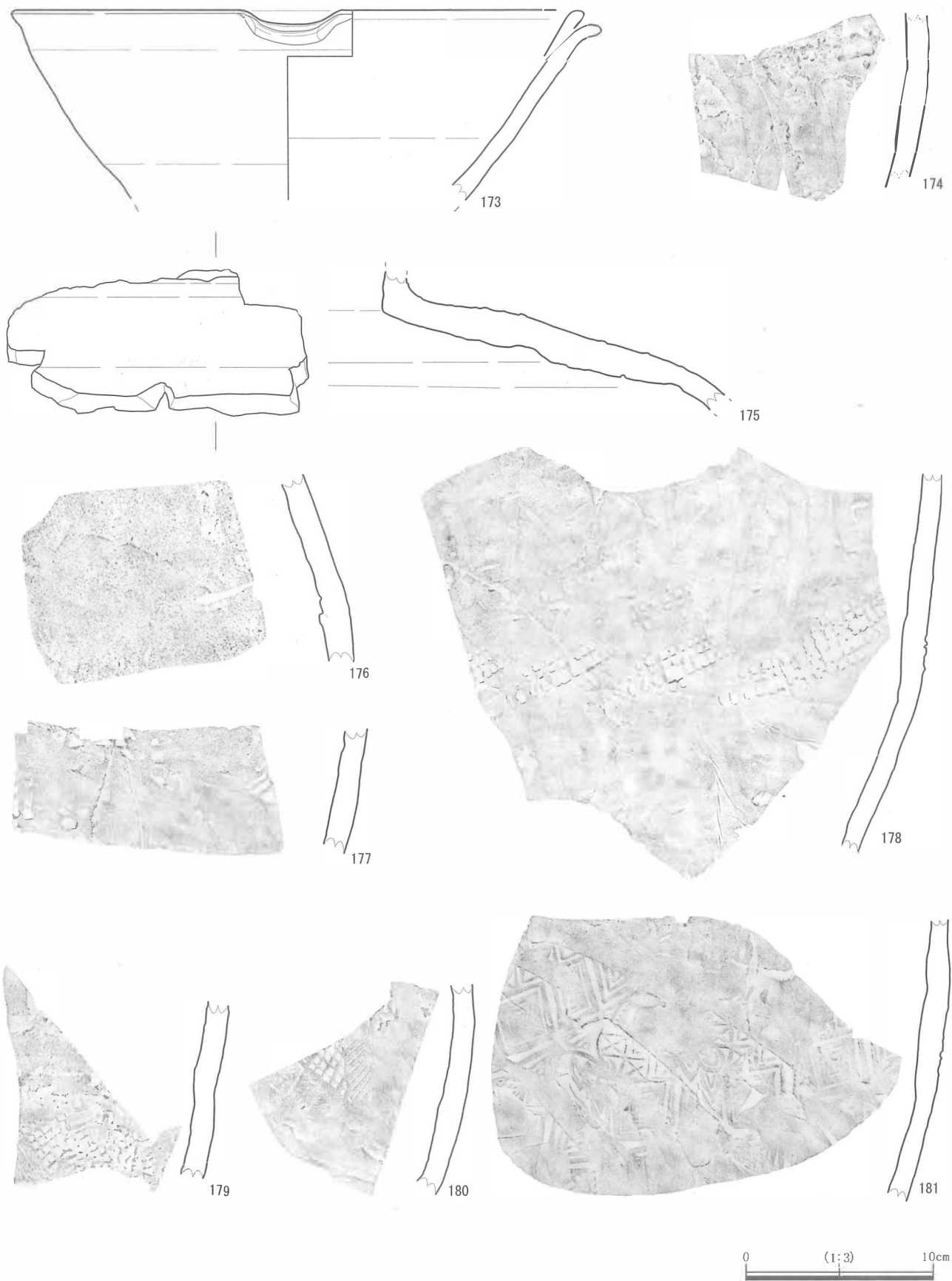
国産陶器類は破片も大きく、出土状況も 10SX1 の底面付近にまとまって出土している。これらの出土状況は、柳之御所遺跡堀外部地区の調査で確認された状況との類似性が強い傾向と把握できる様相が確認できた。調査区及び精査面積は限定的なため接合個体が多くないが、周辺まで調査を広げれば接合個体等がより増えることが推察でき、残存の状況からは器形を復元できる資料が多いとみられる。図示した資料では渥美産及び常滑産の甕類が多くを占める (162～198)。口縁部片なども含む。押印も縦線文のほか、格子文や装飾性の強い文様 (181、185、189) などもみられる。

なお、国産陶器類が多く出土している一方で、輸入陶磁器類は調査区内では確認されていない。

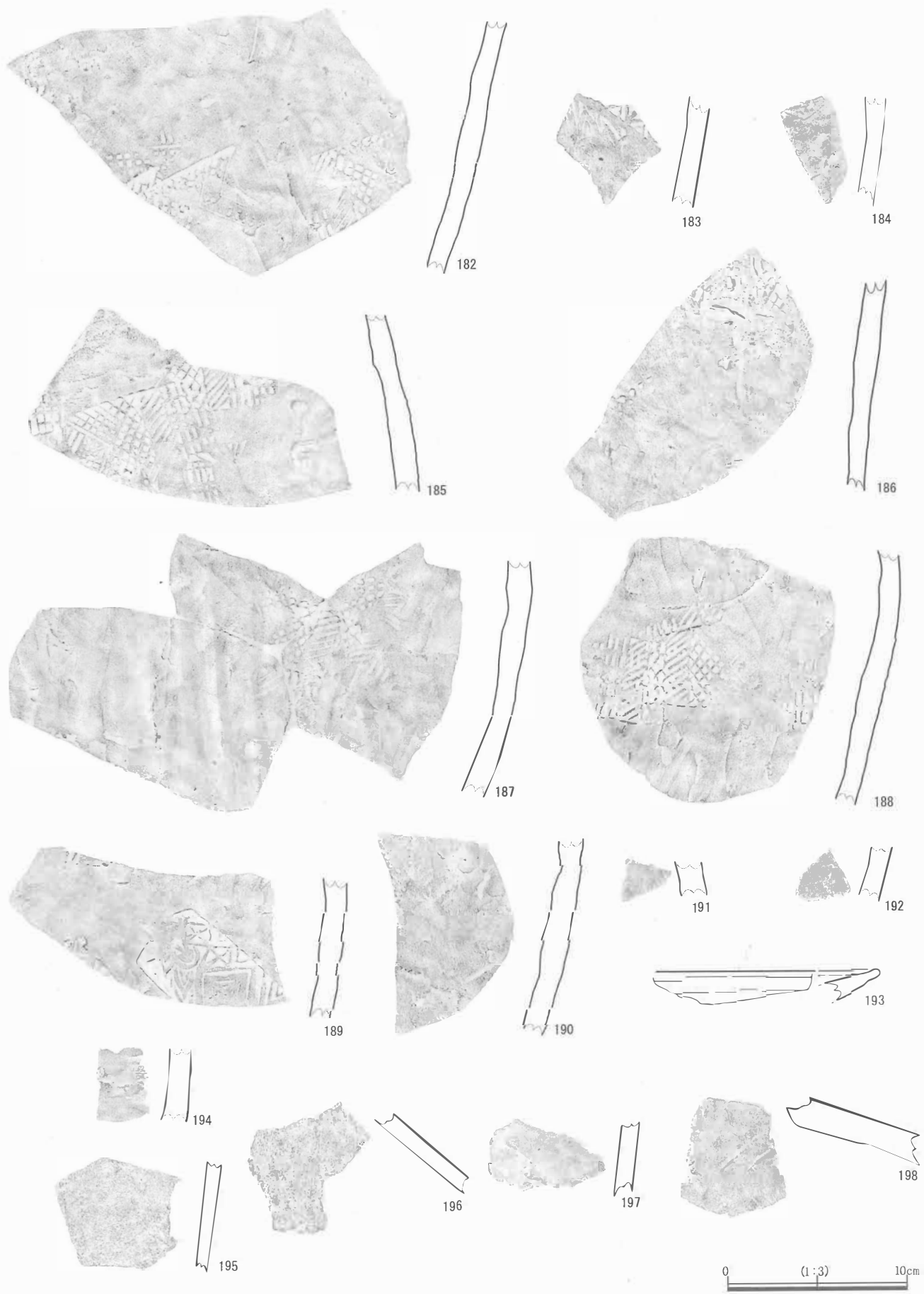
(櫻井)



第 45 図 第 10 次調査出土土器類実測図 (1)



第 46 図 第 10 次調査出土土器類実測図 (2)



第 47 図 第 10 次調査出土土器類実測図 (3)

IV章 自然科学分析

第1節 岩手県平泉町高館跡第7次の自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) 試料

試料は、第7次調査2トレンチの旧表土から採取された土壌試料1点と、その直下で確認された地山から採取された土壌試料1点の合計2点である。いずれも土壌試料中から炭化材を抽出し、分析試料とした。いずれも樹皮の無い1-2年分の年輪を持つ破片が多数認められる。それぞれの試料から最も大きな破片を選択し、全量を測定試料とした。

(2) 分析方法

測定試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて δ 13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0。(Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正は、CALIB 7.1.0.のマニュアルに従い、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正結果は $\sigma \cdot 2 \sigma$ (σ は統計的に真の値が68.2%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95.4%の確率で存在する範囲)の値を示す。また、表中の相対比は、 $\sigma \cdot 2 \sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。なお、較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表

された値を記す。

(3) 結果

各炭化材の同位体効果による補正を行った測定結果(補正年代)は、旧表土の炭化材が $1,030 \pm 20BP$ 、地山の炭化材が $1,160 \pm 30BP$ である(表9)。

また、これらの補正年代に基づく暦年較正結果(1 σ)は、旧表土の炭化材が calAD995-1,021、地山の炭化材が calAD778-940 である。

(4) 考察

高館跡の第7次調査2トレンチ旧表土と地山から検出された炭化材について、年代測定を実施した。旧表土の炭化材は、補正年代が $1,030 \pm 20BP$ で、暦年較正結果から10世紀末～11世紀初頭頃の年代が想定され、先述した柳之御所遺跡の堀跡SD1およびSD2の年代測定結果と比較すると、若干古い年代値を示す。

一方、地山の炭化材は、補正年代が $1,160 \pm 30BP$ で、暦年較正結果から8世紀後半～10世紀前半頃の年代が想定され、本試料の年代測定値は、上層の旧表土から出土した炭化材よりも古い年代を示す。

引用文献

- 濱野周泰, 2005, 原寸図鑑葉っぱでおぼえる樹木. 柏書房, 334p.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑(2010年改訂版). 東北大学出版会, 678p.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2012, ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632種—. 誠文堂新光社, 272p.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 吉山 寛・石川美枝子, 1992, 原寸イラストによる落葉図鑑. 文一総合出版, 372p.

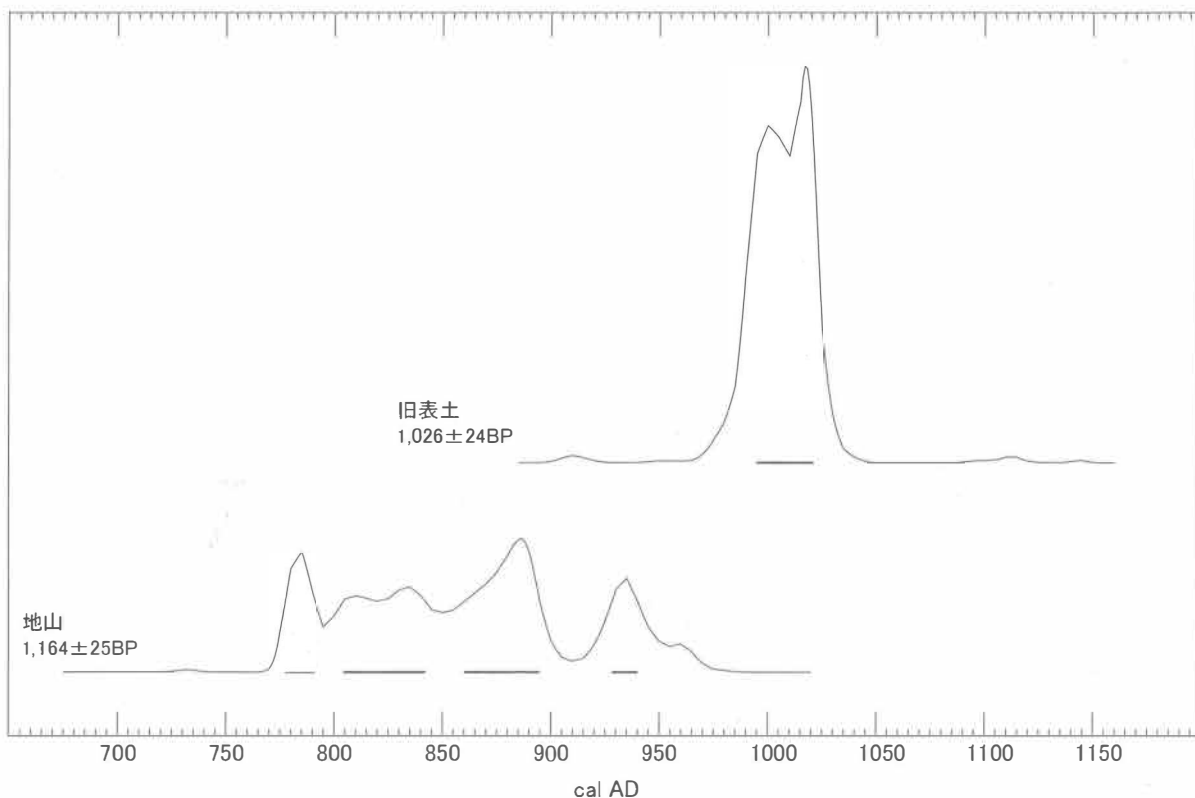


図 48. 高館跡の暦年較正結果 (1σ)

表 9 高館跡の放射性炭素年代測定結果

遺構層位	材質種類	測定年代 BP	δ13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果				Code No.
					誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
旧表土	炭化材ク	1,050±20	-26.68 ± 0.54	1,030±20 (1,026±24)	σ	cal AD 995 - cal AD 1,021	cal BP 955 - 929	1.000	IAAA-142516
					2σ	cal AD 979 - cal AD 1,031	cal BP 971 - 919	1.000	
地山	炭化材ク	1,130±20	-22.67 ± 0.58	1,160±30 (1,164±25)	σ	cal AD 778 - cal AD 791	cal BP 1,172 - 1,159	0.157	IAAA-142517
						cal AD 804 - cal AD 842	cal BP 1,146 - 1,108	0.332	
						cal AD 860 - cal AD 895	cal BP 1,090 - 1,055	0.396	
						cal AD 928 - cal AD 940	cal BP 1,022 - 1,010	0.115	
	2σ	cal AD 774 - cal AD 901	cal BP 1,176 - 1,049	0.826					
		cal AD 920 - cal AD 961	cal BP 1,030 - 989	0.174					

- 1) 試料はいずれも前処理として酸処理—アルカリ処理—酸処理(AAA処理)を実施している。
- 2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 4) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。
- 6) 暦年の計算には、補正年代に①で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
- 7) 年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である
- 9) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第2節 高館跡第9次調査における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

高館跡は、岩手県西磐井郡平泉町平泉字柳御所に所在する。測定対象試料は、第9次調査4・5トレンチの溝跡から出土した炭化物3点である(表10)。

高館跡は、柳之御所遺跡に近接し、12世紀後半代の遺構が確認されている。他方、中世城館としても認識され、その段階と見られる遺構も存在する。今回の調査では、12世紀後半代の遺物が出土する堀跡を切る溝跡が検出され、両者の年代等が注目されている。溝跡の時期を明確に示す遺物は出土していないが、製鉄等に関連すると見られる炉壁片などが出土し、年代測定の対象とする炭化物も製鉄に関連する可能性がある。

2 測定の意義

試料が出土した溝跡(9SD4)と、その溝跡に切られる堀跡(7SD1)の年代を検討する材料を得る。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表10に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要

がある。補正した値を表 10 に、補正していない値を参考値として表 11 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表 10、11 に示す。

試料の ^{14}C 年代は、No. 1 が $360 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 2 が $320 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 3 が $310 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、No. 1 が 1466 ~ 1620cal AD、No. 2 が 1521 ~ 1640cal AD、No. 3 が 1522 ~ 1642cal AD、の間に各々複数の範囲で示される。試料が出土した溝跡 (9SD4) は、12 世紀後半代の遺物が出土する堀跡より新しいことが確認されており、測定結果はこの遺構の重複関係に整合する。3 点とも近い年代を示し、特に No. 2 と No. 3 はほぼ同年代であるが、No. 1 は他の 2 点に比べて若干古い。ただし、確率の低い範囲を含めて 2σ 暦年代範囲で見ると、3 点とも重なる範囲がある。層位による違いは読み取れず、3 点の中で若干古い No. 1 は上層から出土している。

3 点の試料の年代値は近いものの、上層の試料が若干古いことについては、溝跡の機能時の状況や堆積、埋没過程等の様々な点を考慮する必要があるが、以下に記す古木効果が影響している可能性もある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる (古木効果)。今回測定された 3 点の試料には、いずれも樹皮が確認されていないことから、炭化物の本来の年代はここで示された値よりもいくらか新しい可能性がある。特に 3 点の中で若干古い値となった No. 1 については、この点も考慮する必要があると見られる。

試料の炭素含有率は、すべて 60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55 (4), 1869-1887
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363

表 10 放射性炭素年代測定結果 (δ¹³C 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ¹³ C (‰) (AMS)	δ ¹³ C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-161496	No.1	4 層最下部	炭化物	AAA	- 25.77 ± 0.29	360 ± 20	95.59 ± 0.27
IAAA-161497	No.2	5 層直上面	炭化物	AaA	- 22.97 ± 0.28	320 ± 20	96.12 ± 0.26
IAAA-161498	No.3	6 層焼粘土塊集中	炭化物	AaA	- 24.30 ± 0.26	310 ± 20	96.19 ± 0.27

[#8264]

表 11 放射性炭素年代測定結果 (δ¹³C 未補正值、暦年較正用¹⁴C年代、較正年代)

測定番号	δ ¹³ C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-161496	380 ± 20	95.43 ± 0.26	362 ± 22	1466calAD - 1521calAD (45.0%) 1592calAD - 1620calAD (23.2%)	1454calAD - 1525calAD (52.7%) 1558calAD - 1632calAD (42.7%)
IAAA-161497	280 ± 20	96.53 ± 0.26	317 ± 22	1521calAD - 1591calAD (53.4%) 1620calAD - 1640calAD (14.8%)	1491calAD - 1603calAD (74.9%) 1613calAD - 1645calAD (20.5%)
IAAA-161498	300 ± 20	96.33 ± 0.26	312 ± 22	1522calAD - 1575calAD (50.4%) 1585calAD - 1590calAD (3.6%) 1625calAD - 1642calAD (14.3%)	1493calAD - 1602calAD (74.2%) 1615calAD - 1646calAD (21.2%)

[参考値]

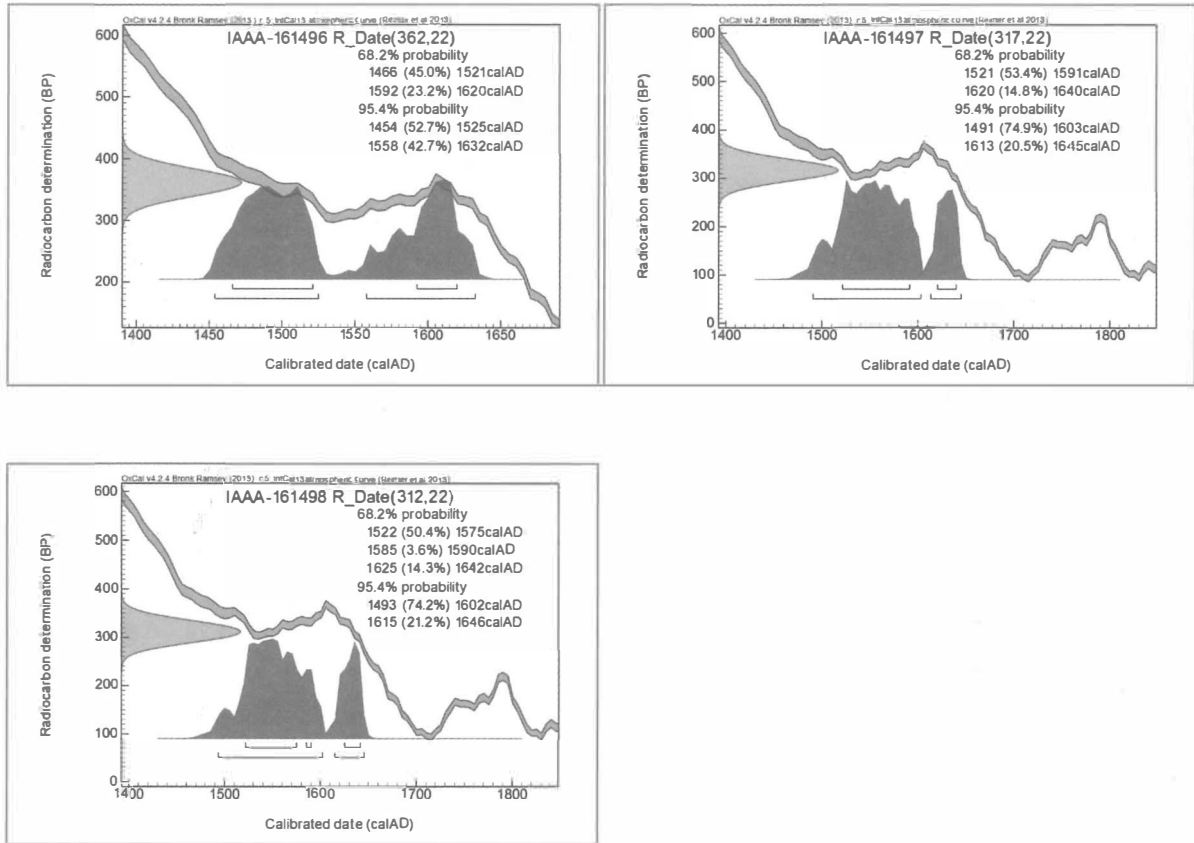


図 49 高館跡の暦年較正結果

参考引用文献

- 板橋源・佐々木博康 1966 「奥州平泉高館」『岩手大学教育学部研究年報』27 pp. 53-67
- 岩手県教育委員会 1986 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第 82 集
- 岩手県教育委員会 2016 『柳之御所遺跡―第 76 次発掘調査概報―』岩手県文化財調査報告書第 147 集
- 岩手県教育委員会 2017a 『柳之御所遺跡―第 77 次発掘調査概報―』岩手県文化財調査報告書第 150 集
- 岩手県教育委員会 2017b 「柳之御所遺跡」『奥州藤原氏が構想した理想世界』平成 28 年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会報告書 pp. 3-10
- 岩手県教育委員会 2017c 「柳之御所遺跡」『奥州藤原氏が構想した理想世界 資料集』pp. 7-36
- 岩手県教育委員会 2018a 『柳之御所遺跡―第 78・79 次発掘調査概報―』岩手県文化財調査報告書第 153 集
- 岩手県教育委員会 2018b 『柳之御所遺跡 堀内部地区内容確認調査』図版編 岩手県文化財調査報告書第 154 集
- 岩手県教育委員会 2019 『柳之御所遺跡 堀内部地区内容確認調査』本文編 岩手県文化財調査報告書第 155 集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 『柳之御所跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 228 集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008 『六日市場・細田・接待館遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 523 集
- 入間田宣夫 2003 『都市平泉の遺産』山川出版社
- 入間田宣夫（編）2007 『平泉・衣川と京都・福原』高志書院
- 五味文彦 2005 『義経記』山川出版社
- 斉藤利男 2014 『平泉 北方王国の夢』講談社選書メチエ
- 平泉町教育委員会 1989 『柳之御所跡発掘調査報告書―第 20・22 次発掘調査概報―』岩手県平泉町文化財調査報告書第 15 集
- 平泉町教育委員会 1990 『柳之御所跡発掘調査報告書―第 24 次・25 次調査概報―』岩手県平泉町文化財調査報告書第 19 集
- 平泉町教育委員会 1994 『柳之御所跡発掘調査報告書』岩手県平泉町文化財調査報告書第 38 集
- 平泉町教育委員会 1994 『平泉遺跡群範囲確認調査報告書―高館跡第 3 次・柳之御所遺跡第 44 次発掘調査―』岩手県平泉町文化財調査報告書第 39 集
- 平泉町教育委員会 2003 『平泉遺跡群発掘調査略報』岩手県平泉町文化財調査報告書第 81 集
- 平泉町教育委員会 2005 『平泉遺跡群発掘調査報告書』岩手県平泉町文化財調査報告書第 92 集
- 平泉町史編纂委員会 1985 『平泉町史 史料編一』
- 平泉町史編纂委員会 1988 『平泉町史 総説・論説編』
- 平泉町史編纂委員会 1993 『平泉町史 史料編二』
- 前川佳代 2015 『源義経と壇ノ浦』吉川弘文館
- 横手市教育委員会 2009 『大鳥井山遺跡―第 9 次・第 10 次・第 11 次調査―』横手市文化財調査報告書第 12 集
- 横手市教育委員会 2016 『金沢柵推定地 陣館遺跡』横手市文化財調査報告書第 38 集

表 12 - 1

高館第7次遺物観察表 かわらけ

掲載 番号	器種名	トレンチ名	遺構名	層位	口径	器高	底径	重量 (g)	色調	備考	登録 番号
1	ロクロ大	2 トレンチ	7SD1	最下層	-	(3.0)	(7.0)	120.1	5YR8/4 淡橙	海綿骨針・雲母含む、内面 すず付着、スノコ痕	ROk11
2	ロクロ	2 トレンチ	7SD1	15層	-	(2.9)	-	12.0	7.5YR8/4 淡黄橙	海綿骨針少し含む	ROk12
3	ロクロ底部	2 トレンチ	7SD1	14層 灰褐色	-	(2.0)	-	39.2	2.5Y7/3 浅黄	海綿骨針含む、摩滅著しい	ROk15
4	ロクロ大	2 トレンチ	7SD1	12層 砂混じり	(13.9)	4.0	7.5	155.3	10YR8/4 浅黄橙	海綿骨針含む、スノコ痕	ROk13
5	ロクロ大	2 トレンチ	7SD1	12層 砂混じり	-	(3.5)	-	17.7	10YR7/6 明黄褐	海綿骨針含む	ROk14
6	ロクロ底部	2 トレンチ	7SD1	11層 北端	-	(1.5)	-	41.7	5YR7/6 橙	海綿骨針含む、摩滅著しい	ROk16
7	手づくね大	2 トレンチ	7SD1	10層	(14.0)	2.8	-	22.5	10YR8/4 浅黄橙		ROk1
8	手づくね	2 トレンチ	7SD1	10層	-	(2.3)	-	15.2	2.5Y8/2 灰白		ROk2
9	手づくね	2 トレンチ	7SD1	10層	(13.1)	(2.4)	-	16.0	10YR8/3 浅黄橙		ROk4
10	手づくね	2 トレンチ	7SD1	10層	(9.9)	1.5	-	12.5	2.5Y6/1 黄灰		ROk5
11	手づくね	2 トレンチ	7SD1	10層	(8.1)	1.8	-	11.8	10YR8/4 浅黄橙		ROk3
12	手づくね大	2 トレンチ	7SD1	9層 暗褐色	(14.0)	2.6	-	67.1	2.5Y8/3 淡黄	胎土密 スノコ痕	ROk6
13	手づくね大	2 トレンチ	7SD1	9層 暗褐色	(13.6)	2.0	-	62.6	7.5YR8/3 浅黄橙	海綿骨針・金雲母含む、ス ノコ痕	ROk7
14	手づくね大	2 トレンチ	7SD1	9層 暗褐色	(12.4)	2.1	-	30.0	10YR7/2 にぶい黄橙	内面二次加熱による剥落?	ROk9
15	手づくね	2 トレンチ	7SD1	9層 暗褐色	-	(1.1)	-	19.2	10YR8/3 浅黄橙	内面漆? 付着	ROk8
16	手づくね	2 トレンチ	7SD1	9層 暗褐色	-	(1.9)	-	15.9	10YR8/3 浅黄橙	海綿骨針・金雲母含む	ROk10
17	手づくね	2 トレンチ	7SD1	8層 暗色砂	-	(2.2)	-	4.8	10YR8/3 浅黄橙	内面に漆? 付着	ROk17
18	手づくね大	2 トレンチ	7SD1	7層 北端 明黄褐色	(13.8)	3.1	-	60.2	10YR8/4 浅黄橙	雲母含む	ROk18
19	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	7層 北端 明黄褐色	(8.8)	1.5	-	23.4	10YR8/4 浅黄橙		ROk19
20	手づくね大	2 トレンチ	7SD1	6層 明褐色 地山混じり	(12.8)	2.2	-	47.1	10YR7/3 にぶい黄橙	海綿骨針・金雲母含む	ROk21
21	手づくね大	2 トレンチ	7SD1	6層 明褐色 地山混じり	(13.2)	2.5	-	25.8	10YR8/4 浅黄橙	雲母含む	ROk23
22	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	6層 明黄褐色 下方	(10.8)	1.9	-	15.9	10YR8/3 浅黄橙	金雲母含む	ROk20
23	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	6層 明褐色 地山混じり	(9.6)	1.6	-	29.2	10YR8/3 浅黄橙	雲母含む	ROk22
24	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	6層 明黄褐色	(8.6)	1.5	-	36.2	7.5YR7/6 橙	スノコ痕	ROk24
25	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	6層 明黄褐色	(8.8)	1.5	-	14.9	2.5Y8/2 灰白	雲母含む	ROk25
26	手づくね大	2 トレンチ	7SD1	5層下 暗褐色	(14.4)	3.3	-	73.8	10YR8/4 浅黄橙	雲母含む	ROk26
27	手づくね大	2 トレンチ	7SD1	5層下 南	(15.4)	3.6	-	196.1	10YR8/4 浅黄橙	海綿骨針・雲母含む	ROk32
28	手づくね大	2 トレンチ	7SD1	5層 北 暗褐色	(12.4)	2.5	-	29.6	10YR8/3 浅黄橙	雲母含む	ROk35
29	手づくね大	2 トレンチ	7SD1	5層 北 暗褐色	(13.2)	2.5	-	23.1	10YR8/3 浅黄橙		ROk37
30	手づくね大	2 トレンチ	7SD1	5層 南 暗褐色	(13.4)	2.8	-	23.8	10YR8/3 浅黄橙	海綿骨針含む、スノコ痕	ROk38
31	手づくね大	2 トレンチ	7SD1	5層 南 暗褐色	(13.0)	2.6	-	21.5	10YR8/3 浅黄橙	海綿骨針・金雲母含む	ROk39
32	手づくね	2 トレンチ	7SD1	5層下 北	(13.0)	2.1	-	16.0	10YR8/3 浅黄橙		ROk34
33	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	5層下 北	(9.4)	2.1	-	27.8	10YR8/3 浅黄橙	海綿骨針含む	ROk33
34	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	5層下 暗褐色	(8.2)	1.8	-	20.2	7.5YR8/4 淡黄橙	雲母含む	ROk30
35	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	5層 北 暗褐色	(9.8)	1.7	-	12.2	10YR8/2 灰白	雲母含む	ROk36
36	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	5層下 暗褐色	(9.2)	1.9	-	22.1	10YR8/3 浅黄橙	雲母含む	ROk31
37	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	5層下 暗褐色	(8.8)	1.9	-	39.9	10YR8/3 浅黄橙		ROk28
38	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	5層下 暗褐色	8.4	1.6	-	42.1	10YR8/4 浅黄橙	完形、金雲母含む	ROk27
39	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	5層下 暗褐色	(8.6)	1.7	-	34.9	10YR8/3 浅黄橙		ROk29
40	ロクロ小	2 トレンチ	7SD1	4層	(8.2)	2.1	(6.2)	18.2	7.5YR7/4 にぶい橙	海綿骨針含む	ROk40
41	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	3層 黒色	(9.2)	1.8	-	30.7	10YR7/4 にぶい黄橙	海綿骨針含む	ROk42
42	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	3層 黒色	(8.4)	1.9	-	19.1	2.5Y8/3 淡黄	雲母含む	ROk43
43	手づくね小	2 トレンチ	7SD1	2層	(9.0)	1.9	-	32.7	2.5Y7/3 浅黄	金雲母含む、スノコ痕	ROk41

表 12 - 2

高館第 10 次遺物観察表 かわらけ

掲載番号	器種名	トレンチ名	遺構名	層位	口径	器高	底径	重量 (g)	色調	備考	登録番号
150	手づくね 大	1 トレンチ	10SX1	床面付近	14.8	3.3	-	187.6	2.5YR8/3 淡黄色	海綿骨針・金雲母含む	ROk1
151	手づくね 大	1 トレンチ	10SX1	床面付近	13.2	2.7	-	81.1	2.5YR8/4 淡黄色	内面寸付着、海綿骨針・金雲母含む	ROk2
152	手づくね 大	1 トレンチ	10SX1	床面付近	11.8	2.8	-	63.6	2.5YR7/3 浅黄色	海綿骨針・金雲母含む	ROk8
153	手づくね 大	1 トレンチ	10SX1	床面付近	13.3	2.2	-	53.7	10YR8/4 浅黄褐色	雲母含む	ROk4
154	ロクロ大	1 トレンチ	10SX1	床面付近	12.5	3.7	(6.3)	64.2	10YR8/6 黄褐色	海綿骨針・雲母含む、スノコ痕?	ROk3
155	ロクロ大	1 トレンチ	-	-	-	-	(7.6)	10YR7/6 明黄褐色	雲母含む、摩滅著しい	ROk7	
156	手づくね 小	1 トレンチ	10SX1	床面付近	7.8	1.5	-	24.7	2.5YR8/3 淡黄色	海綿骨針含む、スノコ痕	ROk9
157	手づくね 小	1 トレンチ	-	表土	9.7	1.4	-	28.6	10YR8/4 浅黄褐色	海綿骨針・雲母含む	ROk5
158	手づくね 小	1 トレンチ	-	表土	7.8	1.5	-	24.9	2.5YR8/4 淡黄色		ROk6

高館第 7 次遺物観察表 陶磁器

掲載番号	種別 (産地)	器種名	部位	トレンチ名	遺構名	層位	重量 (g)	色調	備考	登録番号
44	渥美	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	14 層 灰褐色	282.4	表: 5Y5/1 灰 裏: 5Y6/1 灰	ROt38 と接合	ROt37
45	須恵器	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	14 層 灰褐色	31.0	表: 2.5Y3/1 黒褐 裏: N5/ 灰		ROt40
46	渥美か	甕	底~体部	2 トレンチ	7SD1	14 層 灰褐色	693.6	5Y6/1 灰		ROt39
47	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	12 層 砂混じり	27.9	表: 7.5Y5/2 灰オリーブ (軸) 裏: 10YR3/2 黒褐		ROt33
48	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	12 層 砂混じり	78.9	表: 10YR3/1 オリーブ黒 裏: N5/ 灰		ROt35
49	渥美	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	12 層 砂混じり	40.3	表: 5Y5/1 灰 裏: 10YR4/3 にぶい黄褐		ROt36
50	渥美	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	12 層 砂混じり	110.1	表: N3/ 暗灰 裏: N4/ 灰	35 と同一個体 共に内面に煤付着	ROt34
51	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	10 層	34.6	表: 7.5Y5/2 灰オリーブ (軸) 裏: 10YR5/3 にぶい黄褐		ROt32
52	須恵器	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	9 層 暗褐色	45.7	表: 10YR3/2 黒褐 裏: N5/ 灰		ROt31
53	常滑	壺	体部	2 トレンチ	7SD1	4 層 黄褐色	45.1	表: 5Y5/4 オリーブ 裏: 10YR5/3 にぶい黄褐	ROt24.30 と接合	ROt16
53	常滑	壺	体部	2 トレンチ	7SD1	5 層下 北	89.0	表: 5Y5/4 オリーブ 裏: 10YR5/3 にぶい黄褐	渥美か ROt16.30 と接合	ROt24
53	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	9 層 暗褐色	66.4	表: 5Y5/4 オリーブ 裏: 10YR5/3 にぶい黄褐	ROt16.24 と接合	ROt30
54	常滑	壺	口縁部	2 トレンチ	7SD1	6 層下層 明褐色	23.1	表: 5Y4/4 暗オリーブ 裏: 7.5YR4/4 褐		ROt28
55	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	6 層 明黄褐色	13.9	表: 5Y5/3 灰オリーブ (軸) 裏: 10YR5/3 にぶい黄褐		ROt27
56	須恵器	瓶	体部	2 トレンチ	7SD1	6 層 明褐色 地山混じり	26.2	2.5Y6/1 黄灰	9 世紀か	ROt29
57	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	5 層 南 暗褐色	157.6	表: 7.5YR5/3 にぶい褐 裏: 7.5YR6/2 灰褐	ROt25 と接合	ROt22
58	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	5 層下 北	29.8	表: 7.5Y6/2 灰オリーブ (軸) 裏: 7.5YR4/2 灰褐		ROt26
59	渥美	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	5 層 南 暗褐色	72.2	表: 5Y5/3 灰オリーブ (軸) 裏: 2.5Y7/2 灰黄		ROt21
60	渥美か	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	5 層下 北	140.4	表: 2.5Y7/3 浅黄 裏: 2.5Y6/1 黄灰		ROt23
61	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	4 層 黄褐色	40.5	表: 10YR4/2 灰黄褐 裏: 2.5Y6/2 灰黄		ROt15
62	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	4 層 黄褐色	51.0	表: 7.5YR3/3 暗褐 裏: 10YR5/4 にぶい黄褐		ROt14
63	常滑系	壺	体部	2 トレンチ	7SD1	4 層	23.9	表: 7.5YR4/4 褐 裏: 2.5Y7/1 灰白	中国陶器に似る	ROt17
64	渥美	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	4 層 黄褐色	64.0	5Y6/1 灰		ROt18
65	渥美	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	4 層	83.8	2.5Y5/1 黄灰		ROt20
66	渥美	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	4 層	104.9	表: 5Y6/1 灰 裏: 2.5Y6/1 黄灰		ROt19

表 12 - 3

掲載 番号	種別 (産地)	器種名	部位	トレンチ名	造構名	層位	重量 (g)	色調	備考	登録番号
67	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	3層 黒色	117.6	表: 7.5YR4/3 褐 裏: 10YR5/4 にぶい黄褐		R0t9
68	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	3層 黒色	15.8	表: 10YR3/2 黒褐 裏: 2.5Y6/1 黄灰		R0t11
69	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	3層 黒色	15.0	表: 7.5YR4/2 灰褐 裏: 2.5Y6/2 灰黄		R0t10
70	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	3層 黒色	20.9	表: 7.5YR4/2 灰褐 裏: 10YR4/4 褐		R0t8
71	渥美	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	3層 黒色	88.7	表: 2.5YR4/1 黄灰 裏: 2.5Y5/1 黄灰		R0t12
72	渥美	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	3層	37.9	2.5Y5/1	タタキ、内面に墨痕	R0t13
73	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	2層 暗褐色	6.7	表: 10YR5/4 にぶい黄褐 裏: 2.5Y5/4 黄褐		R0t3
74	渥美	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	2層	48.4	表: 5Y8/2 灰白 裏: 5Y6/1 灰		R0t6
75	渥美	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	2層 明黄褐色	230.3	表: 2.5Y5/2 暗灰黄 裏: 2.5Y5/1 黄灰		R0t5
76	渥美	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	2層 黄褐色	13.4	表: 7.5YR4/2 灰褐 裏: 10YR4/2 灰黄褐		R0t4
77	須恵器	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	2層 褐色	22.8	表: 7.5Y5/1 灰 裏: 7.5Y4/1 灰		R0t7
78	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	1層	20.7	表: 2.5Y5/1 黄灰 裏: 2.5Y6/2 灰黄		R0t2
79	常滑	甕	体部	2 トレンチ	7SD1	1層	16.5	表: 7.5YR4/3 褐 裏: 2.5Y5/2 暗灰黄		R0t1
80	白磁	四耳壺か	高台部	2 トレンチ	7SD1	9層 暗褐色	20.9	釉: 2.5GY8/1 灰白 胎土: 5Y7/2 灰白		R0g7
81	白磁	四耳壺か	体部	2 トレンチ	7SD1	5層 北 暗褐色	2.5	2.5GY8/1 灰白		R0g6
82	白磁	四耳壺か	肩部か	2 トレンチ	7SD1	5層 北 暗褐色	7.6	10Y7/1 灰白		R0g5
83	白磁	四耳壺か	頸~肩部	2 トレンチ	7SD1	4層	7.5	7.5Y7/2 灰白		R0g4
84	白磁	四耳壺か	底部	2 トレンチ	7SD1	2層	17.9	胎土: N8/ 灰白		R0g3
85	白磁	四耳壺か	体部	2 トレンチ	7SD1	II層 褐色	8.2	2.5GY8/1 灰白		R0g2
86	青磁	碗	口縁部	2 トレンチ	7SD1	I層 表土	2.9	5Y6/2 灰オリーブ		R0g1
87	常滑	甕	体部	3 トレンチ	-	3層灰褐色崩落土	13.5	表: 2.5Y5/1 黄灰 裏: 10YR4/3 にぶい褐		R0t45
88	渥美	甕	体部	3 トレンチ	-	3層灰褐色崩落土	92.4	表: 5Y4/1 灰 裏: 2.5Y6/1 黄灰 釉: 7.5Y6/2 灰オリーブ		R0t46
89	須恵器系	甕	体部	3 トレンチ	-	3層灰褐色崩落土	71.1	表: 2.5Y7/2 灰黄 裏: 2.5Y7/1 灰白		R0t47
90	常滑	甕	体部	3 トレンチ	-	II層	23.5	表: 7.5YR4/3 褐 裏: 2.5Y5/4 黄褐 釉: 7.5Y5/3 灰オリーブ		R0t41
91	常滑	甕	体部	3 トレンチ	-	II層	12.4	表・裏: 7.5YR4/4 褐		R0t42
92	渥美	甕	体部	3 トレンチ	-	II層	54.0	表: 2.5Y6/1 黄灰 裏: 2.5Y5/1 黄灰		R0t44
93	渥美	甕	体部	3 トレンチ	-	II層	149.7	表: 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 裏: 2.5Y5/2 暗灰黄		R0t43
94	常滑	甕	体部	4 トレンチ	-	I層	17.3	表: 10YR4/2 灰黄褐 裏: 10YR5/3 にぶい黄褐		R0t48
95	常滑	甕	頸部	4 トレンチ	-	I層	73.7	表: 7.5YR5/2 灰褐 裏: 7.5YR4/2 灰褐 釉: 7.5Y5/3		R0t49
96	常滑か	甕	体部	4 トレンチ	-	I層	47.4	表: 2.5Y7/1 灰白 裏: 2.5Y5/1 黄灰	須恵器か	R0t51
97	渥美	甕	体部	4 トレンチ	-	I層	37.3	表: 5Y5/1 灰 裏: 2.5Y6/2 灰黄		R0t50
98	須恵器	瓶?	体部	4 トレンチ	-	I層	37.6	表: 2.5Y4/2 暗灰黄 裏: 2.5Y5/2 暗灰黄		R0t52
99	渥美	甕	口~頸部	4・5 トレンチ	-	不明	190.9	表: 2.5Y5/1 黄灰 裏: 2.5Y6/1 黄灰 釉: 2.5GY5/1 オリーブ灰		R0t61
100	常滑	甕	体部	5 トレンチ	-	II層	32.3	表: 7.5YR4/2 灰褐 裏: 7.5YR4/3 褐		R0t56
101	常滑	甕	体部	5 トレンチ	-	I層	29.2	表: 10YR4/2 灰黄褐 裏: 2.5Y5/3 黄褐		R0t53

表 12 - 4

掲載番号	種別(産地)	器種名	部位	トレンチ名	遺構名	層位	重量(g)	色調	備考	登録番号
102	常滑	甕	体部	5 トレンチ	-	表土	21.4	表: 2.5Y5/1 黄灰 裏: 2.5Y6/1 黄灰		R0t55
103	渥美	甕	体部	5 トレンチ	-	表土	52.8	表: 2.5Y7/1 灰白 裏: 2.5Y7/2 灰黄		R0t54
104	渥美	鉢	体部	5 トレンチ	-	表土	32.8	表: 2.5Y6/1 黄灰 裏: 2.5Y5/1 黄灰	57 と同一個体か	R0t58
105	渥美	鉢	体部	5 トレンチ	-	表土	24.7	表: 2.5Y6/3 にぶい黄 裏: 2.5Y6/2 灰黄	細片 2 も同一個体	R0t59
106	渥美	甕	体部	5 トレンチ	-	表土	30.0	表: 2.5Y6/2 灰黄 裏: 2.5Y7/1 灰白		R0t60
107	渥美	鉢	体部	5 トレンチ	-	-	21.7	表・裏: 5Y5/1 灰	58 と同一個体か	R0t57
108	渥美	甕	体部	-	-	-	31.0	表: 2.5Y6/2 灰黄 裏: 2.5Y5/1 黄灰		R0t63
109	不明	山茶碗	口~体部	-	-	-	21.2	表: 2.5Y4/1 黄灰 裏: 2.5Y5/1 黄灰		R0t62

高館第8次遺物観察表 国産陶器

掲載番号	種別(産地)	器種名	部位	トレンチ名	遺構名	層位	重量(g)	色調	備考	登録番号
110	常滑	甕	体部	2 トレンチ	8SD1	崩落土(地山)	22.6	表: 10YR4/2 灰黄褐 裏: 2.5Y5/3 黄褐		R0t9
111	常滑	甕	体部	2 トレンチ	8SD1	崩落土(地山)	187.0	表: 5Y6/1 灰 裏: 5Y7/2 灰白		R0t12
112	渥美	甕	口縁部	2 トレンチ	8SD1	崩落土(地山)	66.9	表: 2.5Y4/1 黄灰 裏: 5Y7/1 灰白		R0t10
113	渥美	甕	体部	2 トレンチ	8SD1	崩落土(地山)	54.5	表: 10YR5/1 褐灰 裏: 5Y7/2 灰白		R0t11
114	常滑	甕	体部	2 トレンチ	-	表土	22.8	表: 7.5YR4/2 灰褐 裏: 7.5YR5/2 灰褐	押印	R0t3
115	常滑	甕	体部	2 トレンチ	-	表土	67.6	表: 10YR4/3 褐 裏: 10YR5/3 にぶい黄褐		R0t16
116	常滑	甕	体部	1 トレンチ	-	表土	20.5	表: 2.5Y6/3 にぶい黄 裏: 10YR4/2 灰黄褐		R0t2
117	常滑か	甕か	体部	1 トレンチ	-	表土	7.1	表: 2.5Y5/2 暗灰黄 裏: 2.5Y6/3 にぶい黄		R0t1
118	常滑か	甕	体部	1 トレンチ	-	表土	13.6	5Y5/2 灰オリーブ		R0t8
119	常滑か	甕	体部	1 トレンチ	-	表土	93.7	2.5Y6/3 にぶい黄		R0t15
120	常滑か	甕	体部	1 トレンチ	-	表土	23.2	5Y6/2 灰オリーブ		R0t13
121	常滑か	甕	頸~肩部	1 トレンチ	-	表土	117.9	2.5Y6/3 にぶい黄		R0t14
122	常滑か	甕	体部	1 トレンチ	-	表土	42.9	2.5Y5/3 黄褐		R0t6
123	常滑か	甕	体部	1 トレンチ	-	表土	24.8	2.5Y6/2 灰黄		R0t7
124	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	表土	52.9	2.5Y5/2 暗灰黄	押印	R0t4
125	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	表土	56.7	7.5Y6/1 灰		R0t5

高館第9次遺物観察表 国産陶器

掲載番号	種別(産地)	器種名	部位	トレンチ名	遺構名	層位	重量(g)	色調	備考	登録番号
126	常滑	甕	体部	1 トレンチ	-	上層 暗褐色ブロック混じり	40.4	表: 5Y5/3 灰オリーブ 裏: 2.5Y3/2 黒褐		R0t4
127	渥美	甕	肩~体部	1 トレンチ	-	表土	67.6	表: N4/ 灰 裏: N5/ 灰		R0t1
128	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	表土	8.0	表: 7.5Y3/ オリーブ黒 裏: 5Y5/3 灰オリーブ		R0t2
129	渥美	甕	体部	1 トレンチ(拡張)	-	表土	15.8	表: N4/ 灰 裏: N5/ 灰		R0t3
130	常滑	甕	体部	3 トレンチ	-	表土	26.5	表: 2.5Y3/2 黒褐 裏: 2.5Y4/1 黄灰		R0t9
131	常滑	甕	体部	3 トレンチ	-	表土	32.4	表: 2.5Y5/2 暗灰黄 裏: 2.5Y6/2 灰黄		R0t10
132	常滑	鉢類	口縁部	3 トレンチ	-	斜面際	102.8	表: 10YR3/2 黒褐 裏: 2.5Y5/1 黄灰		R0t18
133	常滑	甕	体部	3 トレンチ	-	斜面際 カクラン	76.3	表: 7.5YR4/2 灰褐 裏: 10YR4/2 灰褐	押印	R0t16

表 12 - 5

掲載番号	種別(産地)	器種名	部位	トレンチ名	遺構名	層位	重量(g)	色調	備考	登録番号
134	常滑	甕	体部	3 トレンチ	-	表土	24.8	表: 7.5YR4/4 褐 裏: 胎土 2.5Y6/3 にぶい黄 釉: 5Y5/3 灰オリーブ		ROt12
135	常滑	甕	体部	3 トレンチ	-	堀以南 検出面~ 堀最上部	21.9	表: 2.5Y6/3 にぶい黄 裏: 2.5Y4/2 暗灰黄		ROt19
136	常滑か	鉢類	体部	3 トレンチ	-	表土	12.8	表: 2.5Y4/1 黄灰 裏: 2.5Y5/2 暗灰黄		ROt5
137	渥美	甕	体部	3 トレンチ	-	表土	87.4	表: 2.5Y4/2 暗灰黄 裏: 2.5Y4/1 黄灰	ROt17 と接合	ROt13
138	渥美	甕	頸部	3 トレンチ	-	表土	56.4	表: 5Y4/1 灰 裏: 5Y5/1 灰	押印	ROt7
139	渥美	甕	頸部	3 トレンチ	-	表土	44.4	N4/ 灰		ROt6
140	渥美	甕	体部	3 トレンチ	-	斜面際 カクラン	38.0	2.5Y6/2 灰黄	押印	ROt15
141	須恵器系	甕	体部	3 トレンチ	-	斜面際 カクラン	47.2	表: 5Y5/1 灰 裏: 5Y6/1 灰	叩打痕	ROt14
142	須恵器系	甕	体部	3 トレンチ	-	表土	19.3	表: 5Y5/1 灰 裏: N4/ 灰	内外面叩打痕	ROt11
143	須恵器系	甕	体部	3 トレンチ	7SD1	堀 検出面	8.8	表: 5Y6/2 灰オリーブ 裏: 2.5Y7/2 灰黄	内外面叩打痕	ROt20
144	須恵器系	甕	体部	3 トレンチ	-	表土	13.8	表: N4/ 灰 裏: 5Y4/1 灰		ROt8
145	水沼?	甕	?	3 トレンチ	7SD1	堀 埋土最上部 暗褐色砂質土	8.1	表: 2.5Y6/2 灰黄 裏: 2.5Y3/1 黒褐		ROt21
146	常滑	甕	口縁部	4 トレンチ	9SX1	最下層~低直	10.3	表: 2.5Y5/3 黄褐 裏: 2.5Y4/1 黄灰		ROt24
147	常滑	甕	体部	4 トレンチ	-	暗褐色土	49.8	表: 10YR4/4 褐 裏: 2.5Y5/2 暗灰黄		ROt23
148	渥美	甕	体部	4 トレンチ	-	暗褐色土	72.7	表: 5Y5/2 灰オリーブ 裏: 5Y6/1 灰	押印	ROt22

高館第 10 次遺物観察表 国産陶器

掲載番号	種別(産地)	器種名	部位	トレンチ名	遺構名	層位	重量(g)	色調	備考	登録番号
159	常滑	甕	体部	3 トレンチ	10SD2	-	16.4	表: 7.5YR2/2 黒褐 裏: 7.5YR5/6 明褐		ROt64
160	常滑	片口か	体部	3 トレンチ	10SD2	-	7.2	表: 7.5YR3/2 黒褐 裏: 2.5YR5/4 黄褐		ROt65
161	常滑	甕	体部	3 トレンチ	10SD2	-	36.7	表: 7.5YR3/1 黒褐 裏: 10YR4/2. 灰黄褐	押印	ROt63
162	渥美か	片口か	体部	1 トレンチ	北端平 場(堅 穴状?)	埋土一括	22.2	表: 2.5Y6/2 灰黄 裏: 2.5Y7/2 灰黄		ROt55
163	常滑	甕	肩部	1 トレンチ	-	検出面	50.2	表: 2.5Y4/4 オリーブ褐 裏: 10YR3/2 黒褐		ROt8
164	常滑	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	49.6	表: 2.5Y4/2. 灰赤 裏: N4/0 灰	ROt20. 36. 37 と接合	ROt7
165	常滑	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	22.8	表: 2.5Y2/1 黒 裏: 7.5YR4/1 褐灰	ROt38 と接合	ROt10
166	常滑	甕	肩部	1 トレンチ	-	検出面	53.3	表: 5YR3/1 黒褐 裏: 10YR3/2. 黒褐	2 片接合	ROt16
167	常滑	甕	肩~体部	1 トレンチ	-	検出面	86.4	表: 10YR4/1 褐灰 裏: 10YR5/2 灰黄褐	押印 3 片接合 ROt60 と接合	ROt35
168	常滑	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	89.8	表: 2.5YR4/6 オリーブ褐 裏: 5YR4/3 にぶい赤褐	7 片接合	ROt51
169	常滑	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	32.5	表: 2.5Y6/3 にぶい黄 裏: 10YR3/1 黒褐	2 片接合	ROt39
170	常滑	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	18.6	表: 2.5YR4/2 灰 裏: 10YR4/1 褐灰		ROt40
171	常滑	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	96.3	表: 10YR4/3 赤褐 裏: 10YR4/1 褐灰	押印 3 片接合 ROt47 と接合	ROt44
172	常滑か	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	42.3	表: N5/0 灰 裏: N4/0 灰	ROt41. 43 と接合	ROt5
173	常滑か	片口	口縁~ 体部	1 トレンチ	-	検出面	68.8	表: N5/0 灰 裏: 2.5Y6/1 黄灰	ROt52 と接合	ROt21
174	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	59.3	表: 10BG5/1 青灰 裏: N5/0 灰	ROt14. 46 と接合	ROt4
175	渥美	甕	頭~肩部	1 トレンチ	-	検出面	93.7	表: 2.5Y6/3 にぶい黄 裏: 2.5Y7/1 灰白	ROt3. 15. 19. 34. 53 と接合	ROt1
176	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	59.4	表: 2.5Y6/2 灰黄 裏: 2.5Y7/1 灰白	ROt48 と接合	ROt2

表 12 - 6

掲載番号	種別 (産地)	器種名	部位	トレンチ名	遺構名	層位	重量 (g)	色調	備考	登録番号
177	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	212.2	表: 10YR6/1 褐灰 裏: 10YR7/1 灰白	押印 2片接合	R0t18
178	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	739.5	表: N3/0 暗灰 裏: 5P6/1 紫灰	押印 3片接合 R0t45 と接合	R0t28
179	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	6.9	表: 2.5Y5/1 黄灰 裏: 5P6/1 紫灰	押印 R0t22.61 と接合	R0t13
180	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	142.7	表: 5Y7/1 灰白 裏: N6/1 灰	押印 R0t62 と接合	R0t17
181	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	542.6	表: N6/0 灰 裏: 5P6/1 紫灰	押印 3片接合 R0t32.42 と接合	R0t30
182	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	528.6	表: 5Y3/1 オリーブ灰 裏: 2.5Y6/1 黄灰	押印	R0t50
183	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	52.5	表: N3/0 暗灰 裏: 5PB5/1 青灰	押印	R0t6
184	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	29.3	表: 2.5Y4/1 黄灰 裏: 5PB5/1 青灰	押印	R0t9
185	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	339.3	表: 2.5Y5/1 黄灰 裏: N5/0 灰	押印	R0t49
186	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	293.2	表: N4/0 灰 裏: N5/0 灰	2片接合	R0t27
187	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	343.1	表: 2.5GY6/1 オリーブ灰 裏: N6/0 灰	2片接合 R0t24.33 と接合	R0t23
188	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	426.4	表: 5P5 /1 紫灰 裏: 5PB5-1/ 青灰	押印 2片接合	R0t29
189	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	248.5	表: N2/0 黒 裏: N5/0 灰		R0t26
190	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	162.6	表: 2.5G Y 7/1 明オリーブ灰 裏: N6/0 灰		R0t25
191	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	11.3	表: 2.5Y6/1 黄灰 裏: 10YR6/1 褐灰	押印	R0t11
192	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	検出面	13.4	表: N4/0 灰 裏: 5PB5/1 青灰		R0t12
193	渥美	甕	口縁部	1 トレンチ	-	検出面	35.0	表: N4/1 灰 裏: 7.5Y7/2 灰白		R0t31
194	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	一括	29.5	表: 2.5YR6/2 灰黄 裏: 10YR6/2 灰黄		R0t54
195	常滑	甕	体部	1 トレンチ	-		45.1	表: 2.5YR7. /3 浅黄 裏: 10YR3/2 黒褐		R0t59
196	常滑	甕	体部	1 トレンチ	-	表土	63.3	表: 2.5YR4/3 オリーブ褐 裏: 5YR2/1 黒褐	2片接合	R0t57
197	渥美	甕	体部	1 トレンチ	-	表土	39.0	表: 2.5Y6/1 黄灰 裏: 2.5Y7 / 2 灰黄		R0t56
198	渥美	甕	頸~肩部	1 トレンチ	-		105.9	表: 5P6/1 紫灰 裏: 5Y5/1 灰		R0t58

高館第9次遺物観察表 羽口

掲載番号	種別	器種名	部位	トレンチ名	遺構名	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	色調	登録番号
149 a	土製品	羽口	先端部	4 トレンチ	9SX1	最下層~床直	(13.3)	11.9	20.2	553.0	胎土: 5YR7/6 橙 鉄滓: N4/ 灰	RP1
149 b	土製品	羽口	基部	4 トレンチ	9SX1	最下層~床直	(9.1)	(9.9)	1.2	126.3	胎土: 7.5YR8/6 浅黄橙 鉄滓: 10R3/1 暗赤灰	RP2

写 真 图 版



遺跡遠景（南→）



遺跡遠景（東→）

写真図版1 高館跡遠景写真



2トレンチ 7SD1断面A-A' (東→)



2トレンチ 7SD1断面B-B' (西→)

写真図版2 第7次調査 遺構写真(1)



2トレンチ 7SD1断面A-A' (南東→)



2トレンチ 整地断面 (南東→)



1トレンチ 7SD1確認 (東→)



2トレンチ 7SD1東断面 (北西→)



3 トレンチ (東→)



5 トレンチ (南東→)



(左) 5 トレンチ検出状況 (東→)
(右上) 3 トレンチ脇断面 (北西→)
(右下) 4 トレンチ (東→)

写真図版 4 第7次調査 遺構写真 (3)



1 トレンチ 調査区全景 (南東→)



1 トレンチ 調査区全景 (南東→)



1 トレンチ 調査区全景 (北東→)



1 トレンチ 調査区全景 (南西→)



2トレンチ 調査区全景 (南→)



2トレンチ 調査区全景 (南西→)

写真図版6 第8次調査 遺構写真(2)



2トレンチ 8SD1断面A-A' (東南→)



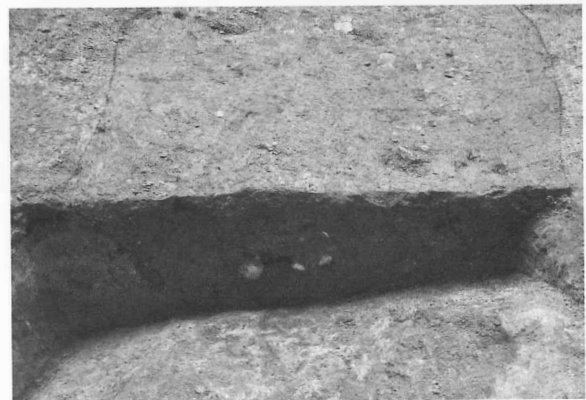
2トレンチ 8SD1検出状況 (東→)



2トレンチ8SD1・8SD2断面 (北→)



2トレンチ 8SD1断面・周辺状況 (南東→)



2トレンチ 8SD2断面 (北→)

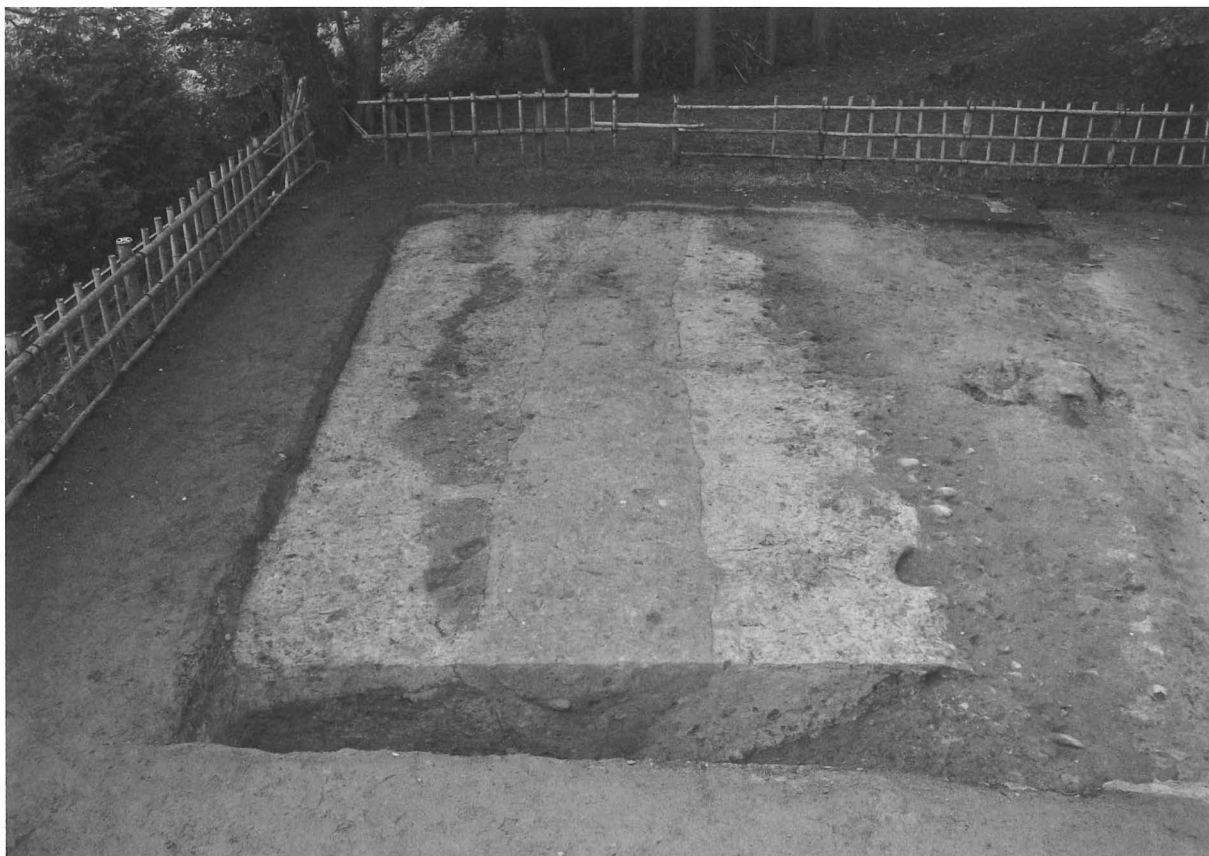


1トレンチ 調査区全景 (南東→)



1トレンチ 調査区全景 (東→)

写真図版8 第9次調査 遺構写真(1)



1 トレンチ 9SD2・整地層 (東→)



1 トレンチ 9SD2・整地層 B-B' 南端 (北東→)



1 トレンチ 9 SD3 断面 (南西→)



1 トレンチ 8 SD1・9 SD2の検出面 (南→)



1 トレンチ 9 SD3 北西部トレンチ (南→)



1 トレンチ 9 SD3 検出 (東→)



1 トレンチ 9 SD3 断面 北西部トレンチ (南→)

写真図版 10 第9次調査 遺構写真 (3)



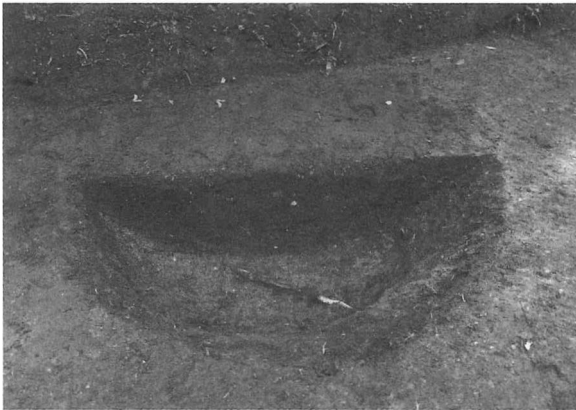
2・3トレンチ 検出面 (北東→)



2・3トレンチ 検出面 (南東→)



2・3トレンチ 東側断面C-C' (西→)



2・3トレンチ 9SK1 (北東→)



2・3トレンチ 9SK2 (北東→)



4 トレンチ 近景 (南東→)



4 トレンチ 近景 (塹堀様凹地, 南→)



4 トレンチ 9 SD 4 新期堀跡 断面C 1-C 2 東半 (南東→)



4 トレンチ 9 SD 4 新期堀跡 断面D 1-D 2 東半 (西→)

写真図版 14 第9次調査 遺構写真 (7)



4トレンチ全景 断面B1-B3 (南→)



4トレンチ 焼粘土塊・焼土を伴う土坑 (東→)



4トレンチ 竪穴状性格不明遺構 (西→)



4トレンチ 断面B2-B3 (東→)



4トレンチ 土塁状高まり 断面C1-C2西部 (南→)



4トレンチ 作業風景



5 トレンチ 7 SD1 古期堀跡 断面A1-A2 (南西→)



5 トレンチ A1-A2 トレンチ全景 (南→)



5 トレンチ 7 SD1 古期堀跡 断面A3-A4 北半 (南西→)



5 トレンチ 7 SD1 古期堀跡 断面A3-A4 南半 (南西→)

写真図版 16 第9次調査 遺構写真 (9)



1 トレンチ 遠景 (南東→)



1 トレンチ 遠景 (西→)



1 トレンチ 断面D1-D2 溝跡YG24SD4 (南→)



1 トレンチ 溝跡YG24SD4 全景 (南→)



1 トレンチ 溝跡YG24SD4 断面 (南→)

写真図版 18 第 10 次調査 遺構写真 (2)



1 トレンチ 10SX1 平場遺構 断面A1-A2 (東→)



1 トレンチ 10SX1 平場遺構 遺物出土状況 (南→)



1 トレンチ 断面A1-A2 中央付近 (東→)



1 トレンチ 焼土土坑 (西→)



1 トレンチ 10SX1 平場遺構 断面B2-B3付近 (東→)



1 トレンチ 10SX1 平場遺構 断面B2-B3付近 (南→)



1 トレンチ 10SX1 平場遺構 床面の状況 (東→)



1 トレンチ 10SX1 平断面B1-B2付近 (東→)

写真図版 20 第10次調査 遺構写真 (4)



1トレンチ 焼土土坑10SX3・10SX4 検出状況(南西→)



焼土土坑10SX3・10SX4近景(南→)



1トレンチ 断面C1-C2(西→)



1トレンチ 東部 検出状況(東→)



2トレンチ (北東→)



2トレンチ (南→)



3 トレンチ周辺 (東→)



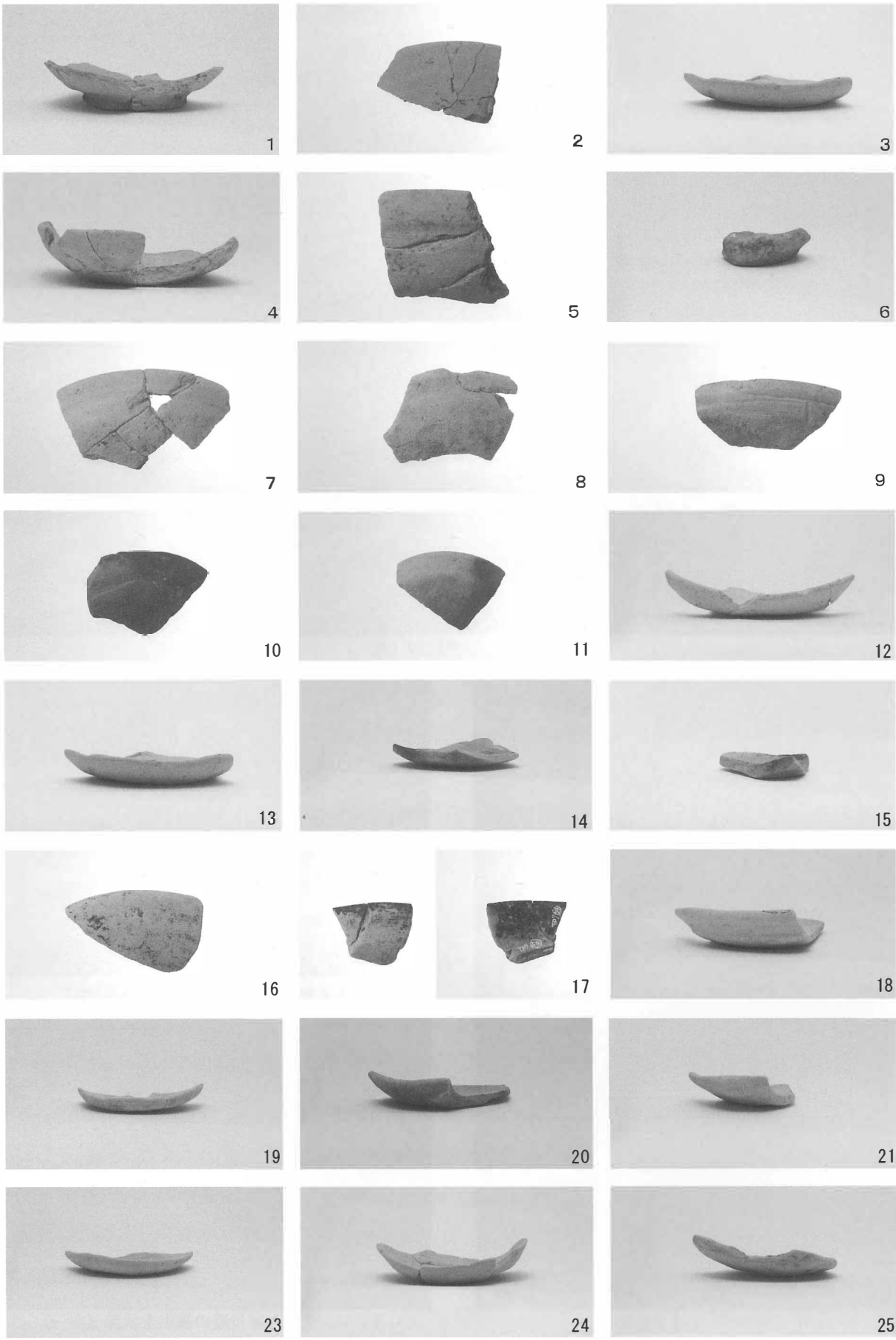
3 トレンチ 全景 (北東→)



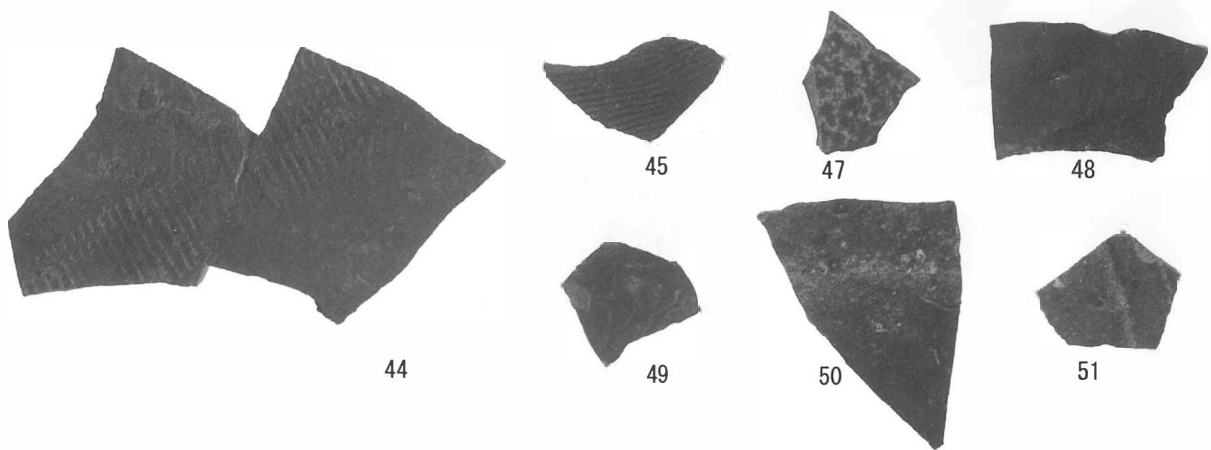
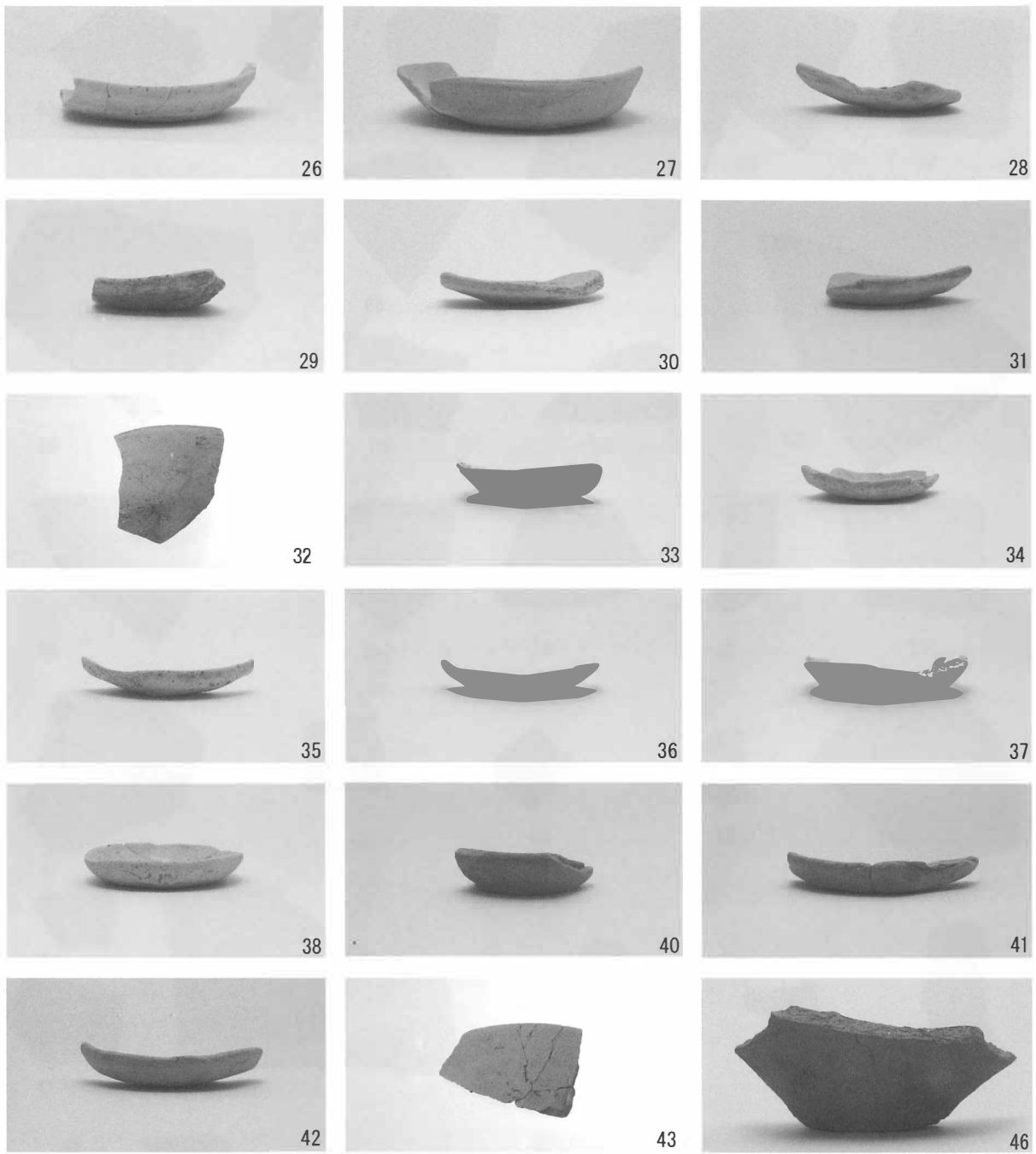
3 トレンチ 堀跡 近景 (南東→)



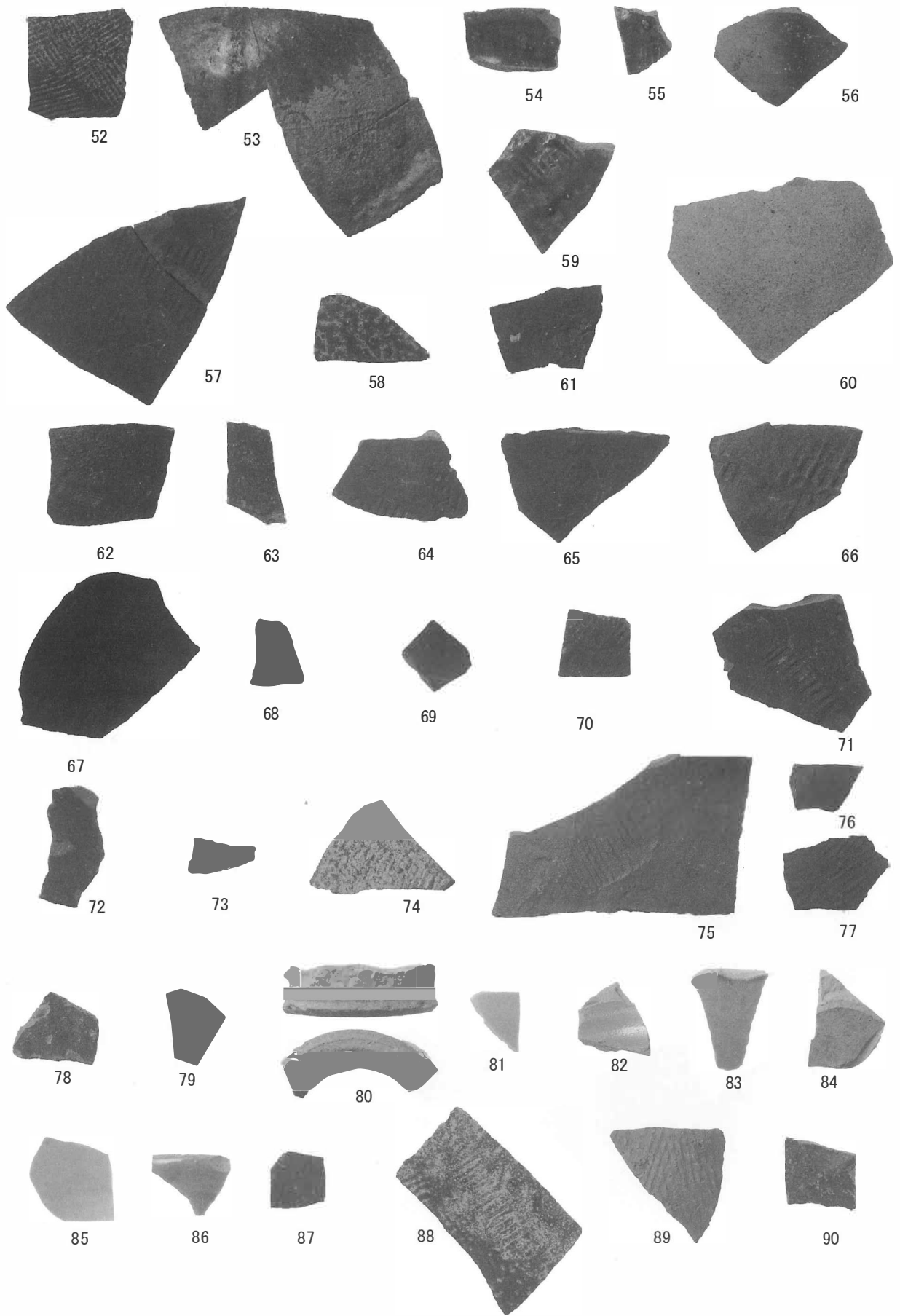
3 トレンチ 土坑付近の礫出土状況 (南→)



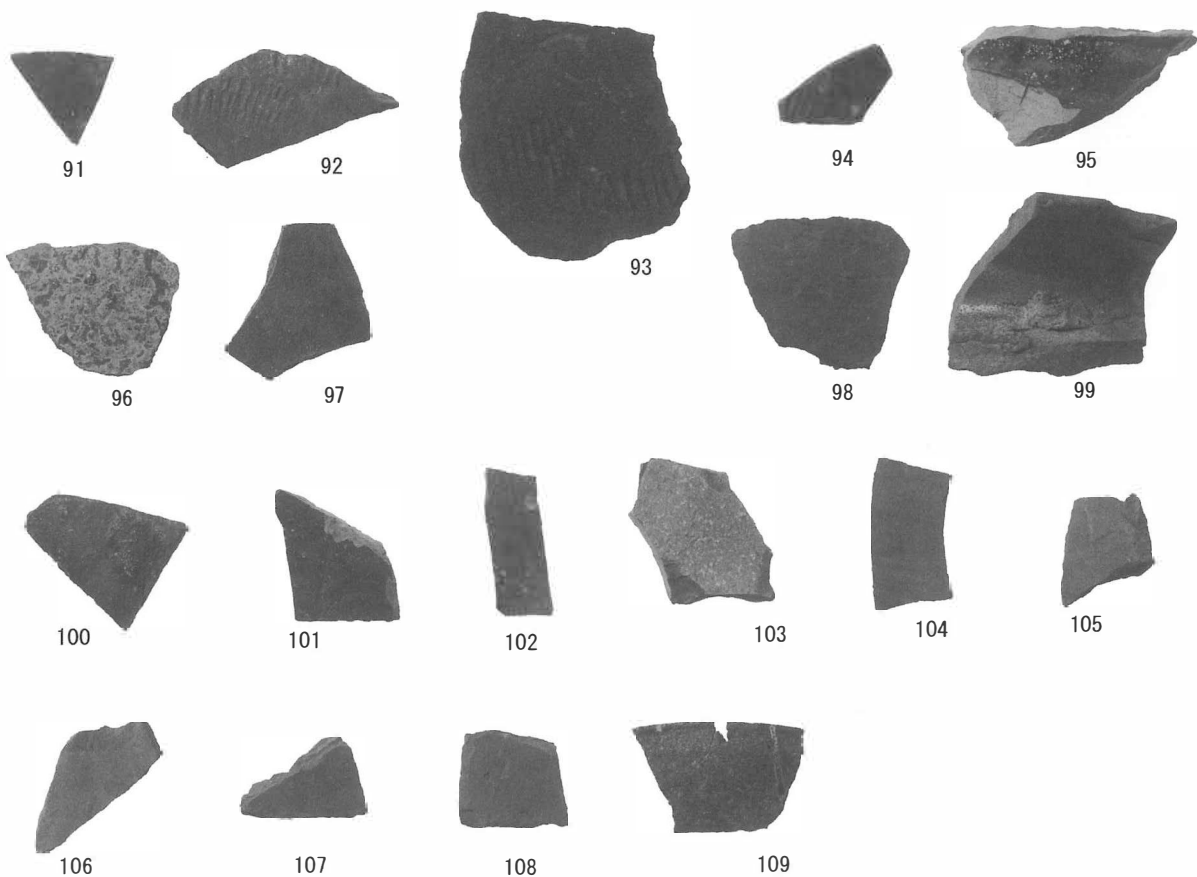
写真図版 24 第7次調査出土遺物 (1)



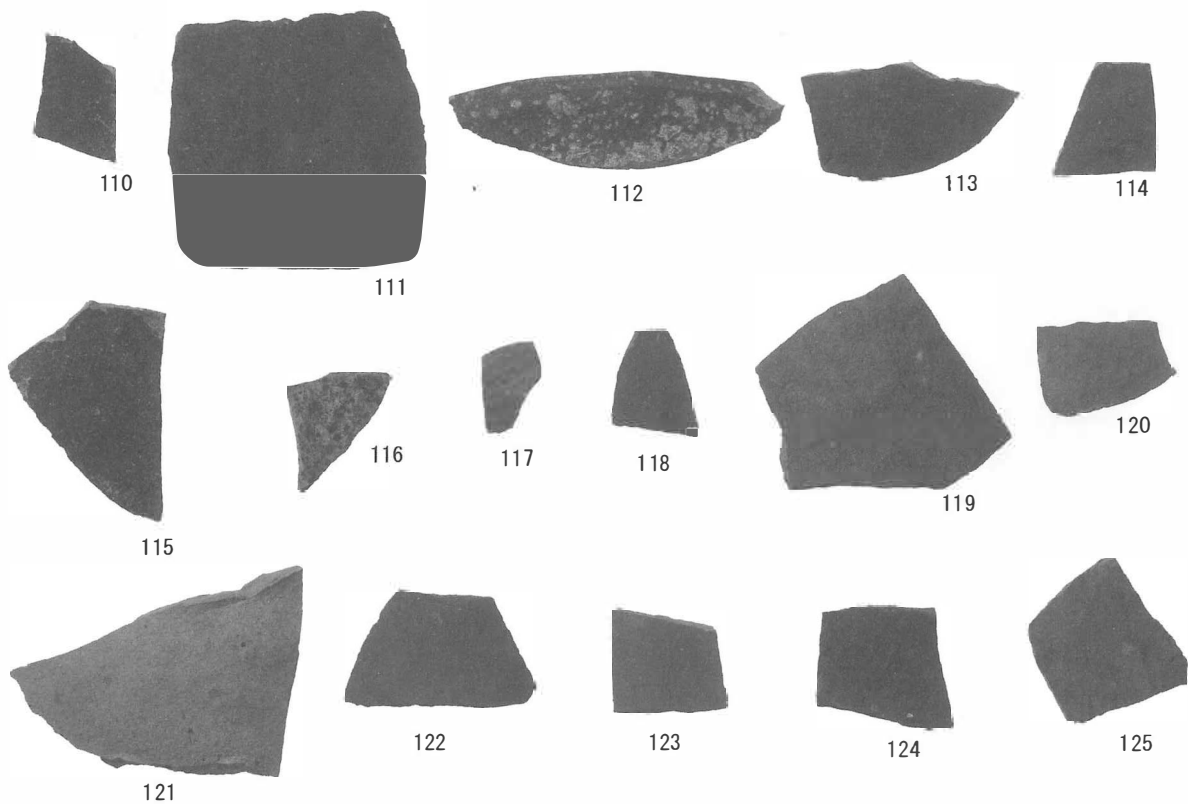
写真図版 25 第7次調査出土遺物(2)



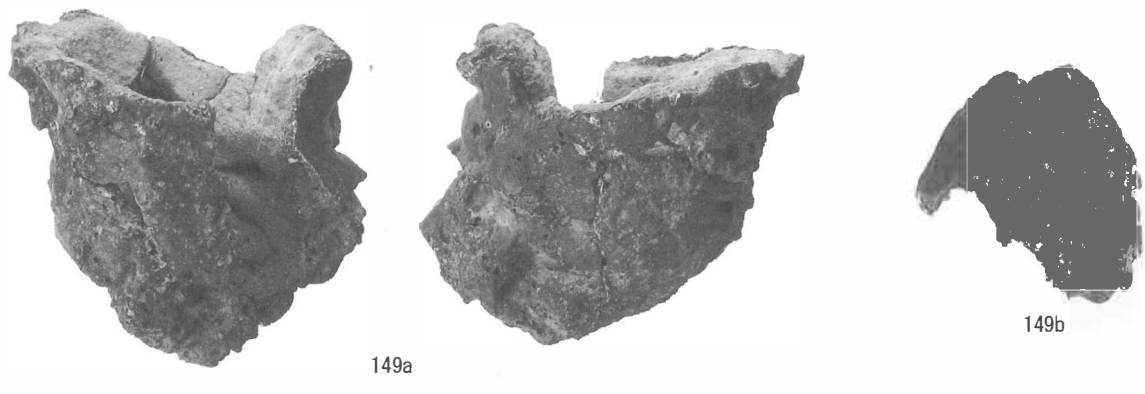
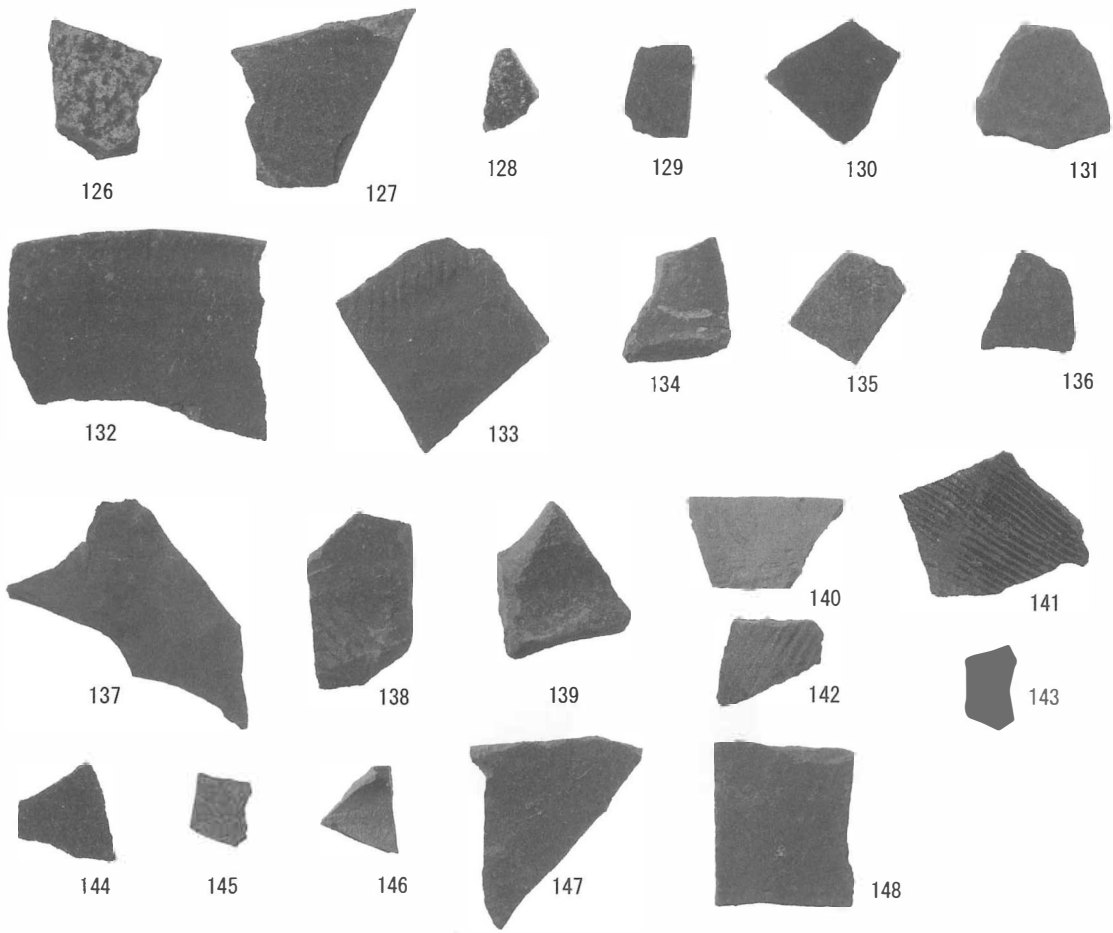
写真図版 26 第 7 次調査出土遺物 (3)



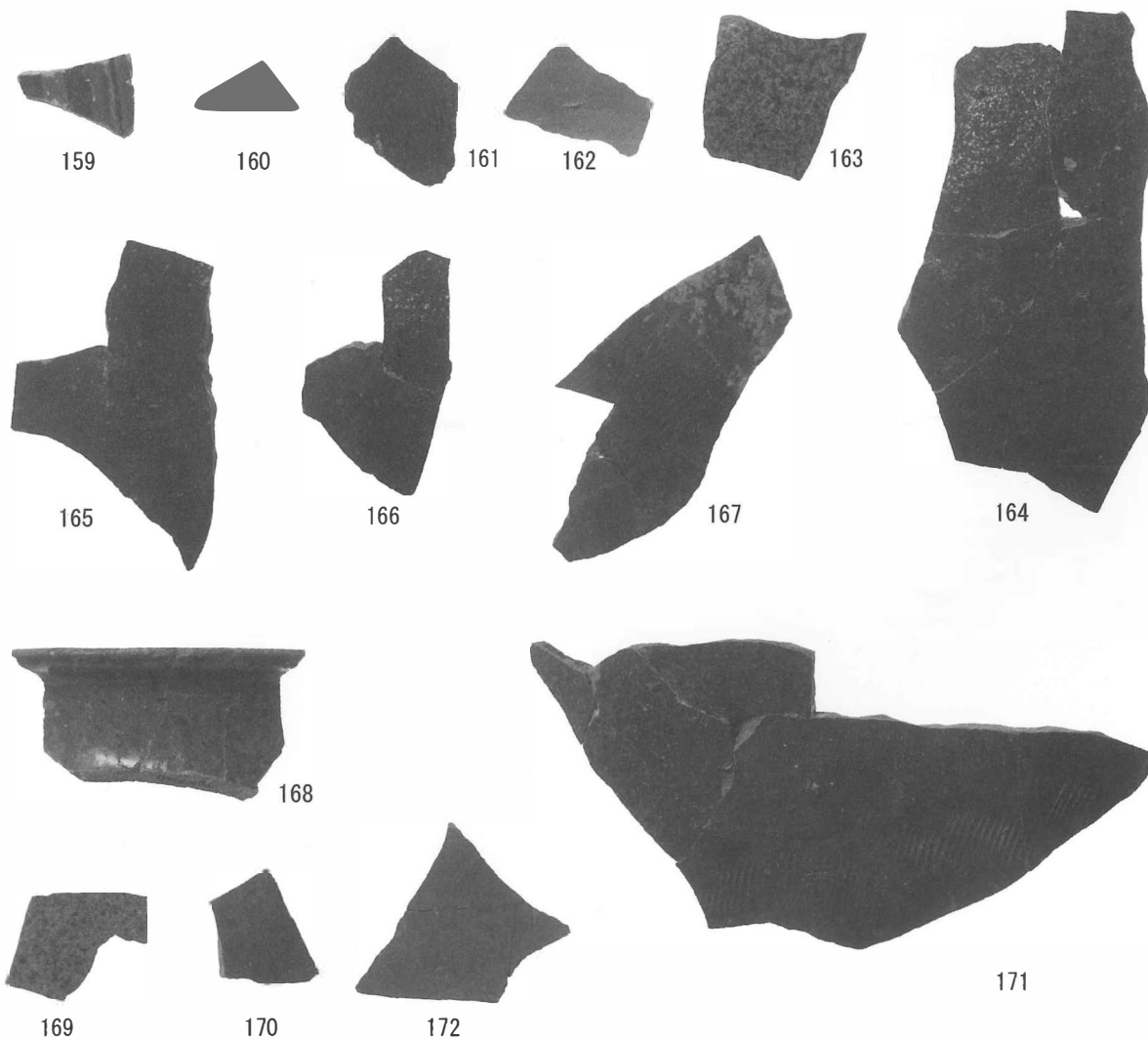
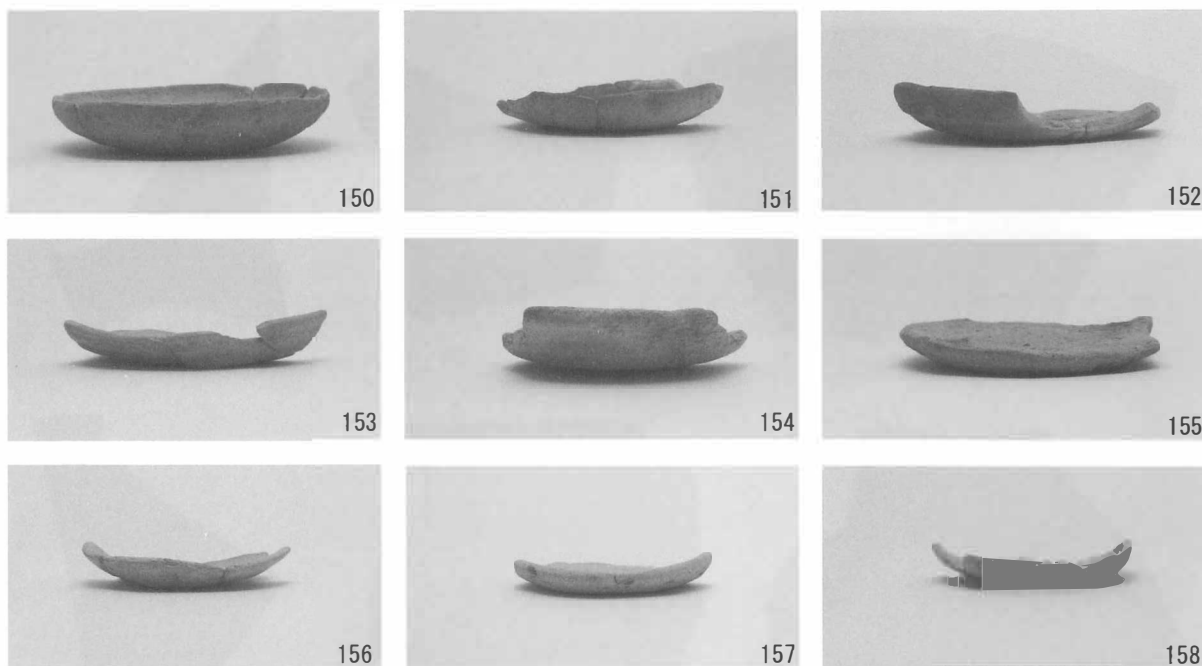
第7次調査遺物写真(4)



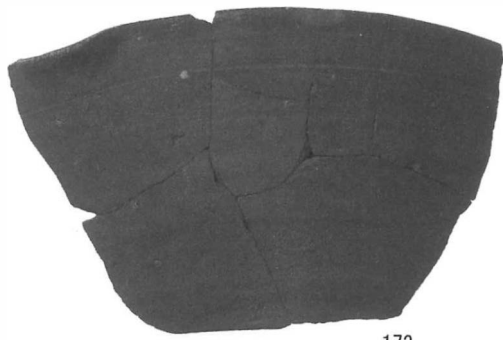
第8次調査遺物写真



写真図版 28 第9次調査出土遺物 (1)



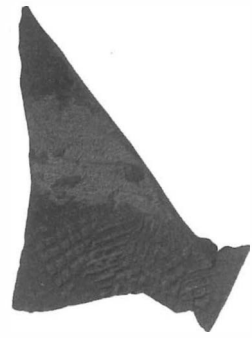
写真図版 29 第 10 次調査出土遺物 (1)



173



174



179



175



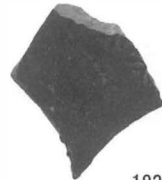
176



180



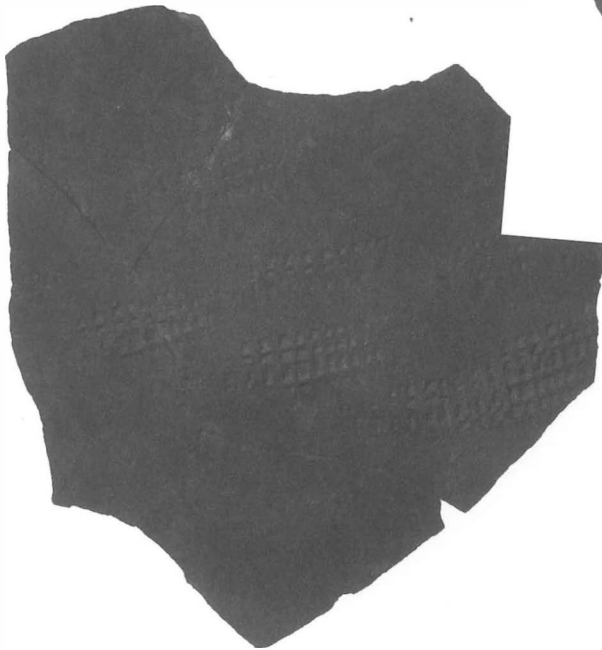
177



183



182

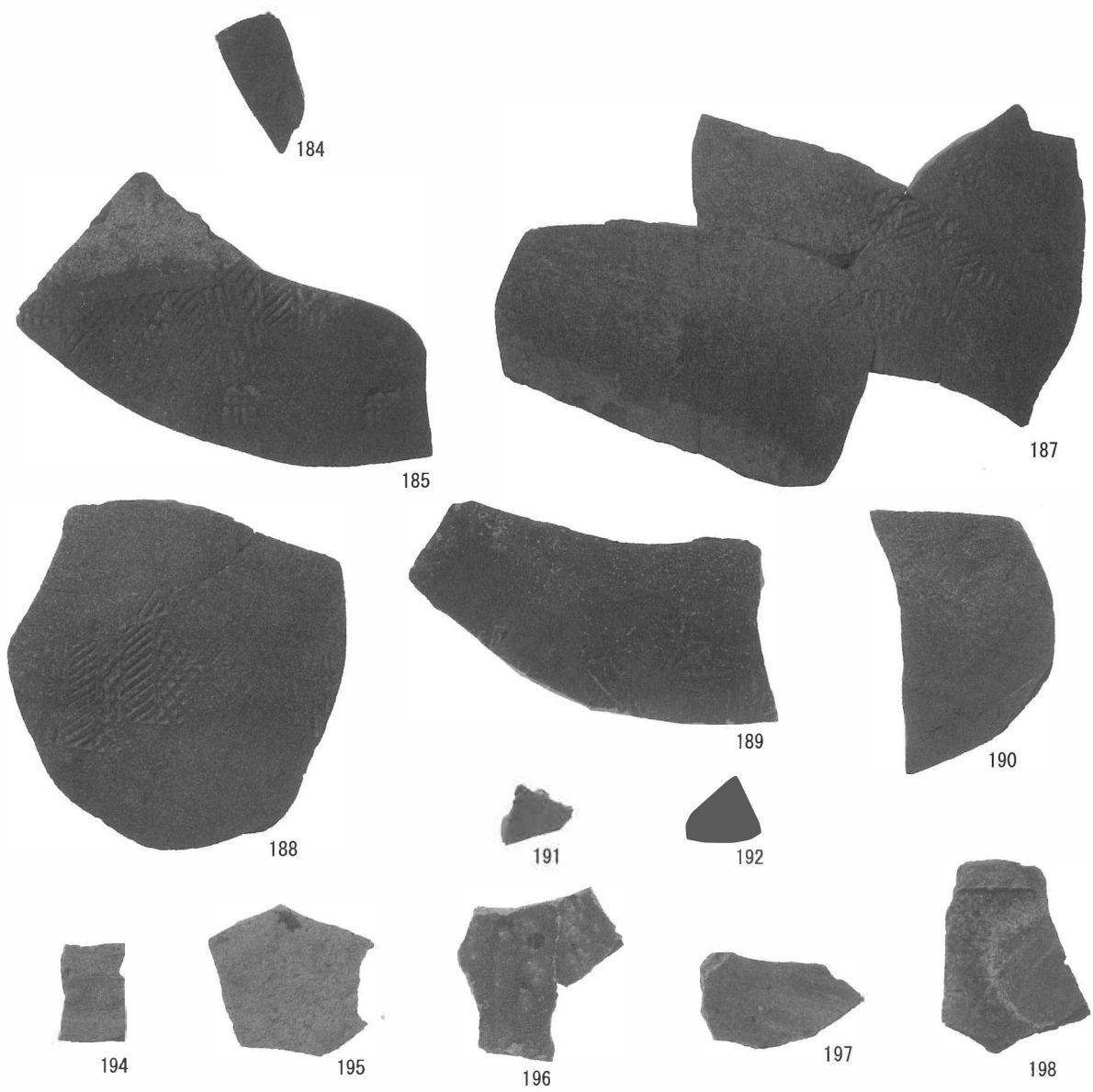


178



181

写真図版 30 第 10 次調査出土遺物 (2)



写真図版 31 第 10 次調査出土遺物 (3)

報告書抄録

ふりがな	ひらいずみいせきぐんはくつちょうさほうこくしょ たかだちあと							
書名	平泉遺跡群発掘調査報告書 高館跡							
副書名	第7～10次内容確認							
巻次	総括編1							
シリーズ名	岩手県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第157集							
編著者名	菊池貴広、櫻井友梓、村上拓							
編集機関	岩手県教育委員会							
所在地	〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1							
発行年月日	西暦2020年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査整理 期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかだちあと 高館跡	いわてけん 岩手県 にしわいぐん 西磐井郡 ひらいずみちやう 平泉町 ひらいずみあざ 平泉字 やなぎのこしよ 柳御所 ちない 地内	03402	NE76-0055	38度 59分 47秒	141度 6分 53秒	2014年5月 11日～ 2019年3月 30日	611.7㎡	内容確認調査
所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
高館跡	城館跡	平安時代	・堀跡 ・溝跡 ・整地層 ・柱穴 ほか	かわらけ 国産陶器（渥美・常滑 など） 中国産陶磁器（白磁・ 青白磁・中国陶器） など		・高館跡の丘陵を廻る堀 跡の位置が把握でき た。 ・12世紀代に高館跡が機 能したことが明確に示 され、その ^{いじょう} 圍繞範囲の 想定が可能となった。 ・中世城館としての高館 跡と12世紀代の機能 とが把握できた。		
要約	<p>高館跡の内容確認調査の発掘調査報告である。本報告書は総括編1及び2から構成され、本書は遺構及び遺物の事実記載を中心にしたものである。</p> <p>柳之御所遺跡に隣接する高館跡で、柳之御所遺跡と同時期にあたる12世紀代の堀跡を検出し、その時期や位置を特定する材料を得ることができた。調査成果から、遺跡は丘陵頂部の平坦面として確認できる範囲が大規模な堀によって囲まれることが確認できた。遺物の多くは12世紀後半代とみられる特徴をもち、堀の時期等を推定する材料を得た。これにより奥州藤原氏の政治行政の中心として機能した柳之御所遺跡堀内部と、関連する堀外部が機能した段階と同時期に、隣接する高館跡においても大規模な堀が廻る施設が所在、機能したことが把握できた。また、12世紀代の遺構を壊す、より新しい時期の中世後期とみられる遺構を確認することができた。これらの成果は既往の高館跡の調査成果をより具体的に示す内容で、高館跡の様相を明らかにする成果となった。</p>							

岩手県文化財調査報告書 第157集

平泉遺跡群発掘調査報告書

高 館 跡

—第7～10次内容確認調査 総括編1—

印刷日 令和2年3月30日
発行日 令和2年3月30日
発 行 岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課
〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1
電話 (019) 629-6177 (代表)
印 刷 有限会社セーコー印刷
〒020-0877 岩手県盛岡市下ノ橋町2-23
電話 (019) 651-3606